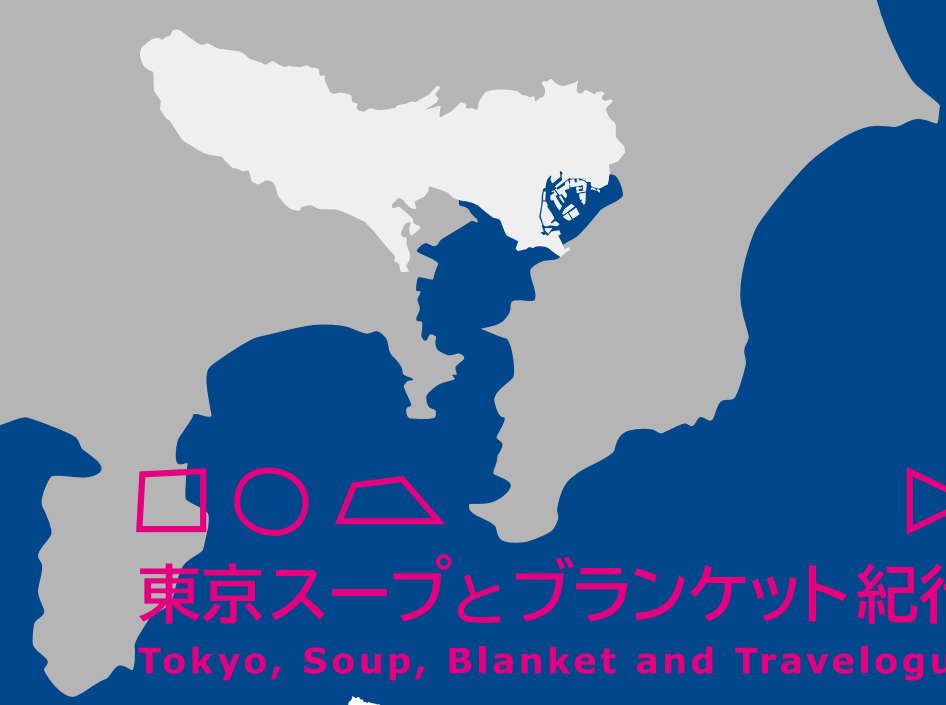
東京スープとブランケット紀行

2014–2017



東京スープとブランケット紀行 2014 – 2017

Tokyo, Soup, Blanket and Travelogue

2017.10.14 江古田斎場

一番近い隣人であり、お互いの区別がつかなくなるほどに、過ごし暮らした果てのあこがれの猫、まぷ（享年22歳）のなきがらを抱えて、東京をさまよっていたわたしが、街から聞こえる他愛のない会話の重なりから、その先に透けて見える世界の経過が幾つもあることに気付くまでの、血液が10万キロメートルの血管を一巡りする時間と同じ、わずか3分の旅が、4年間続いた。それが、「東京スープとブランケット紀行」だった。

朽ちては、芽生える、東京の猫

東京スープとブランケット紀行　ディレクター　羊屋 白玉

猫の名前は、「まぷ」である。名付けの理由は思い出せない。そして生粋の江古田生まれの猫である。

手のひらにおさまるくらいの子猫のときから、まぷは、半野良の道を選んでいた。

抱きかかえて外に出ると、後ろ足をばたばたさせて、地上に降り立ち、うろうろし、やがてわたしの膝に前脚を置くのが、帰宅の合図だった。

わたしたちは、毎日それを繰り返していた。やがてそのうち、まぷは、街を自由に闊歩するようになり、縄張りとやらも広がっていった。

カラスに飛びかかって、黒い羽が舞い散る早朝。

イヌと取っ組み合いをして、陽炎の中、砂埃が立ちこめる昼下がり。

ネコを半殺しにして、全身の毛を逆立てて吠えている月夜。

かと思えば、数少ない友人のガマガエルを、家に招き入れ、夜な夜なの語らいを楽しんでいた。それは、深夜のラジオのようであり、わたしは、拝聴しながら眠りについていた。

数日帰らぬ日々が続いたことがあった。猫探しのポスターを近所に貼っていると、朝日を浴びながら、環七をゆうゆうと歩いてくる姿に、気が抜けて涙がこぼれた。その時からわたしは、わたしがまぷに出会っただけではなく、まぷのほうからわたしのもとへやって来たのではないか、とも思い始めた。

「人、花をみる。花、人をみる。」という言葉がある。まるで、主もなく客もない、お互いの分別のない暮しが22年間続いた。

まぷの命が閉じられる最後の5日間、看病のためにスープを鍋ごと持って来てくれた友人がいた。体温が下がってゆくまぷを、ブランケットで包んだり、湯たんぽで温めてくれた友人がいた。他、何十人もの、わたしの友人であり、まぷの友人でもある人たちが訪れ、横たわるまぷを囲み、思い出話を肴にお酒を飲み、まもなく来るまぷの弔いをどうするか、そして、わたしたちの弔いはどうありたいのかを話しあった。そして、結論もでないまま、まぷの死に立ち会った。自分たちの未来の死にも立ち会うような、生活の中の無意識を、覚醒させられた5日間だった。

わたしは、一日まぷのなきがらと過ごし、翌早朝、スコップを持って集まった友人達と、まぷの散歩道の桜の樹の下に、お見舞いの大漁の鮪といっしょに、ブランケットごと埋葬した。

最近、友人が、長年つれそった猫を、ひとりで看取ったと聞いた。昨今、ひとりきりの看取りは、人間の世界では珍しくない。わたしは、たくさんの友人たちと放ち合った珠玉の言葉たちを、忘れることはできない。そして、同時に、Rest In Peace「安らかにお眠りください。」という言葉は、しばしば、生きているものの欺瞞である。ということも。

桜の樹が多い江古田の街。そもそも東京が桜の街なのかもしれないとも思うが、春の風物詩として、思い出すのは、桜吹雪の下で、まぷがよく昼寝をしていたこと。

まぷのお気に入りだったその桜の樹は、今はもうなく、江古田の景色がまたひとつ消えました。でも、いつでも案内しますよ、朽ちては芽生える江古田の街と四季の風物を。

そして、あなたの街も、いつか、案内してください。

羊屋 白玉（ひつじや しろたま）
シアターカンパニー「指輪ホテル」芸術監督・演出家・劇作家・俳優
劇場での公演の他、国内外の現代美術の芸術祭に招聘され、サイトスペシフィックな環境で演劇作品を発表している。人や物や街など、あらゆる現象の看取りや喪失、目に見えない境界などに関するネガティブなテーマの取り組みを演劇を通して生成している。アジアの女性舞台芸術家たちとのコレクティブを目指す亜女会（アジア女性舞台芸術会議）代表。ニューズウィーク日本誌で「世界が認めた日本人女性１００人」に選ばれている。

My closest companion and beloved cat Mapu, who had lived with me for so long that there was no separation between us, died at the age of 22. I carried his body as I wandered through Tokyo, my journey was overlaid with scattered overheard conversations from the city and over time, I witnessed transposed worlds coming to life before me. In the same amount of time it takes for blood to travel 100,000 km through one's veins, I repeated my three-minute journey for 4 years. This was my "Tokyo, Soup, Blanket and Travelogue."

Decay and Flourish: Tokyo Cat

Shirotama Hitsujiya

My cat's name was Mapu. I can't remember why I chose that name. He was born and bred in Ekoda.
Since he was a kitten, small enough to fit in the palm of my hand, Mapu had chosen a life of a half-stray.
When I carried him outside, he would flail his hind legs. I would put him on the ground and he would wander around. When he came and put his front paws on my lap, that would be the signal to go back home.
We repeated this routine, every day. Gradually, Mapu began to stroll through the city freely, broadening his territory.

One early morning, he attacked a crow and black feathers rained from the sky.
An early afternoon was thick with dust as he confronted a dog under the blazing sun.
On a moonlit night, he howled with all his fur standing on end after half killing another cat.
And then there was a night he invited his few toad friends into the house and enjoyed their conversation.
I listened to them like a late-night radio show as I dipped into slumber.

And then there was a stretch of days when he didn't come home at all. I was putting up posters for a lost cat in the neighborhood when he came lumbering casually along the highway in the morning light. When I saw him, I was so overcome that tears spilled from my eyes. Since that episode, I began to think that it was not only I who met Mapu, but also Mapu who sought me out.

There's a saying that goes, "People look at flowers. Flowers look at people." There is no subject or object and that's how we lived, without separation between us, for 22 years.

Over the final five days of his life, one friend of mine brought a whole pot of soup for us. As Mapu's body temperature began to drop, another friend wrapped him in blankets and warmed him with a hot water bottle. There were many others, my friends who were also Mapu's friends, who came to visit and surrounded Mapu, with reminiscences as an accompaniment to drinking and we discussed how to handle Mapu's imminent funeral as well as our wishes for our own funerals. And, without ever having arrived at an agreement, we met with Mapu's death. It was an eye-opening five days that made us face our own future deaths, and the unconsciousness embedded in our day-to-day lives.

I spent a day with Mapu's body. Early the next morning, accompanied by several friends who had come with their spades, I buried Mapu wrapped in his blankets under a cherry blossom tree along his usual strolling route, together with a big catch of tuna he received as a get-well gift.

I recently heard how a friend took care of her long-time cat by herself until its death. Nowadays it's not unusual for people to be cared for by one person to their death in the human world. But I will never forget all of our friends who came to visit and the gems of their comforting words. And at the same time, I won't forget how the words "rest in peace" are used to deceive by those who are among the living.

Ekoda is a city full of cherry blossom trees. Tokyo itself may be a city of cherry blossoms, but what I always think of as a symbol of spring is Mapu's frequent naps under a shower of cherry blossoms.

Mapu's favorite cherry blossom tree is no longer there. It is another one of the lost landscapes of Ekoda. But I will happily be your guide there, in the decaying yet flourishing city of Ekoda and the symbols of the four seasons.

And some day, please guide me through your town.

Shirotama Hitsujiya

Director, "Tokyo, Soup, Blanket and Travelogue"

Artistic Director of YUBIWA Hotel theater company, Hitsujiya is a director, playwright and performer. In addition to her works presented in theaters, she has been presented at national and international contemporary arts festivals and she has created site specific productions. Her theater pieces deal with dark themes and invisible boundaries, incorporating the perceptions and losses of people, places and things. She is a founding member of the Asian Women Performing Arts Collective (Ajokai) and was named one of the 100 Japanese Women Recognized by the World by Newsweek Japan.

21世紀の初め、太平洋を挟んだ隣国の東端に位置する芸術の街に起きた悲劇から推測する、
アジア極東に位置する文化都市が迎える2020年。　　**羊屋 白玉**

2001年	9月11日	ニューヨークでの同時多発テロ、通称セプテンバーイレブンとか911とか言われるそれが起きた時、わたしはマンハッタン島の東の端に住んでいた。 テレビをつけると、盛りすぎたソフトクリームがとろけ落ちるように、崩れ落ちる双子のビルが目に入った。そのビルには炎と煙と叫び声とともに、Attackという単語が張り付いていた。攻撃という意味より、発作という意味が近いと思った。まるで、ニューヨークが発作を起こしているようだった。 外に出ると、近所のアフガニスタンレストランの窓ガラスが、砕け散り、銃声が聞こえ、背中が凍った。 原因は、イスラムとカソリックの宗教戦争だとか、聖戦だとか、報じられることも多かったけど、わたしには、なぜかそのようには思えなかった。 1970年代のニューヨークは、芸術の都だったね。街は汚いし、死因の1位はエイズ、2位はレイプだったけど。とよく耳にする。けど、わたしが乗ったのは、タイムマシンではなくエアプレインだったので、2001年の無印良品がある清潔なニューヨークだった。 今でも、ニューヨークは、アーティストの街だろう。でもその黄金期はあの不潔な時代を指し、その後、ベトナム戦争を経て、ジュリアーニ市長が、マリファナ、エイズ、レイプ、拳銃、そして、アーティストも、マンハッタン島から、追いやった。でも追いやっただけで、アーティストは、ブルックリンで、クィーンズで生きていた。わたしはそのことに、ぼんやりと、勇気づけられていた。サバイバルするアーティストに。 悲しみに暮れている街の中にいると、冷静に、この島の外のことを考えるのは難しく、この街から、追い出されているのは、アーティスト以外にもいたということに気付かなかった。
2006年	3月8日	石原都知事のもと、東京都議会でオリンピック開催招致を決議。
	4月1日	東京都庁内に招致本部設置。
2008年		2008年、わたしはふたたびニューヨークにいた。この時は、マンハッタン島のどまんなかに住んでいた。あれからあの街がどうなったのか確かめたかった。その頃ニューヨークは、単純に言うと、生き直そうとしていた。そして、11月4日、オバマが当選したその夜を徹しての、長い長いパレードが忘れられない。2001年最悪のニューヨーク、2008年最高のニューヨーク、その両方をわたしは見て歩いた。2008年オバマ到来、最高のニューヨークのその裏で、2001年にはひとっこひとりいなかったブルックリンの倉庫街は、ハイファッションエリアになっていた。スラムにもスターバックスができて、のぞき部屋はディズニーショップに。わたしはまだ、ジェントリフィケーションという言葉を知らなかった。
2009年	4月16日	国際オリンピック委員会（IOC）評価委員会による現地調査が始まり、招致委員会が立候補開催計画書に関する説明と、「環境対策」「世界一コンパクトな大会」「1964年東京五輪の施設の再利用」などのアピールをおこなった。麻生太郎首相が政府として全面的に支持すると訴え、「必要な資金は手当てする」と国の財政保証を約束するアピールをおこなった。
	4月19日	IOC評価委員会による現地調査4日目は、治安などに関する説明を行った。評価委員会委員長らの記者会見では、東京について、「質の高い計画で、非常にコンパクトだと感じた。すべての関係者にとって優しい計画だ」「東京のコンセプトに感銘した」「老若男女の根強い支援を感じた」など、高く評価した。
	6月17-18日	IOC委員に対してプレゼンテーションを行い、世論の支持が高まったことや、治安の良さ、財政の保証などをアピールし、シカゴと共に高評価を得た。
	9月2日	IOC評価委員会が、投票時に参考となる評価報告書を作成し、東京は半径8km以内にほとんどの競技会場を集約させたコンパクトな会場計画や、犯罪率の低い治安の良さ、政府による確実な財政保証、環境面などで評価された。一方、世論の支持やメインスタジアム周辺の輸送面、選手村の規模などに懸念があるとされた。

		オリンピック開催にむけての涙ぐましい努力のその裏で、歌舞伎町周辺においては、昼夜働いている焼肉屋や韓流ショップ店の青年、彼らの多くは四世であるにもかかわらず、しつこい職質を浴びせられていた。そして、日常に被災したとしか言いようのない路上生活者たちは虫けらのように移動させられていた。歌舞伎町浄化が、公然と始まっていた。 もちろんワーキングプア支援と言うレベルではなく、目障りなのでどこかへ行け、と、あまりにもストレートに民族浄化をイメージさせながらも、平然と、犯罪率の低い治安の良さを目指すと言ってはばからず、オリンピックは経済効果だからね、と、街の長達が言っていたのを、わたしは忘れない。
	10月2日	デンマークの首都コペンハーゲンで行われた第121次IOC総会で、各都市の最終プレゼンテーションが行われた。その後、ロゲ会長や立候補都市を抱える国の委員以外のIOC委員による投票が行われ、東京は2回目の投票で落選した。
2011年	3月11日	太陽は核融合している。と書かれている本を読んだ頃、津波が、福島の原子力発電所をも襲った。まるで、現代の人類は太陽に近づいて翼をやかれたイカロスのようだと思いすぎたせいか、そんな悪夢を毎晩見ていた。神話の力はすごい。
2012年	5月17日	わたしの猫、まぷ、大往生。（享年22歳）
	12月18日	猪瀬直樹都知事就任
2013年	9月7日	ブエノスアイレスで開かれた第125次IOC総会において、開催地選定投票が行われた。イスタンブールとマドリードと東京の決選投票であった。現地時間午後5時20分頃、開催都市は東京、と発表された。
	12月18日	猪瀬直樹都知事退任
2014年	2月9日	舛添要一都知事就任
2015年	7月17日	安倍首相は、東京オリンピックメイン会場となる予定の、新国立競技場建設計画の白紙化を発表する。
2016年	6月21日	舛添要一都知事退任
	7月31日	小池百合子都知事就任
	8月21日	小池百合子都知事と安倍総理らがリオデジャネイロオリンピックの閉会式に出席した。
2017年	9月6日	東京都豊島区は、池袋駅前の「池袋西口公園」を再開発し、クラシックのコンサートなどができる野外劇場として整備する計画を発表した。2020年東京五輪・パラリンピック前の2019年秋の完成を目指す。

2001年に、ニューヨークがほぼ完全に無菌になったその瞬間に、空から何が突っ込んできたのかは、言うまでもない。そしてその後遺症の発作はいまどうなっているのか。

東京もまた、歯止めのきかない、無菌状態への欲求。そのための殺菌と浄化。監視カメラも職務質問もホームレスの追放もなくなってはいない。悪や不浄、異質なものや、役に立たないものが消えた時、かつてのマルチエスニックでマルチセクシャルな東京が、911に向かうか逸れるか。

それを待ってはいられない。

2001	Sept. 11	During the simultaneous acts of terrorism in New York which have commonly come to be called "September 11" or "9-11," I lived on the eastern edge of the island of Manhattan. I turned on the TV and saw the Twin Towers, crumbling like melting mounds of soft ice cream. The word "attack" was placed on those buildings, along with the flames and the smoke and the screams. I felt that "seizure" was the more fitting definition of the word "attack" than "assault." It was as if New York was having a seizure. When I went outside, the glass windows of the neighborhood Afghan restaurant had been smashed and I heard gunshots, and my back froze. They reported that the reason for the attack was a religious war between Islam and Catholicism, or that it was a Holy War, but to me, it didn't seem that way. New York in the 1970s was a city of artists. The city was dirty, the number one cause of death was AIDS and the number two cause was rape, but it was a great time. I've heard a lot of people say this. But I had boarded an airplane, not a time machine, and New York in 2001 was clean and had a Muji store. New York is still a city of artists. But that Golden Age was also a time of filth and after that, the Vietnam War, marijuana, AIDS, rape, guns, and artists were run out of the island of Manhattan. But they were only chased off the island, and the artists kept living in Brooklyn and Queens. I was faintly encouraged by this. By the survival of artists. In the midst of the grieving city, it was difficult to think rationally beyond this island. I didn't realize that the artists were not the only ones that had been forced out of the city.
2006	Mar. 8	Under Tokyo Governor Ishihara, the Tokyo parliament announced its bid to host the Olympics.
	Apr. 1	The headquarters for the Olympic bid is established in the Tokyo Metropolitan Government Office.
2008		In 2008 I was in New York again. This time I was living right smack in the middle of Manhattan. I wanted to find out what happened to the city since my last stay. To put it simply, the city was trying to start a new life. And I cannot forget the long parade of people on November 4, the night Obama was elected President. 2001 was the worst New York, 2008 was the best New York, and I walked, having seen both. By the time Obama was elected in 2008, the warehouses in Brooklyn that no one had ventured to in 2001 had been converted into a high fashion area. There was a Starbucks in the slum, a Disney Store where a peep show used to be. I didn't know the word "gentrification" yet.
2009	Apr. 16	The International Olympic Committee (IOC) Evaluation Commission begins auditing hotels in Tokyo. The Olympic Bid Committee unveils its candidacy file and hosting plan as well as its "Environmental Measures," "The most compact Olympics in the world," "Reusing the facilities from the 1964 Tokyo Olympics" initiatives. Prime Minister Taro Aso proclaimed that the Japanese government would fully support the bid. "We will provide all necessary funds" he said and gave the nation's financial guarantee to the project.
	Apr.19	On the fourth day of the International Olympic Committee (IOC) Evaluation Commission's audit, there was a presentation on security. In the evening, Nawal El Moutawakel, the president of the evaluation commission and others of the commission held a press conference. They gave positive assessments of Tokyo as an Olympic site candidate saying "this is an excellent plan, and we felt it was extremely compact. It is a hospitable plant for everyone involved," "we were deeply impressed by Tokyo's concept," "we felt the deeply-rooted support for this plan by men and women of all age."
	June 17-18	The Bid Committee gave a presentation to the IOC, citing rising favorable public opinion, high safety measures, and financial compensation, capturing high ratings along with Chicago.
	Sept. 2	An assessment report is created timed to the IOC Evaluation Committee's selection meeting. The report is commended for its plans for a compact venue with event arenas located in a cluster within an 8km radius of Tokyo, high security measures with low crime rates, guaranteed financial support from the government, and environmentally friendly footprint. On the other hand there were concerns regarding public opinion, transportation around the main stadium area, and the size of the Olympic Village.

		While there were dedicated efforts to prepare the city to host the Olympics, behind the scenes, in the neighborhood of Kabuki-cho, young Koreans who worked day and night sleeplessly in the barbecue and other Korean shops were being relentlessly interrogated, never mind that many of them had already been in Japan for four generations. And the homeless population, who had fallen victim to daily life, were forced to move as if they were nothing but vermin. The clean-up of Kabuki-cho had officially begun. This was not at the level of supporting the working poor. I will not forget how the leaders of the city used the Olympics and its boost to the economy to push for low crime rates and public safety which led to people being told to get out of sight because they were an eyesore. It was a blatant ethnic cleansing of the streets.
	Oct. 2	At the 121st IOC Session in Denmark's capitol Copenhagen, each candidate city made its final presentation. Afterwards, IOC President Jacques Rogge and other IOC members except for those from the candidate countries voted. Tokyo was eliminated from selection in the second round of voting.
2011	Mar. 11	The sun creates energy through nuclear fusion. I was reading about it in a book when the tsunami rocked the nuclear power plant in Fukushima. I couldn't help but think about how modern man had flown too close to the sun like Icarus and his burnt wings. I had nightmares about this every night. The power of mythology is immense.
2012	May 17	My cat Mapu died at the age of 22.
	Dec. 18	Naoki Inose is elected Governor of Tokyo.
2013	Sept. 7	At the 125th IOC session in Buenos Aires, there was a vote for the host city for the Olympics. The final three candidates were Istanbul, Madrid and Tokyo. At 5:20pm local time, the result was announced. The Olympics will take place in Tokyo.
	Dec. 18	Naoki Inose resigns as Governor of Tokyo.
2014	Feb. 9	Yoichi Masuzoe is elected Governor of Tokyo.
2015	July 17	Prime Minister Abe announces the nullification of the plans for the New National Stadium, which was to serve as the main venue for the Tokyo Olympics.
2016	June 21	Yoichi Masuzoe resigns as Governor of Tokyo.
	July 31	Yuriko Koike is elected Governor of Tokyo.
	Aug. 21	Tokyo Governor Yuriko Koike and Prime Minister Abe attend the closing ceremonies of the Olympics in Rio De Janeiro.
2017	Sept. 6	In Toshima city, Tokyo, the Ikebukuro West Exit park in front of the Ikebukuro station goes into redevelopment and plans are unveiled for it to be renovated into an outdoor stage for classical music concerts. The aim is to complete this project by autumn of 2019, in time for the 2020 Tokyo Olympics / Paralympics.

In 2001, New York was almost completely sterilized. I don't have to tell you what came crashing from the sky. And what are the aftereffects now, from that attack?

In the city of Tokyo, too, there is an unstoppable desire for purity. Cleaning up and sterilizing the city to that end. Surveillance cameras, police questioning, and the displacement of the homeless have not disappeared. When all the bad and filthy and diverse and the useless have been eradicated, will the once multiethnic and multisexual city of Tokyo head towards 9-11, or swerve?

I can't sit back and wait.

映像

すべての映像作品はこちらのリンクにてご覧いただけます。
https://www.artscouncil-tokyo.jp/ja/what-we-do/creation/hubs/tokyo-soup/18121/

とむらい

撮影：杉田 協士　字幕英訳：アヤ・オガワ

「とむらい」は、東京スープとブランケット紀行が提案する「失った人や時間などについて食事をしながら語りあう場に置かれるもの」として作られた作品。これに対して賛同する四人の作家（狩野哲郎、高橋つばさ、羊屋白玉、小林エリカ）により制作された。作品はそれぞれ「春分」「夏至」「秋分」「冬至」という名前がつけられている。
これらの作品を食卓に置き、食事を囲みながら、なくなった物事について、そして、それらをとむらった出来事についての会話を、映画監督の杉田協士が、撮影、編集したオーラルヒストリーフィルム。

「友達のお父さんの死について」（約12分）
　　２０１５年9月３０日　東京都・文京区　草棚家にて
　　語り手　草棚 亮・佐智子　　聞き手　羊屋 白玉

「娘さんの死について」（約20分）
　　２０１６年3月4日　茨城県・取手市　小林家にて
　　語り手　小林 えつ　　聞き手　羊屋 白玉

Rest In Peace, Tokyo 2017

監督・編集：須藤 崇規　撮影：三上 亮、冨田 了平　字幕英訳：アヤ・オガワ（約105分）

2017年5月17日、まぷの命日から始まった公開プログラム「Rest In Peace, Tokyo」（全7回）。毎月、江古田に集い、訪れた客人たちと、本プロジェクトの街巡りの象徴であるリヤカーと共に、献立と調理を経て、四季のスープを囲んだ。それは、料理教室のようでもあり、町内の行事のようでもあり、お葬式や葬列や直会のようなものでもあり、送別会のようでもあり、法事のようでもあった。それらなにかしらの出会いと別れのなかで、ためらいながらも泉が湧くように生まれた人々の現象をドキュメントしたフィルムである。

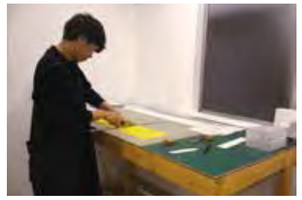
「東京スープとブランケット紀行」2014年から2017年の活動の集積としての、声、視線、匂い、味覚、そして、肌触りの記憶をもとに、記録集とドキュメンタリーフィルムを製作した。
そして、この４年間のささやかな出来事が始まる前に、本プロジェクトのディレクター、羊屋白玉を突き動かした衝動と、そのすべてを閉じ込めた戯曲「Rest In Peace, Tokyo - 安らかに眠ってください。この言葉は、しばしば、生きているものや、ペテン師の騙（かた）りである -」を、この世に一冊だけの本として作品化し、記録集巻末に、原文を収録した。

戯曲

Rest In Peace, Tokyo
- 安らかに眠ってください。この言葉は、しばしば、生きているものや、ペテン師の騙（かた）りである -

文：羊屋 白玉　ブックアートへの昇華：太田 泰友

「東京スープとブランケット紀行」が、プロジェクトとして立ち上がる以前の、羊屋白玉の思索と衝動が言葉として書き起こされ、太田泰友がブックアートへと昇華させている。



太田 泰友（おおた やすとも）
1988年生まれ、山梨県出身。ブック・アーティスト。OTAブックアート代表。2017年、ブルグ・ギービヒェンシュタイン芸術大学（ドイツ、ハレ）ザビーネ・ゴルデ教授のもと、日本人初のブックアートにおけるドイツの最高学位マイスターシューラー号を取得。これまでに、ドイツをはじめとしたヨーロッパで作品の制作・発表を行い、ドイツ国立図書館などヨーロッパやアメリカを中心に多くの作品をパブリック・コレクションとして収蔵している。2016年度、ポーラ美術振興財団在外研修員（ドイツ）。

記録集

東京スープとブランケット紀行　2014-2017

2014年より、東京のいくつかの場所で、失ってはよみがえる場所を訪ね、記憶を採取する助走のような３年間を経て、2017年にひとつのテーマに辿りつく。それは「Rest In Peace, Tokyo」と、名付けられ、叙事詩のように上演された、４年間の活動の記録。
（本書）

東京スープとブランケット紀行
2014.5.17 ～ 2017.3.8

江古田に誕生し、ゆるりと歩んだ３年間の軌跡。
毎月集い、語り、食したスープと共に。
京都より美術家小山田徹さんを招き語り合い、内から外に開いていった景色。
メンバーの記憶が織りなすエッセイを添えて。

2014.12　江古田市場

2015.3.8

2014.9.17

2014.5.17

2014.6.17

2015.4.17

2015.1.17

2014.7.17

2015.8.13

2015.6.16

2015.4.17

2015.9.25

2015.7.13

2015.5.14

2015.12.24

2015.11.11

2015.6.25

2015.6.24

2016.10.6

2016.5.16

2016.2.16

2016.12.19

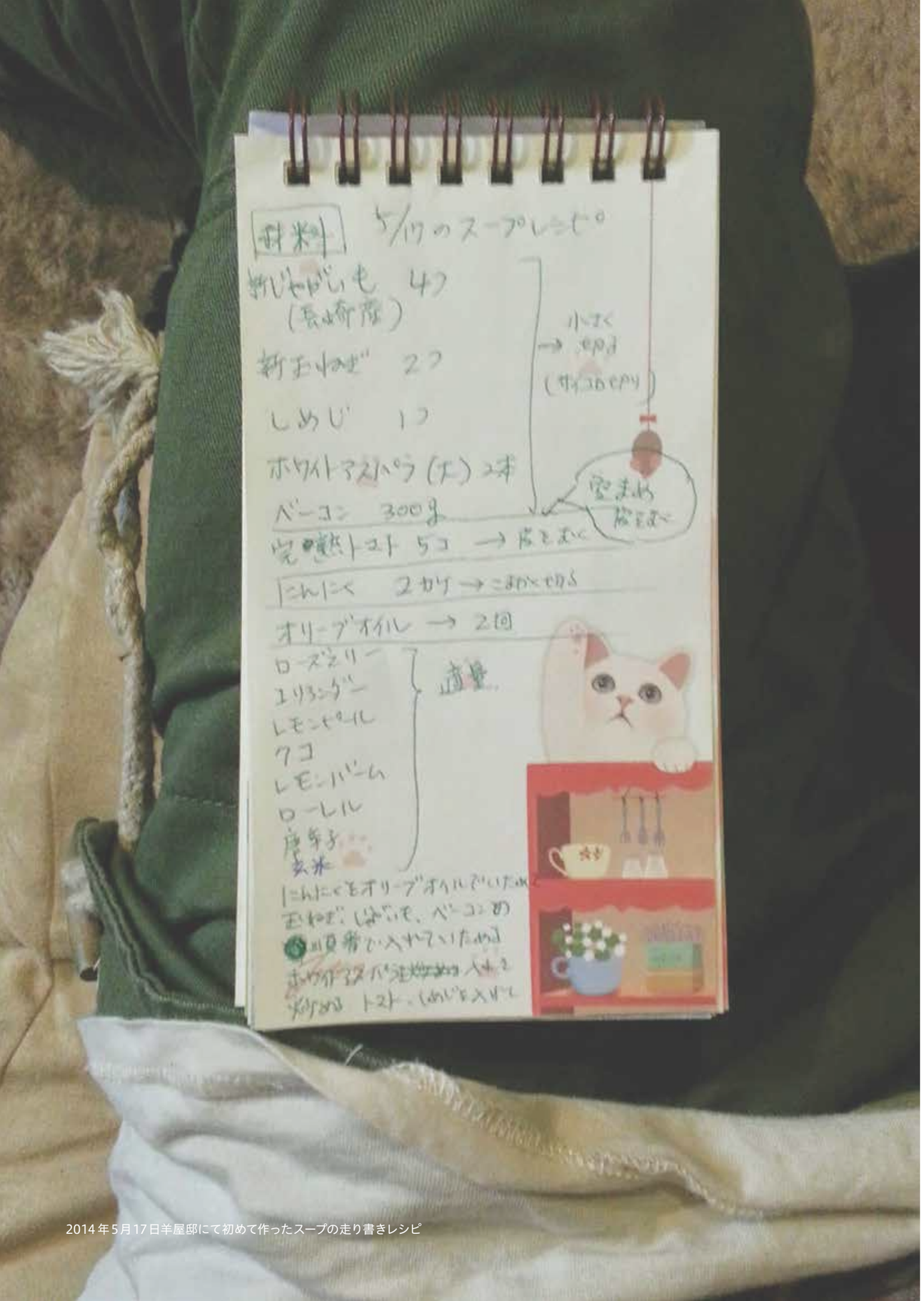
2016.6.8

2016.4.11

2017.3.8

2016.9.13

2016.5.11



2014年5月17日羊屋邸にて初めて作ったスープの走り書きレシピ

スープを巡る話

東京スープとブランケット紀行　チーフアドミニストレーター　宮原 清美

はじめて「スープ」を作ったのは２０１４年5月17日。羊屋さんの愛猫まぷさんの命日。

私はまぷさんにお会いしたことはないが、集った人達の話や想いを聞きながらその日に相応しいメニューを考え台所に立った。

羊屋邸の台所はガスコンロ3つ。はじめてのキッチンで何がどこにあるのやらわからずあれやこれや探しながら作ったことを覚えている。初めましての面々に召し上がっていただき「おいしい」と感想をもらった。台所に立つのは嫌いではない。むしろ好きである。「スープを作る」それがこれからの私の仕事だと理解した。

それから毎月スープを囲むことがプロジェクトの大きな要となった。江古田に繰り出し、町並みを確認しつつ店を巡り、季節の食材を選ぶ。少しずつ馴染みの店が増え、買い出しのルートが分かるようになってくる。そのようにして町と出会い、そのままプロジェクトの記憶となった。

いつしか江古田と羊屋邸を自由に飛び回れるようになった時、私は江古田に引っ越した。「引っ越さなければならない」というやむをえない理由もあったのだが、九州出身の身の上で東京23区のエリア格差ととほうもない住宅情報量に心折れそうになった時、キラリと「江古田」の三文字が見えた。東京の中で唯一「勝手知ったる他人の台所」になりえたのだ。そして江古田は本当のホームになった。

２０１７年。今までの活動を「Rest In Peace, Tokyo」として公開することにした。それは「うち」でやっていたことを「そと」にもってゆくことでもあった。スタートから4年目の5月17日。江古田にあるカフェのキッチンをお借りして「旬野菜のゴロゴロスープ」を作った。いつもと勝手が違う、面子も違う、作る量も倍以上。スープが食卓に並ぶタイミングも考えリハーサルもやった。事前に調理場を確認し、食材を吟味しメニューを考えておく。自由に調理していた羊屋邸とは違い終了後はどっと疲れた。また振る舞うことに注目するばかりに多く作りすぎてしまうこともあった。「少し足りないくらいがちょうどよい。」そう思えるようになったのは3回目から。何でもそうである。「外で頑張りすぎないこと。」つまりは「うち」も「そと」も同じ状態であること。それを体現するうちに疲れて終わるということはなくなった。ふと「社会の中でこのように居ることは難しいけれど、スープを囲んでいる瞬間だけそのように居ることが出来たらどんなに豊かな時間になるだろうか」と思えた。ただ集まってスープを作って食べるだけである。簡単で良い。だがその時間をちゃんと作ることの難しさよ。それぞれの人生の一瞬、あるいは毎日の営みの中のほんの短い時間、時を同じくして集える。みんなで食べれる。そのことがどれだけ貴重な時間であるか。季節を巡って最後の「Rest In Peace, Tokyo みつける」は２０１７年11月17日「冬のあったか白菜スープ」で幕を閉じた。温かいスープは心にも染みた。

そして今日もスープを作る。今また新しい季節を迎えようとしている。

宮原 清美（みやはら きよみ）
俳優・ワークショップファシリテーター
各地の劇場や市民の方々を演劇で繋ぐワークショップの企画運営を始め、若手俳優の育成も手掛ける。おいしいものを作り、振る舞うことが好き。東京スープとブランケット紀行では毎月の季節にあわせたスープの献立・調理を担当。また青ヶ島への繋がりを作った実績から青ヶ島も担当している。東京スープとブランケット紀行の事務局長でもある。

2017年Rest In Peace, Tokyo最終回の夜、小山田徹さんを引き止めて、メンバー一同、最後の夜噺を楽しみました。小山田さんは「アートプロジェクトなんて、早くなくなればいい！」とおっしゃりつつも、「アートプロジェクトがなくなる時、それは自分の役目が終わる時だ。」と、最高の永訣の辞を寄せてくれました。そんな小山田さんを、わたしたちは、敬意と友情をもって「京都の叔父貴」とよんでいます。

語り手：小山田徹
聞き手：羊屋 白玉、伊藤 馨、宮原 清美、齋藤 優衣、草棚 亮、前田 愛実、西田 秀己、阿部 健一

Rest In Paece, Tokyo　小山田徹さんと

2017年11月17日羊屋邸にて

小山田家のお弁当

羊屋：小山田さん、今日は、Rest In Peace, Tokyo最終回ご一緒できて嬉しかったです。ありがとうございました。夜も更けてきましたけど、最後に小山田さんとお話ししたくて。

小山田：はいはい。

羊屋：わたし、小山田家のお弁当シリーズのファンで、まずは、そのお話を聞きたいです。

小山田：うん、ある朝、幼稚園の息子の弁当を作ってたら、娘に「今日は何を作るの？」って聞かれて、「何がいいと思う？」って聞いたら「顔がいい。」って言うて、俺の似顔絵書いてくれたんよ、たまらなく良い絵やってんな。で、試しにその絵の通りにお弁当作ってみて、息子に持たせたら、めちゃめちゃ喜んで、完食で帰ってきてさ。息子も「面白かったわ、美味しかったわ。」って言うてくれて、娘も嬉しかったんやろね。二人でガッツポーズやってん。

羊屋：娘さんの絵をもとに、息子さんのお弁当をお父さんが作って、美味しくって、みんなハッピー。

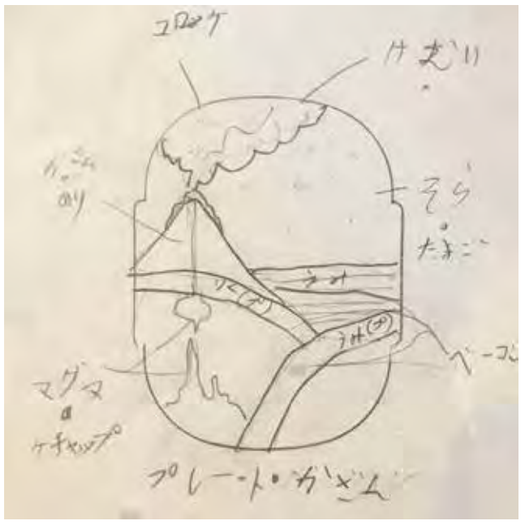
小山田：そう。次の弁当の日も、娘が「今日は何する？」って言って、それで、毎回やってくれるようになったの。「明日、弁当の日やで。」って言うたら、もぞもぞ何か考えてたりとか。で、それからは、本を読んだりとか散歩してると、「これ、お弁当に使えるな！」っていうのが、娘との間で続いてる。

羊屋：お弁当のネタ探し？

小山田：そう、日々ネタ探しをしてる感じになって、終わらない日々が。

羊屋：食べるのも終わらないしですね。

宮原：わたしもとても興味があって、小山田さんのフェイスブックのお弁当投稿、毎回楽しみにしてます。出されたお題によって、冷蔵庫にあるもので作るんでしょう？お父さんと、娘さんと、息子さんで、三人で、お弁当中心にぐるぐる巡って、循環してるのが面白いなぁと思うんです。



小山田：面白いよね。俺がいない時は一番上のお兄ちゃんが作ってるの。今、彼は、中二の宇宙人的全能感溢れるバカなんだけどさ。物心付いた頃、誕生日に、名前を彫った包丁をあげてみた。

羊屋：お料理の修行みたいな？

小山田：そうそう。うちの長男は、神の舌を持って、物凄く繊細な味がわかるタイプなんよ。荒っぽいところもあったり、片付けも何にもできないのに、味に関しては、ちょっとでも味が違うと、「違う」と言える舌を持ってるの。この舌は育てた方が良いなと思って、包丁を与えたら料理やるようになってね。

宮原：料理のできる男子。

小山田：そうそう。だけど、その良さをなかなかわかってくれる同級生の女子がいなくてさ。

宮原：そのうち現れますよ。

小山田：うん。だから、もうちょっとしたら気づくやつも出てくるかなと。

宮原：出てきます！

小山田：そうだといいけどね。だからさ、うちはお母ちゃんがご飯を作るっていうのが当たり前ではないっていう状態を意識的に作っている。そうすると、一番下の男の子も作るのが当たり前やという状態になってくると思う。

羊屋：ごちそうになりたいです。

小山田家、公文教室への道

小山田：それと、今、我が家では、レジデンスっていうか、家族以外の人に住んでもらえる空間を作ってて、ちょうど今は、育児インレジデンスでね。赤ちゃん抱えたお母さんが住んでんのよ、一緒に。旦那がアーティストで海外に行ってんねんけど。奥さんと十ヶ月の子供を、旦那が三月に帰ってくるまで、うちで預かることになってね。そうすると、十ヶ月の子がうちで一番下の子やん。全員一個ずつ繰り上がって、一番下の幼稚園の息子がめちゃめちゃお兄ちゃんになって頑張ってる。だから、誰の為に飯を作るかっていうのがぐるぐる回る。そのお母ちゃんも、週に一回は大学に教えに行かなあかんので、その間は僕らが赤ちゃんを見る。今、僕は、おじいちゃん訓練中なんよ。

伊藤：小山田さんの家だけで、全てが循環している気がする。

小山田：共同生活って面白いね。

伊藤：ご自宅で公文教室も開いているんですよね？そのやり方は、どのように？

小山田：個人やったらできるやろ。そんなに広いエリアが必要な訳でもないし、狭い方がやりやすいと思うよ。

羊屋：対談紀行に出てくれたガラクタやネバーランドの安藤さんは、子供たちも遊びに来るけど、売り物の雑貨も増え過ぎちゃって狭くって。って、言ってたけど、公文やるのにあそこはとっても良い環境だと思うなあ。

小山田：子供が集まるんやったら、やらん手はないよね。

伊藤：でも、地域性の違いもあるのかなと思ったんです。京都だからできるの？江古田だとどうなのかなあって。

小山田：京都やから怖い部分も確かにあるよ。うちの一階は、今、お母さんの待合所でもあってね。お母さんたちと柔らかい関わりをしておくと、公文に

対してのクレームがゼロだったりする。でもほっとくと、今の時代はクレームがいろいろ来るのよ。やっぱり、利用者と提供する側っていう関係があるからね。例えば、昔、食堂とかだったら、もっとおおらかに客と店主の関係があったと思うけど、リーマンショック以降くらいからかな、ギスギスした関係になってきた気がする。客は消費者の権利を振りかざすし、経営者はそれに対しての防御という形でサービスを充実させる。もしくは、バサっと切っちゃうか。

伊藤：なるほど。

小山田：うん。でも、それ楽しくないよね。だから、公文をやるに当たって、クレーム含めて、そうなるのはわかっていたんで、別の場作りが必要だと思ってさ、お母さんケアもやろうと。

伊藤：どういうふうに？

小山田：例えば、うちの奥さんがお母さんたちの相手をすると、ちょっと角がたつ。女性同士ってのもあるからね。でも、異性で、ちょっと年が上の俺には、お母さんたちは、日頃の鬱憤を、喋りはるねん。で、俺も、これ見よがしに目の前でまかない作りながら「すいませんね、匂いさせて。」とか言うてると、お母さんたちの鬱憤話がなぜだかどんどん出てきて。そうすると、公文教室に対して、文句が出なくなる。

宮原：そういう場所を作りたいと始めから思っていたのですか？

小山田：うんうん。もちろんそういう空間を作りたくて、カフェやったり飲み屋やったりいろいろやってたんやけど、もしかすると、公文を取り入れることによって、もっと上手くゆくんちゃうかと。

伊藤：実験に実験を重ねてたんですね。

小山田：カフェや飲み屋の頃は、対象になるのが大人だったし、子供は来なかったのよ。でもやっぱり、せっかく地域にいるし、地域の子供たちが出入りする場所にしたい。と、いろいろと考えた結果、公文っていうフランチャイズがあると、うちの奥さんが持って来たんよ。

宮原：奥さんの慧眼！

小山田：そう。公文を始めたのは、公文公（くもんとおる）さんという方でね。別に進学を目指す訳でもなく、日々の勉強の習慣を作ることが必要だってことを、息子さんとのやり取りから発見して、スタートしてんねんね。

宮原：小山田家のお弁当と一緒ですね。

小山田：うん。公文さんのやり方は、息子さんの為に宿題を作ってテーブルに置いといたら、息子さんが宿題を解いていた。それが続いたことから始まってるんやって。それでまあ、悪くないかなと思ってやり始めたら、子供がわしゃーっと来るやん。今、60人くらい来てんねんけど。

宮原：すごい！

小山田：そうすると、もれなくご両親が来るやん。月に一回くらいは親御さん面接もするし、低学年の子はお迎えで、お母さん、お父さんとのお付き合いが始まり、一挙に知り合いが増えていった。面白いよ、それぞれの家庭の事情っていうのが、多岐に渡っていてね。

伊藤：近所の小学校の近くに老舗の駄菓子屋さんがあるんだけど、僕は、駄菓子屋さんって子供が集まるイメージしかなかったんだけど、こないだ、駄菓子屋の前にお母さん10人くらい井戸端会議をしてたんです。店の中では、子供が大暴れしながら駄菓子買ったり、10円ゲームをしてるけど、お母さんたちの社交場でもあるのかなと思いました。

小山田：そうね。うちの公文の場合は、俺を介して、愚痴も含めて皆喋るっていう感じもある。焚火を囲んでいるっていう感じだよね。それに、待合があると、他人の子供にも目を配るようになるよね。他の子たちに本読んであげたりとかさ、そういう関係っていいよね。

アートプロジェクトをわざわざやることの罠

羊屋：小山田さんちの公文のように、時間をかけて自然に作られていって、名前はないけど確かにある関係が、体系立てられてしまうということがありますよね。演劇の方ですとベビードラマってのがあるんですけど、もちろん西洋から来たものですけど。

小山田：それは、体系化だったり、メソッド化している？

羊屋：そう思います。ベビードラマの特集があって、海外のグループもたくさん来てたんですよ。わたしが見たのは、赤ちゃんが喜ぶとでも思ってんのかい？っていうようなことが舞台上で繰り広げられていて、例えば、赤ちゃんは丸いものが好きなようで、そういうオブジェが舞台上にあって、ダンサーがいっしょに踊ったりしている。やがて客席にいる赤ちゃんが、その丸いものに向かってハイハイしながら、舞台上にあがってゆく。赤ちゃんが参加する現象は、なぜだか知らないけど、良いことらしいんですけど。お母さんも心配して「すいません」って感じで舞台に上がってゆく。どうして、わざわざこういうことするんだろう。西洋から入ってきたメソッドなんかしなくても、ご家庭で。

小山田：家でやれよ。

羊屋：はい。そうですそうです。家でやったらいいのに。と、思いました。

小山田：まあでも、よくあることだよね。体系化され、メソッド化され、取り込まれてゆく。

羊屋：ベビードラマの根源は、生活のなかにあるシンプルなものだと思うんです。寝る前に赤ちゃんに話しかけながら寝かしつけるとか、よしよしなでなでするとか、将来のコミュニケーションの原型になるようなもの。

伊藤：あ。

羊屋：なに？

伊藤：そういえばさ、最近江古田に変な塾ができたみたい。張り紙を見たら、カリキュラムが書いてあって、「講師募集」とも書いてた。

西田：皆で応募しましょう。

小山田：乗っ取る？

羊屋：面白い。

伊藤：それと、今日、八百屋のフクミさんが、子供で溢れていたのは面白かった。会話が飛び交っていて。

西田：そこに、子供連れのお母さんも混ざって、楽しそうでしたね。

小山田：なんとなくわかったような気がするねんけど、例えば、八百屋さんは、お野菜を売る、そして買う人がいるっていう主目的があっても、その傍らで、ちょっとした声かけが起こることで、関係性が広がってゆくということ。その関係性の部分だけを主目的にして、作り込むと、何かが歪むんじゃないかな。そのベビードラマも、そこの関係性だけを取り出して主目的にしたわけやん。関係性なんて、ひょいって取り出せるものでもないのにさ。その塾も同じ匂いがするね。

羊屋：例えば、初めての土地に行くと、子供やおじいさんやおばあさんって、わたしのようなストレンジャーを、その土地に馴染ませてくれることが多かったなと思うんです。許してくれるというか。

小山田：子供や老人には、人間関係の微妙な違和感や歪みを修正してくれる作用があんのかもしれんな。ただそれを商売にするとさらに歪む。

西田：その筋の歪みって、なんかちょっと気持ち悪いですね。

小山田：だから、アートはまさにその話だよね。歪みまくってるよね。アーツカウンシルの企画とかもさ、何が目的かもうわかんないやん。
羊屋：でも、いろんな種類のものをやるんだぞっていうのは一貫してますよね。
小山田：まあ、必死に頑張ってるんだけどね。本当は、アートプロジェクトなんて、早くなくなれば良い。とはいってもさ、次々に課題は見つかるからやらざるを得ないんだと思うんやけど。
羊屋：わたしも、どうして、わざわざやるんだろう。って、これ実は、今夜のおはなしのテーマです。
小山田：ふんふん。

アートプロジェクトをわざわざしなかった3年間

羊屋：「東京スープとブランケット紀行」の最初の3年間は、このプロジェクトのきっかけとなったわたしの猫が倒れた時に、友人が届けてくれた鍋ごとのスープ、そしてやがて迎える猫の死の前後に起きた、お見舞いと看取りと弔いの時間を復元するかのように、月命日ごとに、スープを作って、囲んで食べて、対話を繰り返していました。このことだけは、歪みなくやってきたような気がするんですよね。
小山田：この企画は、いいよ。
羊屋：そうですか？ありがとうございます。でも、アーツカウンシル東京の森司（もりつかさ）さんに言われるまでわかんなかった。森さんは、いきなり「よく続けたね。」って言ってくれたんですけど、何のことだろうって思ったんですよね。
伊藤：僕たちにとって、月命日のスープがあたりまえのこと過ぎたのかな。
小山田：うん。「東京スープとブランケット紀行」のスープの由来はわかったけど、ブランケットってどこから来たの？
羊屋：マザーテレサの言葉を、皮肉に使ってみました。
伊藤：最初はね。
羊屋：そうだね。実際、猫が弱ってゆくなかで、体温が下がってゆくから、ブランケットで包んだり、ペットボトルにお湯を入れた湯たんぽを包んだりして、からだを温めるのにいつも近くにありました。最後は、猫のなきがらを、そのブランケットで包んだまま、猫の散歩道の桜の樹の下に埋めました。お見舞いでもらった好物のマグロも一緒に。
小山田：このタイトル見たときに、以前、エイズに関するいろんな活動してる中で「エレクトリックブランケット」っていう名前のプロジェクトもしていてね。そのイメージがあってさ。ブランケットっていうだけで、もう良いイメージがあったのかな。
羊屋：ラッキー。電気毛布。
小山田：でもまあ、何かを包み込むってことだよね。それで、アーツカウンシルのプロジェクトの審査をしなきゃいけない立場にあった時に、僕は、「東京スープとブランケット紀行」の企画書のようなものに出会うんだけど。この企画だけは、あってもいいなと。
全員：おお！（心の声）
小山田：まあでも、この企画は、最初見た時に、ロードマップが無かったんよ。
全員：あぁ。。。（心の声）
羊屋：ロードマップって、なんだろ？
草棚：趣旨と目的みたいなことね。
宮原：２０１４年に始動する頃、キックオフ的なプレゼンテーションがあって、他の団体はとてもわかりやすくて、なるほどこういうのがアートプロジェクトなんだな。って思って聞いていたんですけど、わたしたちのは、羊屋さんが、猫の話をして、しかもラストのプレゼンで。だからもう、混乱しました。
羊屋：猫の死の話を7分で語る。という、ポエトリーリーディングでした。
伊藤：たしか当時の企画書には、メンバー探しが2年連続で書かれてたりとかしてた。
羊屋：そうそう。1年じゃ決められないだろうなって、思いました。演劇の現場でも、わたしは、チーム作りから始まるんです。戯曲とかやりたいことよりも、どっちかというと人の集まり、というか巣作りをするところから手がけるんです。
伊藤：みんな初顔合わせでね。
羊屋：ええと、宮原清美、伊藤馨、草棚亮、齋藤優衣の順番で、一本釣りでしたかね。
草棚：世の中のいわゆる一般的な経済活動って、ロードマップというか、目的を主とするじゃない？でもここはそうじゃなかった。僕は、普段の仕事はそうしているんだけれども、全く真逆の目的の見えないものをやろうとしてるという感覚がすごくあって、そのことが、最初は自分に付いている物の見方とか、物差しの癖と葛藤があったんだけど、こういう別次元の話もあっていいんだ。って、置き換わってゆきました。
宮原：忘れもしない、初回の２０１４年5月17日、とにかく、スープを作ったのがスタートでした。メモ帳に書いたレシピ、今でも持ってます。
草棚：もしかしたら、何をしたら良いのかを考えること自体が間違っていたのかもしれない。
伊藤：あなたは江古田生まれで江古田育ちだから、江古田を担当したら良いよね。って、羊屋がにやにやしながら言っていて、え？江古田担当って何すればいいんだ？って感じでしたよ。
草棚：目的はこれです。って言われると、わかりやすいというか、やりやすい。でもそういうことじゃないのに目的を探して、その為に一生懸命行動しようとしてたっていうのが、前半戦だったかな。目的が見えてないことに対して結果を出そうみたいな、自分の今までの経験上の思い込みがそうさせてたんだな。と、今は思います。目的が見えてないんだから、なすがままにしとけば良いのに、何かしらしないといけないと思ってたかな。でも何も無いんだから、ただそこに居れば良いはずなのに、目的を探してそのことに向けて進もうとしてた感覚があるんですよ。
西田：目的が無い時のエネルギーって、目的ができてしまった時のエネルギーより大きいような気がします。
草棚：そうなんだよね。
伊藤：でも、何したらいいかわかんないんだよね。ただ集まってるだけ。
草棚：そう、ただただその状態。
羊屋：初期、わたしの家で、猫は不在のスープ会を、月一回やってた時は、ただただひたすらでした。そして、話題にあふれていました。この江古田という街のこと、東京のこととか。それらのことと、看取り、死、喪失、弔いのキーワードが混ざり合って来てたんです。途中、東京の南の果ての青ヶ島、西の奥多摩へのフィールドワークを行いました。
宮原：夏合宿に行ったときは、齋藤さんの誕生日で、彼女の好物を食べにゆこうということになり、そうしたら、猫と同じマグロでしたね。今上天皇のお言葉を、車中で聞いて、しーんとなりましたね。
羊屋：はい。この、記録集にも載らないような、誰ともなく、何ともなく、勝手に流れてゆくということが起きた時、わたしの中では、「しめしめ。」と、思っていたんです。プロジェクトの生成と発酵の時期でした。

アートプロジェクトの罠にまんまとはまってみると

宮原：そして、4年目の2017年に、ドラマトゥルクとして、西田秀己さん、前田愛実さん、阿部健一さんを釣ったというか。

伊藤：羊屋の自宅で行っていたスープを、江古田の街で観客も招いてオープンにして、迎えた2017年5月17日は、めちゃくちゃ疲れた。

宮原：Rest In Peace, Tokyo、全7回公演がスタートしたんですよね。羊屋さんの猫のまぷさんの命日に。

羊屋：そう。観客の視点も含め、オープンにしてゆくことが、今まで、自宅でこっそりしてきたスープの会とこんなにも違うものなんだ！って、どうして良いかわからなかったです。翼が折れたという感じでした。

伊藤：終わって帰って来たらさ、みんな、何かに負けた状態だったよね。

羊屋：だから、これが、「東京スープとブランケット紀行」が、「わざわざやってしまった。」っていうクライシスの段階に入ったということだったんだと思ったんです。いままでの、自然に勝手に流れていったみちゆきとは違うことに突入したんだと思ったんです。

伊藤：オープンにするというのは、もともとのアーツカウンシルとの打ち合わせから、必須のことでもあったんです。それを、いよいよ4年目に持ってきた。

羊屋：それで、ある意味、壊れたんですね。前に話したような、「関係性だけを体系化する、メソッド化する。」ということを、わたしたちはしてしまったんでしょうか。

伊藤：そこからの、軌道修正を意識にしていたかはわからないけど、最終回の今日のRest In Peace, Tokyoは、青ヶ島から来てくれた荒井智史さんが、「青ヶ島の法事みたいだね」って話してくれて、ようやく、救われたよね。

羊屋：そうなの。荒井さんが、「親戚が集まって法事をしている感じだね。法事は、親戚が集まるけど、この会には血の繋がっている人はほとんどいない、他人同士。別に、法事のような関係に、わざとしている訳じゃないけど、疑似体験みたいなことになってるね。不思議だね。」と言ってくれました。

宮原：ドラマトゥルク鼎談のページにも、初回の大打撃からのみちゆきが、語られていますよね。わたし、まだ理論化できないけど。

羊屋：そうなんです。まだわからない。でも、わざわざやってしまうことで、関係性だけを体系化する、メソッド化する。という、アートプロジェクトの罠に一度はまったのはよかったと思ってます。身に染みました。

小山田：うん。そうだなあ。多分、僕らはギリギリの世代でさ。子供の頃に、全ての作業は複数の人間でやるものだと目にした世代の最後の人々なのかもしれないなと思ってる。だから、勉強は一人でやるもんだ、とかいうのは後付けで、きっかけは、絶対、誰か他人との出会いで始まっているはずなんよ。

羊屋：そうですね。わたしも、ピアノとの出会いは、幼稚園の頃、隣に住んでるお姉さんのピアノでした。

小山田：そう。従兄弟の兄ちゃんが貸してくれた本を読んで、背伸びしつつもその世界にはまるとかさ。レコードもそう。いきなりレコードと出会う人なんていないやん。誰かから勧められてとか。同じように、食べ物も、うちの田舎では必ず複数で作ってた。

羊屋：それはご実家の九州のこと？

小山田：そう。行事の準備は複数でやるもんやと。それを、こっちでも言うんかな「こしらえる。」何かをこしらえる時は、誰かと一緒にやるっていうのが基本形やったんやけど、こんだけ核家族が進んで、子供は勉強が仕事になり、家の手伝いをしなくてもよくなる。この流れを眺めていると、どうもむくむくと、それやっぱりアカンのちゃうかと思っちゃうんよね。

羊屋：勉強が仕事になってる子供っていうのは、公文の子供たち？小山田さんの教え子さん？

小山田：大学の教え子を眺めていてもそう思うし、人様の子供の世界を覗かせてもらったりしてもそうだね。彼ら、淡々と一人で勉強してるのよ。それって、到達地点が常に設定されてて、そこに向かう為の作業は、一人でもできるという便利なものが与えられて、そうなってるのかなと思うときがある。上手に脱線しながら広がってゆくって、他者が介入しないとなかなかできないんじゃないかな。

羊屋：おせっかいとか言ってられないような危機を感じているのですか？

小山田：うん。だから、仕方なしなんだけど、それに対して、きっかけを作ってあげられたら、勝手に自然に、走り始められるんじゃないかなって。でも、それは、寸止め的にやらなアカンな、って、ちょっと確信的に思ってやってる。

羊屋：寸止めというのは、やり過ぎないってこと？

小山田：そう。やり過ぎない、用意し過ぎない。彼らが、入り口を発見できたら充分。

羊屋：観客にとって、そういう他人として、「東京スープとブランケット紀行」が、あったのなら嬉しいな。啓蒙的ではなく。

小山田：特に、子供たちにとって、何か新しい面白いことに触れるきっかけとなる他人との出会いが、途切れてしまったら、ちょっと怖いなと思う。そして、人類が初めて遭遇している瞬間だとも思うのよ。今までの人類は何とかそれを繋いできたけど、焚き火にしてもそうだけど、途切れるっていうところにきてるような気がしてて。途切れそうなんやったら、ちょっと手を加えてでも引き伸ばしをしたいなとかいうのがあるかな。

草棚：今、小山田さんの話を聞いていて、最後のタイミングなんじゃないかとおっしゃっていましたけど、僕もそういうことを思ってました。時代の転換期というのかな。そして、自分としては、どこからか、何かをもらって、そして次に何かを伝えるのかということをすごく考えている。そして、そのことが自分を定義しているみたいな感覚を欲しがっているんじゃないかと感じているんです。

小山田：うん。うちの大学生たちはね、課題を与えればこなしてくる。でも、「今日から自由制作です」というとフリーズする。それはやっぱり、自分の中でできることを一生懸命考えようとするねんけど、内的にそんな溢れるようにアイデア出てくる人なんて、ありえへんやん。絶対何かとの接触によってしか発想って出てこないよ。

伊藤：僕も、大人たちに機会を作ってもらってたんだなっていうのは、感覚的にあります。自分はまだうまく使えてないけど。うちの親の世代は、友達同士で集まってこうやってご飯を食べるっていうのが、いまだに定期的にあるし、子供が寝始めたからそろそろ解散しましょう、みたいな感じで、大人は大人で勝手に喋って、子供は子供同士で適当に遊んでいたなあ。

小山田：昔の方が人権的には問題のある状態はいくらでもあって、特に女性とかね。田舎の女の人は大変やってん。けど、そういう様々な過酷な状況があると、それを解消するための方法を、長い間かけて確立してきててさ。女の人は女の人で漬物を持ち寄って喋る時間があるとかさ。旦那の悪口も言える機会を自分たちで作ってたりとか。おっさんたちはおっさんたちで、くだを巻く必要があったりするような社会的抑圧っていうのが、多かったと思うんよね。

羊屋：いまは直接じゃないけど、SNSはそういう場なのかな。

小山田：そう。いろんな制度とかシステム、テクノロジーができてるから、個人の抑圧の解消を、外に求めてゆく状況になりがちなんよね。情報にアクセスしやすいから、知識とか他者の経験も瞬間瞬間で入ってくる、知ったかぶりのような状態になってしまう。だから、自分が知り得たものが、長い先輩たちの蓄積であることなんて絶対に思えないんだよね。

羊屋：自分の足で歩いて、目で見て確かめるということは、途方もないけど、楽しいはずなんだけどな。

小山田：そりゃそうだよ。でも、うちの芸大でも、

先輩たちの仕事をそんなに知らないまま、調べないまま、表現に飛び込んでるから、知らないうちに、無自覚に剽窃（ひょうせつ）してる。

真夜中の現代美術史Ⅳ

羊屋：ドラマトゥルクの西田くんとの会話のなかで印象深かったことがあります。彼は美術家です。だから、美術家と名乗ってる。でも、彼と同じ世代の人で、現代美術家と名乗る人もいる。彼の世代は、現代美術っていう言葉が、物心付いた頃にはもう既にあった世代だから、もう、疑わないのかな。元々ある言葉を疑う人と、疑わない人の差なのかな。現代美術って不思議な言葉ですよね。

小山田：現代美術は、日本では80年に入ってからの言葉だし、インスタレーションとかさ、ホワイトキューブとかさ。たったそんだけの歴史の中で、その根元が気にならずに使えるようになってるってことだよね。まだ生きてるよ。その辺の人たち。

羊屋：小山田さんて、赤瀬川原平さんとか面識あったりするんですか？

小山田：面識を持ちたいと思ってる頃には、体調を崩されてた。小学生の頃から、真似してた。完璧にコピーできるよ。

羊屋：本当ですか！わたし、再読してるんですよ。「東京ミキサー計画」を。

小山田：あの辺の諸先輩方っていうのも、真似た諸先輩がまた海外にいはるので、いろんな系譜があるんだろうなと思うんだけど。ほんまに、オリジナリティっていうのを誤解して欲しくないよね。現代美術って固定されたもんじゃないはず。

西田：そうですね。現代美術を始めた先輩方、始めたって言っていいのかわからないですけど。

小山田：ちょうどその時期にいた人たちね。

西田：現代美術というより、もっと過去を遡っていろんな文脈があって、物凄い葛藤の中でできたものがたまたま…

小山田：うん。質問の芸術やったと思うんよね。だから、答えがあった訳ではなくて、前の価値観に対しての疑問を表明するための方法としての表現を選んだ人々がいた。その塊に、いつの間にか現代美術っていう言葉が名付けられた。

羊屋：そう思います。西洋や欧米は時間が経ってるから、定義っていうのが固まっているのかもしれないけど、アジアの人たちの輸入された現代美術っていうのは、全然違うんだろうなって思いますし。

伊藤：日本での現代美術と言った時の定義って、どこから現代？

羊屋：じゃあ、美術家の方たち、お答えを。

小山田：多分、50年代後半から60年代にかけてマルセル・デュシャンを読み込んだ人々。

伊藤：前衛の人たち。武満徹さんとか。

小山田：からが、総じて、現代美術っていう言葉で括れる世代なのかもしれん。フルクサスとかね。

羊屋：その時に、美術家だけではなくて音楽の人とかだったらジョン・ケージがいたりだとか。

小山田：それと、前衛と呼ばれるものが結構前から日本でも走り始めているんだけど、その頃はそれまで権威だった団体展から分離して、分離派としてスタートする人々なんだけど。

伊藤：小山田さんが先生に見えてきたと思ったら、美術の先生だった。

小山田：ちなみに、これ、「現代美術史Ⅳ」というやつやね。

羊屋：え、じゃあモノ派は？Ⅲ？

小山田：モノ派も現代美術史のスタートを切って、それを安定させた人々の集まりやな。モノ派を経由した人々が、ヨーロッパ、アメリカ経由のものを日本に咀嚼して、土着的なものから含めてやり始めた。イタリアではアルテ・ポーヴェラ（イタリア語：Arte Povera、和訳『貧しい芸術』）という。これは、土属性とコンセプチュアルなものが組み合わさってオリジナリティを作るっていう定義。ただ、それを最初に発表された時は、国民の多くは何と呼んでいいかわからなかった。それで、美術評論の方が研究してゆくうちに、現代美術っていう言葉が定着した。でもまあ、時代の反発力というか瞬発力が働いて、新しい言葉ができるとそれを目指す人々が一挙に出てくる時代が訪れて、理由はわからないけど、現代美術というのを目指す。

羊屋：やっぱりわかんないんだ。

西田：今はその時代ですよね。

小山田：そうそう。わからない、が、ずっと続いてんのよ。

伊藤：今はわからないけれども、現代美術と言うものを目指してる人々。

西田：だから、初期の現代美術の人たちは、いろいろな文脈の中で、レジスタントとか反体制とか反主流とかあったんですけど、今の世代の現代美術は、ある意味インターナショナルなスタイルになっていって文脈が必要なくなっているのかな。

小山田：それよりはマーケットが逆に支配してるね。

羊屋：近代に入って、外来語がやってきて、夏目漱石が、ＬＯＶＥを日本語訳するのに苦心していたみたいに、コンテンポラリーアートをどう訳すのかも大変だったのかな。

小山田：そう。それで、多くの人が、日本の美術という土俵に、それを翻訳するというのが疲れてきたんよね。

羊屋：翻訳は疲れますよ。日本人同士でも、翻訳が必要なことありますもん。

アートを暮らしへと翻訳する？　暮らしをアートへと翻訳する？

小山田：うん。一方ね、子供がわかるように翻訳できるかどうか、っていうところが問われ始めてきたというのが最近かなとは思う。それと、同じように、市民にわかるように翻訳してるのが、越後妻有アートトリエンナーレとか。そして、今、僕自身が取り組んでいるのは、言語が通じない子供に可能か、を、試している感じではあるよね。価値観に異議を唱えて、違う価値観を示すっていうのを実は楽しいからやってる訳やん。

西田：今のところその可能性は見えてきているんですか？

小山田：うん、美術と呼ばなければ、可能性があるような気がしてきた。今、美術は邪魔ね。多分、いろんなポイントポイントで、もぞもぞした人々っていうのはたくさんいるんだと思う。でもそれは正史にはならない。そのもぞもぞは、歴史には書かれない。

西田：今日のことですけど、ちょうど、気仙沼の公衆電話の話をしたんですよ。誰とも繋がっていないんだけど電話ボックスに行って、死者へ向けて、心の内を語ることができるっていう場所を、美術家でも何でもないおじさんが整備しているという話です。これは、アーティストにはできないよねって。

小山田：でも、アートが、本当は、目指しているところだよね。

草栁：なんでアーティストにはそれができないの？

西田：いやー、それ的なものを目指すアーティストはいるんですけど、どうしてもそれは、他者が目指す、仮の当事者なんですよね。なんて言うのかな。

羊屋：当事者性が問われるよね、３１１以降特に。

西田：当事者じゃない人が当事者になろうとしている浅はかさが、絶対出てきてしまう。その当事者であるおじさんが、天命を受けてやっているようには到達し得ない。やっぱり、美術というものの外側に、本物の表出がある。

小山田：自分の中でも、美術作品へ翻訳しようとする時には、今まで培った美術のスキルを使っちゃうやん。でも、美術じゃない。その辺は個人的な悩みがずーっと続いてる。

羊屋：わたしも邪魔な演劇を抱えながらこのプロジェクトをやってきましたけど、一番の当事者はわたしなんですね。でも、あらゆる人たちがこの件に関し

ては当事者じゃないけど、絶対に当てはまる、普遍だけど特別な、そこへ翻訳してゆきたいと思ってきました。

小山田：でも、良き例え話だと思う。翻訳って、例え話だと思うんだよね。

羊屋：そうですね。

小山田：ジェンダーでもそうやん。男言語と女言語も違うような気がするし、そこがお互いに翻訳し合う時は、絶対例え話を使うんよね。演劇とか文学は、例え話の集まりな訳やん。そのことだけを伝えたい訳じゃなくて、その例え話に乗っけて伝えたいことがあるはずなんよ。多分、美術もそうなんやと思うのよ。

羊屋：そうですね。ロミオとジュリエットみたいな悲恋というのは、全ての国にある。例え話が違うだけ。

小山田：夜寝る時に、子供に、本を読んでいたんやけど「今日からお話にします」って言って。最近の、家族や子供たちと一緒にやったことをお話にして、再確認をするっていうのを儀式にしてんのよ。この儀式に自分も鍛えられてさ。例えば、言葉の使い方とか、ここにユーモアをどうやって盛り込むかとかね。子供も参加して来るのよ。あの時あーやったとか、赤い実を見つけたよねとか。面白可笑しくちょっとした間を作ったり、まるで演劇なんやけど、ほんまの自分たちの物語を、例え話の上にもう一回乗っけて、客観的に追体験をするっていうのが、最近の趣味で。子供と毎日、創作劇場。

羊屋：いいですね。なんにもいらないですもんね。

小山田：散歩しに行ったのを、家を出るところから帰る時まで全ての物語にする。そういうことを、実は美術もやっているんじゃないかと思ってるんよ。でも、美術が主目的になるとなんかズレてくるやん。

西田：そう、美術をやろうと思って美術やってると、そこまでは到達し得ないですよね。

小山田：だから、そうじゃない目的のために美術を使うんだったら、美術の技術はどんどん磨くべきだよ。

羊屋：生活の中のクライシスを乗り越える時、自分が演劇をやってたんだから、その技術によって、立ち直れるような、上手な翻訳ができて、生き延びられるんじゃないだろうかと思う時があります。

小山田：生活の中の、ちょっとした声掛けの間合いとか、すごい演劇的じゃん。でも、それが必要で、上手く行ったら、技術なんやろうね、きっと。そして、日常の全てに満ち満ちていてさ。料理を一緒にするとかもそうだよ。一人でやってるより、他者と一緒じゃないと、声をかける相手もいないし、なにも起こらない。

羊屋：そうですね。その日常とか生活とかっていう言葉を、いっぱい使いながら続けてきたプロジェクトなんですけど、さっき青ヶ島の荒井さんと話しをした時に荒井さんが「暮らし」って、言われて、すごい新鮮でした。同じこと言ってるんだけど、「暮らし」、もう、別格の響きでした。

小山田：心のメモに書いておかな。

羊屋：わたしも。

小山田：最近読んでる本で、石牟礼道子さんのエッセイ集なんやけど『食べごしらえおままごと』あれ良いよね。もう一回読み返してみたら、ここに辿り着きたかったかもって思う。食を語るのが目的ではないんだよ。

羊屋：わたしも持ってます。どちらかと言うと、お父さんのことを書かれている。

小山田：あんなお父さんになりたいよね。娘からそう思われるお父さんに。

羊屋：そうそう。食べ物が描かれているけど、それを作っているのはお父さんなんです。

小山田：そう。食べ物のこと書いているけど、そこにはそれをこしらえる人々の作業があって、協働の会話があってっていうところを書いてるからさ。

羊屋：お父さんと、お料理、両方からグッとくる。

小山田：美術にしても演劇にしても文学にしても、多分科学にしても、全部、本当はそれぞれのそれが主目的ではないんだよね。

羊屋：小山田さんも、世間から、美術家ってラベリングされたから、こうなっちゃんたんじゃないかとかって、思ったりしない？

小山田：する。何やっても、美術家がやってるって、周りが見ちゃうやん。

羊屋：自分から言った覚えがなくてもね。パブリックイメージ。

小山田：俺、大工してたし、バーテンしてたし、金がないから皆と住んでたし。

羊屋：それもこれも、ああ美術家って思われちゃう。

小山田：まあそれを逆手に取るしかないのかなとかは思ったりはするけど。

羊屋：もう戻れませんもんね。

小山田：でも、子供に対してだけはまだそれが可能でさ。子供たちは俺が何者かわからない。特に公文に来ている子供たちにとっては、いつも厨房に立っている変なおじさん、ちょっと物知り。そこの関係からスタートするのは面白いでしょ？

羊屋：面白い。わたしの親戚にも、ちょっと変わったおじさんがいる。

小山田：いた。

羊屋：でも、わたし、そのおじさんが一番大好きなの。なぜだろ。大人たちからは、困った人だなって思われているけど、子供からは愛されてる。ジャック・タチの映画の「僕の伯父さん」みたいに。あと、わたしは、ホームレスの方たちに、哲学を感じたりすることが多々あります。テリー・ギリアムの「フィッシャー・キング」みたいな。なんか映画の例え話ばっかりになってしまいました。

小山田：最近の子供は、知らない人の家に遊びに行かせてもらえないやん。だからね、本当に昔は、エロ本にしても洋楽にしても、何か近しい他者のところにいってゲットしてくるものやったやん。

羊屋：貪り読んでましたね。あれ？暗い。夜だー。って時間も忘れて。

小山田：最近の風潮では出入りしないように仕向けられているので。だから、公文でもぞもぞやってるのも、お母さんたちは、俺が大学の先生だから安心して預けてくれるんよ。それはそれで使わせてもらいながら、ちょっといろいろ仕込みをしたりはしてる。だから、子供たちは多分、それぞれはポテンシャルを持ったままなんだと思うけど、ちょっと環境が狭くなりつつあるので広げる必要が今はあるかなと思ってる。美術がやっていることは、それがもし一般的な感覚になったら、役目が終わるもんだと思っているのよね。

羊屋：そうですね。わたしも役目を果たしたいです。誰も何もわざわざしなくてもいい状態を、風景として見たいです。

小山田 徹（こやまだ とおる）

美術家。1961年に鹿児島に生まれる。京都市立芸術大学日本画科卒業。1998年までパフォーマンスグループ「ダムタイプ」で舞台美術と舞台監督を担当。平行して「風景収集狂舎」の名で様々なコミュニティ、共有空間の開発を行い現在に至る。2009年より、京都市立芸術大学で彫刻の教員を務める。現在、京都市立芸術大学美術学部教授。東日本大震災以降の女川での活動を元に出来た「対話工房」のメンバーでもある。

葉山デニーズ駐車場より

8月8日、快晴。

東京スープとブランケット紀行　アシスタントアドミニストレーター　齋藤 優衣

平成28年8月8日、東京スープとブランケット紀行の一行は、寝食を共にする時間を作ってみようと「夏のスープ強化合宿」を計画した。「東京を外から眺める」ということで何を強化するのかはわからないまま、土地勘のある馨さんを頼りに神奈川県城ヶ島へと向かった。

その日は、雲ひとつ無い青空だったのを今でも覚えている。まずはスープを飲まねば始まらぬと、横浜中華街へ寄り道し、暑気払いにふさわしい酸辣湯をいただいた。満腹のおなかを抱えて中華街で車に乗り込んだ午後3時、天皇陛下のお言葉が車中に流れ、車を日陰に止めて、静かに耳を傾けた。

「戦後70年という大きな節目を過ぎ、2年後には、平成30年を迎えます。私も80を越え、体力の面などから様々な制約を覚えることもあり、ここ数年、天皇としての自らの歩みを振り返るとともに、この先の自分の在り方や務めにつき、思いを致すようになりました・・・」

つい一月まえの7月に、生前退位の報道がなされた後のお言葉だった。暫く一行は沈黙し、湘南の海を眺めた。

途中、海岸などを寄り道しつつ漸く三崎港につき、辺りを見渡すと鮪の文字が。先ほどの沈黙は破られ、「まぷさんの好物は鮪だった」という話題で盛り上がった。鰹にも目もくれず、鮪を好んで食したそうだ。たまたま、私の誕生日が8月1日で好物が鮪の赤身だったことも重なり、夕食はお寿司屋さんで鮪三昧。羊屋さん、アリクイならぬマグロくいのまぷさんもその場にいたら、シャリだけ残してぺろりと食べていたかもしれない、と言った。

8月9日、快晴無風。三浦半島を北上し、海岸線を辿りながら、漫画家の江口寿史さんが逃避しにきていた葉山のデニーズへ。午前11時、長崎市長のスピーチを店内で反芻した。清美さんの故郷でもある、長崎のお話も聴きながら言葉ひとつひとつを噛みしめた。そしてまた、沈黙。暫く静かなまま、店を出て、駐車場から一人海を眺めていた羊屋さんに声をかけると、そこからの眺めが気に入ったようで、次は椅子を持ってここに来ると心に誓っていた。

東京へ戻る道すがら、大和市のベトナムコミュニティーを訪ねた。「THANH-HA（タンハー）」というベトナム料理の食材店があり、そこで昼食を取ることに。勿論、スープもいただき、エビとパクチーの異国の香りが抜けた。草柳さんが、隣にいたベトナム人留学生たちに声をかけ、食べ方を教わったりしていくうちに、一緒に食卓を囲んだ。お母さんとも仲良くなり、最後にオススメのナンプラーを買って帰った。タンハーは清い川という意味だそう。お母さんがサイゴン出身だったので、もしかすると、メコン川のことかもしれない。さて、この旅で一体何が強化されたのかはわからないが、どこへ行っても、食卓を囲み、終わりの側で静かに耳を傾けるのが私たちの振る舞い方なのだということがよくわかった。

ぐるりと回り、江古田に帰って来る。そして一年後の平成29年7月17日「Rest In Peace, Tokyo みとれる」で香り立つエビのスープをみんなで食べた。奇しくも、開催から少し経った、8月8日快晴の正午、7月の会場でもあり、私が働いていた江古田市場のカフェ、norari:kurariが閉店し、再び沈黙した。なんという巡り合わせなのだろう。季節の終わりも巡り巡って来るようだ。そんなことを、江古田の乃がたで鮪の刺身を食べていたら思い出した。平成30年の8月はどうだろうか。

齋藤 優衣（さいとう ゆい）
制作・俳優
練馬区・江古田を拠点に活動する「演劇活性化団体ｕｎｉ」のマネジメントを担当。幼少時に祖母から教わった編み物を続けてゆくなかで、暮らしの所作として、手しごとに関心をもち、「あむ・かい」を江古田の片隅で開いている。東京スープとブランケット紀行では、地域とのつながりを生かして江古田のフィールド担当。

Rest In Peace, Tokyo
2017.5.17～2017.11.17
その1

羊屋白玉が、毎月書き溜めた宛てのない手紙のようなスクリプト「Rest In Peace, Tokyo」、暑くても寒くても訪れてくれた参加者の姿、毎月みんなでつくり食べたスープにレシピを添えて。

遠くマレーシアからの参加者、劇作家リャオ・プェイティンから寄稿されたエッセイ。

そして、遥か青ヶ島で出会った、青ヶ島郷土芸能、還住太鼓奏者、荒井智史氏からの便り。

2017.10.14　江古田駅南口

Rest In Peace, Tokyo Chapter 0 はじまる

May 17th , 2017

Vieill Bakerycafe & Gallery

彼女は、自分の人生を通して、恵まれない貧しい少女がいかに大きなことを成し遂げられるのかという神話をつくりあげた。わたしもふくめて多くの人たちは、優しくて、シャイで、繊細で、嫌われることを怖がり、でも人生には貪欲で達成に向かって突き進む彼女しか知らないだろう。彼女の抱いた世界へ羽ばたく理想は、子どもの頃から育まれたもので、決して、はかない夢物語ではなかった。世界中からたくさんの人たちが彼女に会いに訪れた。誰も彼もが彼女に憧れ、真似をした。一気に、スターダムを駆け上ったものの、それが、彼女の命を縮めることになってしまった。でも、もうがんばらなくったっていいよ、東京。小さな少女。わたしは彼女を東京と呼んでいた。

She created a myth through her own life about how an unfortunate, destitute young girl could prove to accomplish great things. Most people, including myself, in our lives only knew her as greedy and plunging straight towards her goals, but she was actually kind and shy and delicate and afraid to be disliked. Her flourishing ideal of the world was bred in her since childhood and it was by no means an empty dream. Multitudes of people came from all over the world to meet her. Anyone and everyone who met her would fall in love with her and imitate her. She rose to stardom in an instant, but that led to the shortening of her life. You don't have to fight so hard anymore, Tokyo. Little girl. I called her Tokyo.

2017.5.17のスープ

立夏の候　「旬野菜のゴロゴロスープ」

□ 材料（24人前）※野菜の量はお好みで

・新玉ねぎ　6個　・ベーコン　1000ｇ　・しいたけ　12個　・しめじ　3房　・たけのこ　小ぶり2個（下処理してあるもの）
・ブロッコリー　1房（下茹でし茎部分と葉部分をて分け使う）　・そら豆　10～12本　・野菜ブイヨン　6個
・水　4.8ℓ　・塩　適量　・コショウ　適量

① 新玉ねぎ、ベーコンは角切り（ゴロゴロ感がでるように）、しいたけは5mmの千切り、しめじは細かく裂いておく。

② たけのこは節を意識して食べ応えあるくらいの大きさにカットする。茹でたブロッコリーは茎部分と葉部分を分け、それぞれゴロゴロ感が残るようにカットする。そら豆は下茹でしておく。

③ 鍋にオリーブオイルを大さじ2くらい温め、そこにカットした新玉ねぎ、ベーコンを入れて炒める。

④ 新玉ねぎがきつね色になったら、水を入れる。そこにカットしたしめじ、しいたけ、たけのこ、ブロッコリーの茎部分を入れ、野菜ブイヨンを入れて煮込む。

⑤ スープが煮立ってきたら、そら豆、ブロッコリーの葉部分を入れる。

⑥ 基本的にはベーコンと野菜ブイヨンで味が出ますが、塩・コショウなどでスープの味を調えてください。

⑦ 野菜に味が染みたら完成です。

大き目のスープカップに入れてゴロゴロとした食感を楽しんでください。

Rest In Peace, Tokyo Chapter 1 はなまる

June 19th , 2017

小竹町会館

鳥のなきがらを見つけた。羽はビロードのようにつやつやで、手のひらにのせると柔らかかった。どこかに埋めようと街をうろつく。地面はあるけど、土はない。公園の花壇の植え込みを掘って埋めた。カリカリと音がして振り向くと、猫の子が地面を掻いていた。排泄物に土をかけたいのだろう。舗装道路をかきむしっている。手の先についた排泄物を、ふるふると、振り落とそうとしている。近づくと、猫は恥ずかしそうに、見るのが気の毒なくらい恥ずかしがっていたので、目をつむって、公園に戻った。作られた遊具と緑の中を、かつての猫や犬や鳥や虫が、コンクリートを突き抜けて、土ぼこりを上げて、吠えながら走りぬけ、さえずりながら空を舞った。地面の土は、海の底まで届く深呼吸をしていた。

I found a dead bird. Its feathers were glossy like velvet, and when I placed it in my palm, it was soft. I wandered around town, looking for a place to bury it. There's a lot of ground, but no dirt. I dug up a flower garden in a park and buried it there. There was a scratching sound and when I turned around I found a kitten scratching the ground. It was trying to kick dirt onto its waste. It's tearing up the pavement. It tries to shake off the waste that has stuck to its paws. When I went near, the cat looked so embarrassed, so embarrassed that I felt sorry for it, and it closed its eyes and returned into the park. All the cats and dogs and birds and insects barked as they ran through the playground and greenery, cutting through concrete, digging up the dirt and chirping as they flew up into the sky. The dirt on the ground took deep breaths that reached the bottom of the ocean.

2017.6.19のスープ

夏至の候「トマトとチキンとズッキーニのスープ」

□ **材料（18人前）** ※野菜の量はお好みで

・玉ねぎ　5個　・ズッキーニ　6本　・鳥手羽元　18本（一人1本）　・しめじ　2房　・トマト　8個
・オリーブオイル　適量　・野菜ブイヨン　4個　・水　3.6ℓ　・塩　適量　・コショウ　適量

① 玉ねぎは皮をむいて3mm程度の薄切りにする。しめじは細かく手で裂いておく。
② トマトは湯船して皮をむき、角切りにする。（汁が出るので、ボウルに入れておく。）
③ ズッキーニは、縦半分に切り、1cmほどの扇型にカットする。
④ 手羽元に切れ目を入れておく。
⑤ 鍋にオリーブオイルをおおさじ2くらい温め、そこにカットした玉ねぎ、ズッキーニを入れて炒める。
⑥ 玉ねぎがしんなりしてきたら、手羽元を入れ、塩・コショウを入れてさらに炒める。
⑦ トマトと水を入れ、野菜ブイヨンを入れて煮込む。
⑧ スープが煮立ってきたら、しめじを入れ、弱火でさらに煮込む。
⑨ 塩・コショウで味を調え、オリーブオイルをひと回しして完成。

トマトとチキンとズッキーニの相性抜群のスープができました。
温かいうちにお召し上がりください。

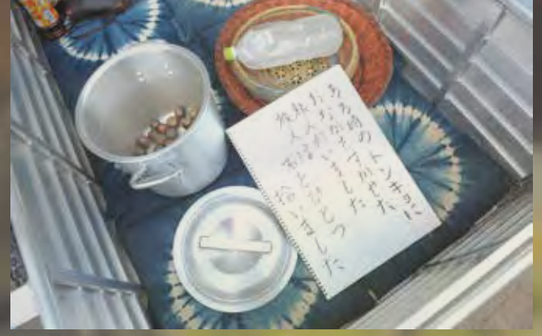
Rest In Peace, Tokyo Chapter 2 みとれる

July 17th , 2017

norari : kurari cafe & galette

わたしが彼女をあんなふうに書いたものだから、本人から繰り言が届いた。「なにとぞあしからず。ちょっといいかしら。わたし東京なんかじゃないわ。わたし東京よりもっと大きくてもっとよいなにかよ。だったらあいつの性格を言ってやりましょうか。知ったかぶりの怠けもの。焼きもちやきの自惚れ屋。ごうつくばりの大喰らい。意地っ張りの癇癪持ち。どう。全然違うでしょ。ほら、この歩き方も。この喋り方も。この振り向き方も。この頬づえのつき方も。わたしったら東京なんかよりもっと素敵ななにかなの。なぜってもしこのわたしが東京なら、この島の北の入り江や南の半島を、こんなにも痩せた荒野にはさせないもの。嗚呼。なんたる寂しさかしら。じゃ。ごきげんよう。」彼女は、なんら変わりはなかった。

Because I had written about her in such a way, I received a complaint from her. “I’m sorry, may I interject? I am not Tokyo. I’m something much bigger and better than Tokyo. Shall I tell you what she’s like? She’s a lazy know-it-all. She’s a jealous narcissist. A greedy pig. Stubborn and hot-tempered. What do you think? Totally different, right? Look, the way we walk. The way we talk. The way we turn around. The way we put our hands on our cheeks. I am something much lovelier than Tokyo. Why? If I were Tokyo, I wouldn’t allow the northern inlet or the southern peninsula to this island to become such destitute wastelands. Ah! What loneliness. Well. Take care.” She hadn’t changed a bit.



2017.7.17のスープ

大暑の候「海老の香り立つ石のスープ」

□ 材料（30人前）※野菜の量はお好みで

・玉ねぎ　8個　・じゃがいも　8個　・海老　30尾（一人1尾）　・トマト缶　4缶　・しめじ　4房
・絹さや　80個　・にんにく　1個　・野菜ブイヨン　8個　・水　6ℓ　・塩　適量　・コショウ　適量
・石　30個（この時は、遠赤外線陶磁器の石を一人ひとつ）

① 玉ねぎは皮をむいて角切りにする。ニンニクは細かく刻んでおく。しめじは石づきををとり、ひとつひとつ手で裂いておく。

② じゃがいもは皮ごと茹で、茹で終わったら、皮をむきマッシュしてボウルに入れておく。

③ 海老はシッポについている殻だけ残して殻をむき、背ワタをとる。臭みとりのため片栗粉を混ぜた水で、海老、殻、それぞれを軽く洗う。
ペーパータオルで水けを切り、海老、殻をそれぞれ分けておいておく。

④ 絹さやは筋をとり、軽く下処理（塩茹で）しておく。粗熱がさめたら半分くらいの大きさにカットしておく。

⑤ スープ鍋にオリーブオイルとニンニクを入れ火をつけ、海老の殻を入れて炒める。
海老の香りがついたら、殻を取り出し、玉ねぎを入れて炒める。

⑥ 玉ねぎが炒まったら、トマト缶と水を入れて煮込む。

⑦ マッシュしていたじゃがいもとしめじ、野菜ブイヨンを入れて煮込む。

⑧ スープが煮立ってきたら絹さやを入れる。塩・コショウで味を調え、オリーブオイルをひと回しして完成。

石をもった旅人をイメージしてスープを作りました。
食べ終わった後に石が残る不思議なスープができました。

マレーシアの劇作家、リャオ・プェイティンによるエッセイ。彼女が参加した２０１７年７月17日開催のRest In Peace, Tokyoでの出来事を「まだだれも定義できていない小さく残された領域」と記しているのが興味深い。当時、彼女は、羊屋白玉をはじめ、日本におけるサイト・スペシフィック・パフォーマンスのリサーチの為に滞在していた。このエッセイは、シンガポールのアート系ウェブマガジン「アーツ・イクウェイタ」に寄稿されている。

Tikam-Tikam Japan: R.I.P. Tokyo

Leow Puay Tin

一連のパフォーマンス活動「Rest In Peace, Tokyo」は5年前に22歳でこの世を去った、ある猫への弔いから始まった。猫はこの活動のディレクターで、劇団指輪ホテルを舵取る羊屋白玉に飼われていた。数年の間、猫の命日である5月17日には、彼女の自宅に友人たちを招いてスープをふるまうという行事が続くようになり、やがて「東京スープとブランケット紀行」と呼ばれるプロジェクトに発展してゆく。このプロジェクトタイトルには、羊屋が死にゆく猫を包んでいた「ブランケット」、猫の看病に付きっきりだった彼女のために、友人が作ってくれた「スープ」、そしてこの茫漠とした大都市東京において、人と芸術、場所をつなぐ文化プロジェクトとしての「東京」、「紀行」というキーワードが込められている。

7月17日、「東京スープ〜」の一環である「Rest In Peace, Tokyo」におじゃましてきた。そこで、数年来の活動を経て幾つかのことが変化したことを知る。この活動はそもそも羊屋の自宅で行われていたのだが、その舞台はいつしか江古田の商店街へとびだした。そして、今年はそれぞれの回にドラマトゥルクを起用する。6月と7月を担当する前田愛実は舞台評論家。8月と11月を担当する西田秀己は美術家。そして10月を担当する阿部健一は演出家であり地域社会と都市デザインの研究者でもある。

ここでひとつの疑問が浮かび上がってくる。この私的な行事だった弔いの日が、どのようにして江古田という街に結びつくのだろうか。会の中で羊屋が語る言葉からその答えを知る。猫と共に暮らしたこの江古田の街には、彼女の失われた猫への思いが、あちこちに散らばっているのだ。そして街は徐々にその様相を変えている。古くからあった大事な店が閉店し、老舗の市場もなくなってしまった。長く店を営んできた人たちも少しずつ街を出てゆき、亡くなった方もいるだろう。そして新しい人々、新しいビジネスが参入する。「Rest In Peace, Tokyo」では、毎回20名ほどの参加者がこの江古田の街を行列を成して練り歩き、その道々の店でスープを作るための食材を買い集める。これは免れることのできない街の変化への彼女なりの応答なのである。

私の目からみて、この練り歩きはある種の儀式であるようにも感じられた。日本の地域ごとに行われる、音楽や踊り、そして神輿を担いで通りを練り歩く「祭り」を思い起こさせるのだ。しかし羊屋の練り歩きはもっと厳粛なものであった。音楽も無ければ踊りも無い。派手に装飾された神輿の代わりに行商人が品物を運ぶリヤカーを、参加者の誰かが手で引いて歩くのだ。それは一見、奇妙な労働のように見えたかもしれない。江古田の狭い通りをリヤカーの後ろに列を成して歩いていると、葬列に加わっているようにも感じられた。道の途中ではパン屋や八百屋に立ち寄って食材を購入する。最後に立ち寄ったのは古い店の跡地に新しく建てられた、明るくにぎやかなスーパーマーケットだった。そして食材をリヤカーに積んで静かな通りの小さなレストランにたどり着く。

実はこの活動に参加する前年、短い期間だが江古田に滞在し、街を歩いたり、羊屋白玉と22年間暮らした猫について知る機会があった。それでも、今回の街歩きは私にとってより親密で、内側から街をのぞいているように感じられ、非常に新鮮だった。買い物のリストを手分けして、効率よく食材を集めることだってできるけれど、私たちは時間をかけて一軒一軒を皆で回った。それがこの会がある種の儀礼的な行為であることを物語っている。リヤカーを引く人のペースにあわせて、その後ろを歩いてゆくという純粋な行為の繰り返しのなか、私たちはひとつの身体と呼吸を共有しているように感じられた。その後の食卓でも、皆がひとつの呼吸の中で、パンや、スープを手から手へと渡してゆく。食事が終わると、また手から手へと空いた器や残った食べ物がテーブルの中央に集められ、洗い場へと戻された。

会場に到着した我々は、ゆでたジャガイモをつぶしたり、野菜を切ったり、簡単な調理の手伝いをする。その後、二階のダイニングに戻り我々が細長いテーブルに並んで座ると、皆で調理した食事が配膳された。その食事を頂きながら、参加者の間では様々な会話がはずんでいる。その頃には特別な共同体意識が我々の間に流れていた。その親密な空気の中にディレクターとドラマトゥルクによって興味深い問いが投げ入れられる。

「はたしてこの活動は演劇か、そうではないか?」

これは非常に興味深い議論であった。というのも、見るからに演劇性の高いこの活動は、実は「演劇をしない」という約束の下に始まったのだ。けれども街の中を集団で練り歩く様子は人目を引くし、演劇的であると言うこともできるだろう。議論は結論の出ぬまま終わったように見えた。しかし、その内容から私はこう考える。羊屋は意識的にあるいは無意識に、この「Rest In Peace, Tokyo」を通して、日常の営みと演劇、あるいは個人と公共をきれいに区分するのではなく、それらを混合して浸透させてゆくような、まだだれも定義できていない小さく残された領域に触れようとしているのではないだろうか。

さて、今回の会ではひとつ気になることがあった。街歩きがはじまる直前、リヤカーの中に手書きで文字が書れたスケッチブックを見つけたのだ。こう書いてある。

「ある時のトンキョに（なぜ東京ではないんだろう?）、おなかをすかせた旅人がいました。旅人は石をひとつ拾いました。」

そして、参加者たちはそれぞれに小さなまるい石を手渡される。どうも私たちは架空の街「トンキョ」を舞台に「おなかをすかせた旅人」の役を与えられたようである。レストランに到着した時、この石は回収された。そして私たちはそれぞれのスープの中に石を見つけることになる。ディレクターの羊屋から、良かったらその石を持ち帰って、また誰かとスープを作ってくださいとのメッセージが伝えられ、会は解散となる。

この時、私は西洋に民話として伝わる「石のスープ」の話を知らなかった。しかし、もし私がこの民話の存在を知っていたとしても、それは死んでしまった猫や東京の古い街の変化という実際的なストーリーからはやや飛躍した比喩であるように思えた。私にとっては、石の存在や物語がなくとも、この活動で起きた全てのことが、それだけで十分に新鮮で意味のあるものだったのだ。そこでは、とても多くのことが起こっていたし、羊屋の言う「協働者」のひとりとして見知らぬ人々と共に過ごした時間は楽しく、非常に興味深いものであった。

石について最後にひとこと。となりの参加者がスープに入っていた石の匂いをかいでいたので、私も「自分の」石をかいでみておどろいた。石にはスープに入っていたエビの香りがとても強く残っていたのだ。この予期せぬ発見に笑顔がこぼれる。そして皆に食べられたエビに対して特別な思いが沸いてきた。スープに入っていたエビはとても小さかったし、量も多くはなかった。鍋は大きく、たくさんの野菜が入っていた。それでも石には強くエビの香りが残っている。こんなに小さなエビがこれほどの不屈さと大きな力を持っていることは、私にとって感動的な発見だったのだ。この小さなエビたちに安らかな眠りを。レスト・イン・ピース。

Leow Puay Tin（リャオ・プェイティン）
脚本家、文筆家。マレーシア・サンウェイ大学芸術学部パフォーマンス・メディア学科長。２０１７年、国際交流基金アジアセンターの特別研究員として半年間日本に滞在し、非劇場空間において展開されるサイト・スペシフィックで場所性の強いパフォーマンスに関してリサーチと執筆を行った。

日本語訳、編集：西田秀己

Tikam-Tikam Japan: R.I.P. Tokyo　By Leow Puay Tin　August 17, 2017　https://artsequator.com/japan-rip-tokyo/
Originally published in ARTS EQUATOR　ARTSEQUATOR.COM © 2016. All Rights Reserved

Rest In Peace, Tokyo Chapter 2.7 はぐれる

July 26th , 2017

青ヶ島

その後、旅に出かけた彼女は、「移動の距離は思考の距離。ただいま。」と言って、お土産をくれた。甲虫のペンダントと太古の植物のブーケ。「この甲虫は…あ。知ってる?月の北極を探査する月面車の名前、スカラベって言うのよね。」彼女は、ペンダントをわたしの首にかけてくれた。いったいどこを旅して来たんだろう。そして、旅に出かける期間がどんどん長くなっている。春の最初に出かけて夏の盛りに帰京した彼女と、東京で待つわたしは、いつか訪れる長い長いお別れの為のレッスンをしているようだった。夜も更けて音もなく網戸を開けて訪れた猫は、花瓶に生けられた太古の植物を秘かに噛んだ。そして、くっくっと小さく嗚咽し、戻し、その憂愁を伴ったまま、爪を研いでいた。虹が出て消えるまでの時間が過ぎて、「じゃ、おいとまするわ。」と、彼女は東向きの扉に手をかけた。朝日が入り込み、光の中に彼女は消えた。次の旅は、太陽へ向かうのだろうか。

Later, she went on a trip. “The distance in travel is distance in thought. I’m home,” she said, and gave me a souvenir. It was an insect pendant and a bouquet of primeval vegetation. “This insect··· Oh, do you know it? They named a moon rover that’s going to explore the north pole of the moon Scarab after it.” She hung the pendant around my neck. Where in the world had she traveled to? And then her time spent traveling grew longer and longer. She’d leave at the beginning of spring and return at the height of summer. While I waited for her in Tokyo, it was like practicing a long farewell that would someday come. Late at night, the cat would visit me, silently opening the screen door and secretly chewing on the bouquet of primeval vegetation placed in a flower vase. Then he let out a small gagging sound, threw up, and sharpened his claws all with the same melancholy air. The rainbow came out and time passed until it disappeared. “Well, I’m going to get going,” she said and put her hands on the east-facing door. The morning sunlight poured in and she disappeared into the light. Was she heading to the sun for her next journey?

2017.7.26のスープ

土用の候「青ヶ島・ひんぎゃのカレースープ」

材料（20人前） ※野菜の量はお好みで

・玉ねぎ　5個　・にんじん　4本　・じゃがいも　6個　・ウインナー　40本（一人2本）　・にんにく　1個
・オクラ　20本（一人1本）　・ホールトマト缶　3缶　・カレー粉（固形タイプ）　2箱　・野菜ブイヨン　5個
・水　4ℓ　・塩　適量　・コショウ　適量

① 青ヶ島の「ひんぎゃの」窯を使って調理。玉ねぎは皮つきのまま、じゃがいもは皮をきれいに洗い、皮つきのまま大き目にカット（1個から4カットになるくらいに）、にんじんは皮をむいて大き目の乱切りに。

② 玉ねぎ、じゃがいも、にんじん、ウインナー、オクラをひんぎゃの窯に入れる（30分程度）。（カレーの具材をひんぎゃの窯に入れている間に、ベースとなるトマトカレーを作る。）

③ スープ鍋にオリーブオイル、ニンニクを入れて炒め、そこにホールトマト缶、水を入れ、野菜ブイヨンを入れて煮込む。

④ 野菜、ウインナーをひんぎゃの窯から出す。玉ねぎの皮をむき、大き目にカットして③のスープベースに入れる。じゃがいも、にんじん、ウインナー、オクラは皿に盛っておく。

⑤ 煮立ったら火を止め、カレー粉、塩・コショウで味付けする。

⑥ じゃがいも、にんじん、ウインナー、オクラは好きな量を取り分けてスープ皿に盛り、カレースープをかけて食べる。

ひんぎゃの窯で調理する青ヶ島ならではのスープ。
青ヶ島の子供たちに大人気でした。

「青ヶ島ブランケット」のプロジェクト第一弾は、台風と一緒に青ヶ島に上陸してしまった2014年9月。島の復旧につとめる荒井さんはじめ島の人々と、台風一過の真っ青な空が、最初の青ヶ島の印象だった。それから、荒井さんと東京で何度も時間を過ごし、わたしたちも二度目の青ヶ島上陸を果たし、荒井さんを独り占めして一緒に青ヶ島を歩きスープもともにした。次は、どこで会うだろう。

還住の島に生きて

荒井 智史

はじめに、僕の故郷・青ヶ島のことをお話したい。青ヶ島は東京から南へ約360km、9つある伊豆諸島の有人島の中で最も南に位置し、太平洋を流れる黒潮の激流の中に浮かんでいる。数ある日本の離島の中でも、とりわけ厳しい自然環境にさらされた絶海の孤島だ。

荒磯と海からそびえる断崖絶壁、その島の姿はまるで上陸する者を拒むかのように見える。しかし、切り立った絶壁を越えると、内側には深い森に包まれた世にも稀なカルデラの絶景が広がっている。そのカルデラの中央には、丸山と呼ばれる小さな山があり、斜面からは絶えず噴気が立ち昇っている。この噴気は99%が水蒸気で有毒ガスを含まない。そのため、芋を蒸かしたり生活に利用されてきた。噴気孔は島言葉で「ひんぎゃ」と呼ばれ、青ヶ島が今なお生きた火山の島であることをまざまざと感じられる場所だ。

池之沢と呼ばれるカルデラの森は、かつて二つの湖が溢れるほどの水を湛えていた。江戸時代の終わり頃までは、この二つの湖が人々や田畑を潤し、四方を取り巻く絶壁が天然の防壁となって台風さえ凌ぐことができた。青ヶ島は、作物の実りの絶えない楽園のような島だった。

しかし、そんな豊かな暮らしも、江戸時代末期に見舞われた度重なる噴火によって一変した。噴出する火気や噴石、火山灰は池之沢の耕作地に大きな被害をもたらし、天明3年（1783）の噴火では命の水瓶であった二つのカルデラ湖が消失。それでも青ヶ島の人々は天露で命をつなぎ、天変地異の収まることをひたすら願い、耕作地や集落の復旧を続けた。しかし人々の願いもむなしく、天明5年（1785）とどめとなる大噴火に見舞われた。立ち昇った噴煙は海岸まで押し寄せ、集落はすべて火山灰の下に埋まった。田畑はすべて溶岩に飲み込まれ、池之沢には火砕丘（丸山）が現れた。島からすべての緑が消え失せた。青ヶ島の人々はついに故郷を離れ、八丈島まで逃げ延びる苦渋の決断をした。しかし、黒潮の荒波は渡海を阻み、八丈島からの助け船によって焼け落ちる島から人々が脱出できたのは、大噴火から約ひと月半後のことだった。

命からがら八丈島へ逃げ延びた青ヶ島の人々だったが、ここからが以後半世紀にも及ぶ本当の苦難のはじまりだった。この時代、長引く天候不良と岩木山や浅間山の大噴火によって日本各地で大飢饉が発生していた。遠く八丈島にもその影響は及んでいた。多くの流罪人を受け入れ、情け島といわれた八丈島の人々の中には、青ヶ島の窮状に想いを寄せてくれる者もあったが、安住の地となり得るはずがなかった。苦しい避難生活の中、青ヶ島の人々の胸に宿った「なんとしても故郷へ戻りたい」という切実な想いは、人々を故郷再興へ向けた挑戦へと駆り立てた。しかし、希望を抱き一心に青ヶ島へと向ける舟は黒潮の荒海にことごとく遭難し、人々の想いは何度となく打ち砕かれた。

八丈島での避難生活も三十数年を超え、噴火・避難を経験した者は次第に少なくなり、故郷を知らぬ若い世代も多くなった。青ヶ島復興への機運はもう途絶えたかに思われた。しかしこの長い苦難の時は、稀代の名主を誕生させた。この名主は綿密な復興計画をまとめ、長い避難生活ですさんだ人々の心情を思いやり、世代間の不和を乗り越えた。再興成る日まで「一同相睦まじく」と固く誓い結束した青ヶ島の人々は、故郷へ向け再び舟を漕ぎ出した。青ヶ島の人々の弛まぬ努力と、大噴火から時を経て再生し始めた島の自然の後押しもあり、十数年の歳月を懸けた復興開拓は実を結ぶ。天保6年（1835）大噴火からちょうど50年後、世代を超えて半世紀に及んだ悲願、故郷への「還住」がついに成し遂げられた。

「還住太鼓」という青ヶ島の郷土芸能の太鼓を通して、僕はこの祖先が歩んだ「還住」の歴史と向き合ってきた。その中でいつも想いを巡らすのは、故郷を取り戻す歩みの中で「いったい何がこの島に還ってきたのか」という問いだった。

羊屋白玉さんと初めてお会いしたのは2014年秋。「青ヶ島ブランケット」と題して、なんとよりによって台風の最中での来島だった。海岸の崖崩れの砂利が、台風の暴風で巻上がって集落に降り積もり、多くの家屋で窓ガラスが打ち抜かれるなど10年に1度の被害がでた時だった。災害復旧に明け暮れ、この時は約束していた島内案内もできず、ほとんどお話しする間もないままだった。それでも、荒ぶる自然の猛威のすさまじさと、台風からすぐさまに暮らしを元に戻していこうとする島の人々の姿は、きっと印象に残ったことと思う。

2015年のお正月は新春対談をさせてもらった。島の弔いにまつわる話に始まり、噴火のこと、太鼓のこと、江古田のこと、還住のこと、ぜひ2014年度のブックレット『青ヶ島』をお読み頂きたいが、その後の交流に繋がる色々な話ができた。2016年秋には対談紀行に呼んで頂き、変わりゆく江古田の街を歩き、僕自身も人の住む場所の姿について改めて考えさせられた。2017年の夏には、羊屋さん2度目の青ヶ島来島。この時はじっくり島を案内でき、やっと約束を果たすことができた。いつも島に暮らす人達とその日たまたま出会った旅人も交えて、「ひんぎゃ」を使った自然の恵みたっぷりの特製スープを囲み、太鼓を叩いて楽しいひとときだった。

島に伝わる芸能の在り方、太鼓がどう暮らしに息づいているか、ステージではなかなか伝えられない部分を味わってもらえたかなとおもう。

人口170人程の小さな島の暮らしはさぞのんびりと思われるかもしれないが、島の地域生活を支えるため何役も仕事をこなす日々は、毎日やること一杯であっという間に過ぎ去って行く。しかしこの4年間、折に触れて羊屋さんの「東京スープとブランケット紀行」に合流させてもらって、自分にとっては至極当たり前だった〝島の暮らし〟のなかにある、物事の「終わり」と「始まり」を意識的に見つめる機会になった。

誰かの人生と共に途切れ終わるもの、島の弔いの風習のなかで生まれ繋がり始めるもの、そういった終わりの中にある始まりを感じたとき、受け継ぐべきものにありありと気づいたりした。過疎に少子化、移住もさっぱり、展望のないこの日本一小さな村で、僕自身なぜか開き直って焦りなく暮らせているのは、沈んだ日がまた昇るように、繋がり行く終わりと始まりを物事の端々に感じ取っているからだと想う。

ほとんど東京と変わらない暮らしぶりになった今でも、年配の方々の表情の中に時折、自然と対峙して生きる人々に特有の覚悟を感じることがある。考えてみれば僕らは、火山島が負う自然の宿命の中で、壮大な仮暮らしをしている。そういう覚悟は、この島を故郷とする者の当然のわきまえだったはずだ。

故郷に生かされ、故郷に生きながら、僕はこれからも太鼓を叩いて、青ヶ島に生きる人々に宿る〝想い〟を紡いでいきたいと思っている。いつかまた、故郷を追われる日に、何をもって旅立ちどこへ還り住むのか、その道標となるように。

荒井 智史（あらい さとし）
伊豆諸島の最南端、絶海孤島の日本一小さな村・青ヶ島出身。青ヶ島の郷土芸能「還住太鼓」の代表を務め、叩き手また島唄の唄い手として、島のお祭り・行事はもちろんのこと、島外の島嶼関連イベントへの出演や各所でのライブ演奏、海外での太鼓ワークショップなど郷土芸能の裾野をひろげるべく精力的に活動中。また青ヶ島の特色ある自然と風土文化の研究も続けており、記録映像の保存、歴史・民俗系の資料執筆、自然鑑賞会の開催など、還住太鼓の活動を通して多面的に青ヶ島の魅力を追求している。普段は(有)青ヶ島整備工場に勤務、自動車分解整備、青ヶ島レンタカー、浄化槽維持管理など島の暮らしを支えるインフラの充実に努めている。また青ヶ島では数少ない島内ガイドとして、ツアーガイドやメディア取材等の現地コーディネートを依頼されることも多々。島のなんでも屋さんとして青ヶ島の暮らしを楽しんでいる。

Rest In Peace, Tokyo Chapter 3 きこえる

August 11th , 2017

小竹町会館

「彼女が、昏睡状態だって。」このニュースに驚いた友人もいたけど、驚かなかった友人もいたので、彼女の枕元に集まった人たちの秩序は保たれた。四肢を南にのばして子鹿のように眠る彼女へ、ひまし油を飲ませたらいいとか、耳を温めたらいいとか、いつか立ち上がることを願う声が続いた。その中で、「彼女に何かあったら耐えられない。いやだ彼女に会いたくない。でも回復するかもしれませんよね。」と、錯乱気味の友人は、急に背筋を正して「最後のお別れを囁かせてください。あなたを絞め殺したい時もあったけど。さようなら。僕の貴方」と、諦めた挨拶を告げた。それからお湯を沸かし、空のペットボトルに注ぎ、そのお手製の湯たんぽを彼女の脇の下に置いた。その後も、彼女を囲んだ、彼らの会話は、まるでラブソングが一曲できあがるような言葉に溢れていた。昏睡状態は続いた。

"She's in a coma." Some of my friends were surprised by the news, but others weren't, so the people who gathered by her bed seemed to be calm. Her four limbs were outstretched to the South as she slept, like a fawn. There were many voices around her, suggesting that we give her some castor oil, that her ears should be warmed, that we wished for her to stand up again. Among them, one deranged friend who had said, "If something were to happen to her, I couldn't bear it. No, I don't want to see her. But she might recover, right?" suddenly stood tall and gave his last farewell, "Allow me to whisper my last goodbye. There were times I wanted to strangle you to death. Goodbye. My love." Then he boiled some water, poured it into an empty plastic bottle, and placed this home-made hot water bottle at her side. Afterwards, the conversation as everyone surrounded her was full of words that could have composed a love song. She remained in a coma.

2017.8.11のスープ

立秋の候「夏野菜いっぱいのカレースープ」

□ **材料（26人前）** ※野菜の量はお好みで

・玉ねぎ　8個　・ミニトマト　80個（一人2～3個）　・ナス　9本　・トマト缶　5缶
・じゃがいも　10個　・オクラ　30本　・にんにく　1個　・バジル　適量（お好みで）
・カレー粉（固形タイプ）　1箱　・スープカレーの素　4箱　・水　4ℓ
・野菜ブイヨン　4個　・塩　適量　・コショウ　適量

① 玉ねぎは皮をむいてくし切りにする。にんにくは細かく刻んでおく。ナスは大き目のくし切りにして水にさらしておく。じゃがいもは大き目の角切りにしておく。オクラは下処理し、半分くらいの大きさにカットしておく。

② スープ鍋にオリーブオイルとにんにくを入れ火にかけ、玉ねぎ、ナス、じゃがいもを入れて炒める。

③ 野菜が軽く炒まったら、トマト缶と水を入れる。

④ オクラとミニトマトを入れ、野菜ブイヨンを入れて煮込む。

⑤ 野菜に火が通ったら、火を止め、スープカレーの素を入れる。カレー粉、塩・コショウを入れ、味を調える。

⑥ もう一度火にかけ、野菜に味が染みたら完成。お好みでバジルをちぎってスープカレーに香りをプラスして。

青ヶ島で人気だったカレースープに対抗すべく、江古田でもカレースープを作りました。この日は弥兵衛の畑でとれた夏野菜をふんだんにいただきました。

Rest In Peace, Tokyo Chapter 4 くすぐる

October 14th , 2017

江古田斎場

昏睡状態五日目の明け方、彼女は生きるように死んだ。
衰弱した皮袋のような薄っぺらい体から、そんな力が
まだ残っていたのかという激しさで、彼女は吐血した。
その口は、活火山の噴火口。まぶしいマグマを噴き出
し絶命した。わたしは、彼女の血を浴びながら、「もっ
と静かに優しく消え入るように死へ向かってゆくもの
だと思っていたのに。」と、呟いた。彼女は「そんな
ことは《わたし》と《死》にしか、わからないことよ。」
と答えた。「そうだろうか?」と、叫んだ時には、彼
女はもう亡骸だった。彼女と死のあいだに横たわって
いる、それが何かを知りたくなってしまった。そして、
あなたにも知らせたくなってしまった。そういえば、
彼女の口癖は、「君に問いたい。」だった。わたしはい
つも「どうぞ。」と答えていた。

On the dawn of the fifth day of her coma, she died as she lived. Her paper-thin body that was like a weakened skin bag, she vomited blood with such violent strength we didn't know she still had. Her mouth was a volcanic eruption. She spouted out blinding magma and expired. Drenched in her blood, I muttered, "I thought that one's journey to death would be more like a quiet, gentle disappearance." She replied, "that is something only I and Death could know." "Is it? " I shouted back but by then, she was a mere corpse. I wanted to know what lay between her and death. And I wanted to let you know. That reminds me, she had a habit of saying, "I'd like to ask you something." To which I always replied, "Go ahead."

2017.10.14のスープ

寒露の候「貝の味噌スープ」

□ **材料（38人前）** ※材料はお好みで

・油揚げ　9枚　・しじみ　真空パック9袋（一人4～5個）　・小葱　1束
・和風だし　10個　・味噌　適量　・水　7ℓ

① 油揚げは熱湯で油抜きをし、短冊切りにしておく。
② しじみは真空パックから出し水洗いしておく。
③ 小葱は小口切りにする。
④ スープ鍋に水・和風だし・しじみ・油揚げを入れて火にかける。
⑤ 煮立ったら、火を止め、味噌で味を調える。
⑥ 味が付いたら、もう一度火にかけ、小葱を入れる。沸騰する前に火を止める。

この日はみなさんに自分のお椀を持ってきてもらいました。
しじみのお出汁が出て心もほっこりする味噌スープでした。

Rest In Peace, Tokyo Chapter 5 みつける

November 17th , 2017

珈琲店ぶな

彼女が死んだ後、痛ましいことが続いた。海が怒りだし、たくさんの鳥が空を彷徨い、人々が泣き続けた。それほどのことだったから、この世からいなくなったものもたくさんあったけど、ほとんどの人がそれに気付かず、そのための儀式もおろそかになった。彼女の葬儀は、10年経ってから行われ、わたしにも案内状が届いた。そこで知ったのは、東京と呼ばれていた彼女は東京で生まれたわけではなく、移民の娘で、長く暮らした猫は東京生まれだった。たくさんのお悔やみが飛び交う中、「自然の中では、早く動くものにはすべて罪がある。」そう述べた方は、彼女の猫に似ていた。足速に帰るその方の背中を追っていると、またどこからか「今度おいでる時は、わたしどもはもうおらんばい。それでもまたおいでなあ。」彼女と同じその声に、わたしは振り向いた。

Tragic events followed her death. The sea grew angry, lots of birds took to the sky, and people continued to weep. Because it was such a significant event, even though there were many things that disappeared from this world, most people didn't even notice, and the funerals for those were neglected. Her own funeral was held 10 years later, and I too received an invitation to it. What I learned then was that she who had been called Tokyo had not been born in Tokyo. She was a daughter of people who weren't from Tokyo, but the cat she lived with for a long time had been born in Tokyo. Among all the condolences that fluttered about, I heard, "In nature, anything that moves fast has sin." The man who said that looked like her cat. As I ran after him who had a brisk walk himself, I heard a voice coming from somewhere. "The next time you come, we won't be here anymore. Still, do come back again." It was the same voice as hers, so I turned around.

2017.11.17のスープ

立冬の候「冬のあったか白菜スープ」

□ **材料（28人前）** ※野菜の量はお好みで

・にんじん　3本　・白菜　1/2株　・しめじ　3房　・ベーコン　1200ｇ　・しょうが　1個　・牛乳　1ℓ
・ホワイトソースの素　2箱　・野菜ブイヨン　5個　・水　4.2ℓ　・塩　適量　・コショウ　適量

① にんじんは皮をむき、半月切りにする。カットしたにんじんは一度軽く茹でておく。
② 白菜は白い部分はそぎ切りに、緑の葉の部分はざく切りにする。
③ ベーコンはサイコロ状にカットする。しめじは石づきを取って小さ目にカットする。
しょうがは細かくみじん切りにしておく。
④ スープ鍋にオリーブオイルを入れ火にかけ、ベーコン、しめじを入れて軽く炒める。
⑤ 鍋に白菜の白い部分を入れ、野菜がかぶるくらいの水と野菜ブイヨンを入れて煮込む。
⑥ 煮立ったら弱火にし、茹でておいたにんじん、白菜の緑の葉の部分、しょうがを入れてさらに煮込む。
⑦ 白菜の緑の葉の部分がしんなりしたら、火を止め、ホワイトソースの素、牛乳、塩・コショウで味を調える。
⑧ 味が付いたら、もう一度火をつけ弱火で煮込む。沸騰したら完成。

旬の白菜たっぷりの真っ白いスープを作りました。
しょうがが入っているので体がとても温まりますよ。

Rest In Peace, Tokyo
2017.5.17～2017.11.17
その2

2017年より、メンバーとともに伴走したドラマトゥルクの三人が語る「Rest In Peace, Tokyo」全7公演の道のりと、目に鮮やかな食卓の心象風景。

メンバーの鳥瞰的視点のエッセイと、全ての会に登場し問いを与えてくれたひとりの参加者からの書簡。

2016.5.11　江古田市場跡

2017年「Rest In Peace, Tokyo」の出発とともに、メンバーと伴走してきたドラマトゥルク3人の鼎談。毎月のようにスープを囲む、その度に生まれるちいさな死への気付きから、東京を含めた都市の側面を掬い、また個人へと潜ってゆく思索の過程を、さまざまな角度から語る懐旧談。

2017年12月21日　小竹町会館にて
語り手：阿部健一　西田秀己　前田愛実
聞き手：草栁亮

Rest In Peace, Tokyo ドラマトゥルク鼎談

草栁：最初の3年間はずっと羊屋さん宅でやっていて、4年目にして外に開くことになった時、それまでいろいろな材料を放り込んで発酵させてきたぬか床に、手を突っ込んでかき混ぜるような役割を担ってくれたのが、ドラマトゥルクのみなさんだったと思うんです。関わり始めてから終わるまで、プロジェクトに対する解釈の変化はありましたか。

前田：とにかく羊屋さんが「Rest In Peace, Tokyo」が分からないと、ずっと言ってたので、羊屋さんが潜在的に分かってることを引っ張り出せたらいいのかな、と最初は思ってたんです。あと、伏線になる要素を提案してお客さんの手伝いをするとか。だけど本人に分からないものを私が分かるはずもなく、結局何もしなくても自分で勝手に分かっていった（笑）。その過程で自分なりに思ったのは、「猫の死、まぷの死」と「東京が死んでいってる」ことの繋がりが鍵だなってこと。それが私なりに分からないと、ずっともやもやするなと思ってました。

西田：ぼくも同じような感覚がありますね。最初は、分からないことが多いプロジェクトなので、とりあえず見てくれないかって感じでした。その時僕も何だろうこれはって思ってたんですよ。何が潜んでいるのか分からないけど、とにかく恐る恐る手を突っ込んでみた。でもその分からなさ、白玉さんが分からないなりにやろうとしている事は、苦しみながらそれでも考えていかなきゃいけない、大事な事なんじゃないかって直感があった。そこには巻き込まれてみたい、僕なりにそれを追いかけてみたいと思いました。

阿部：僕は最初からではないですが、プロジェクトが始まった2014年の秋に羊屋さんと出会って以来、緩やかな出入りがありました。当時僕の演劇のグループも、江古田でプロジェクトをやっていて、それまで接点はなかったんですが、秋に江古田市場で演劇をやったとき羊屋さんが観に来てくださり、その後2015年3月の対談紀行に出させていただくことになった。それ以来、月に一回の「江古田スープ」も出たり入ったりしていました。その間ずっと僕の中では、羊屋さんが宮本常一を引いて言った「減速装置」って言葉が、このプロジェクトをラベリングするものとしてありました。

減速装置としての「Rest In Peace, Tokyo」

前田：発展を減速するっていうことですよね？あるいは衰退を遅らせる？

阿部：さまざまな加速する物事に対する減速ですかね。都市に対してかもしれないし、生活に対してかもしれない。もちろん「減速装置」の他にもさまざまな側面を含んでいたとは思うのですが。

西田：プロジェクト自体が「減速装置」であると。

阿部：そうですね。月に一度集まって食事をするって事が、「減速装置」としてトータルにしっくりきていた。でも2017年から「Rest In Peace, Tokyo」が始まり、ドラマトゥルクとして関わるようになってから、それだけでは説明しきれないことが行われていると気づいた。「減速装置」的なものが、どんどん分からないものに変容して行った。8月に行った「Rest In Peace, Tokyo きこえる」が「減速装置」としては、一種の到達点に思えたんです。空間の設えであったり、その中での人の行動であったり、思い至ることが一つの完成形のように思えた。

前田：「Rest In Peace, Tokyo」のデフォルト的なものが、あそこで得られた感はあるね。ここはこう言って、こう行動する、みたいな緩やかな決まり、ふるまい方や喋り方も分かった感じ。

阿部：「Rest In Peace, Tokyo」が始まった時は、羊屋さんやスープメンバーの狙いが明確にあって、このように振る舞ってほしいっていうディレクションが結構あった。理想形があってどう到達するかっていう。ただこの8月以降の回は、みんなで一つの作品を作るような感覚ではなく、より個人的なものへと移行して行った気がします。その場は共にするけれど、それぞれが自分の理解でその場を過ごすっていう。

前田：白玉さんの存在の仕方が定まってきたのもある。自然に場をコントロールする感覚を身につけたというか、開き直ったというか、何が起こってもまあいいというような。最初からある程度はそういう感覚はありましたが、もっと別の次元になった感じがします。

西田：最初の3年間で中にいる人たちが減速してきたように、「Rest In Peace, Tokyo きこえる」で参加者も含めて全体がいい塩梅に減速されたんでしょうね。今振り返ると、一つの慎ましさみたいなところに立ち返れた瞬間だったかなと思います。人間のあるべき速度、自然に生活を振る舞える速度に落ち着いたというか。なんとなくすごく居心地がよかったから、みんなこの速度でいいって感じたのかもしれないですね。

前田：あとこの時期からお客さんの中にも慣れた人が出てきた。ある意味、「Rest In Peace, Tokyo きこえる」が一つの行事的な雰囲気を持ち始めて、文化みたいなものができ始めた。行事って何が起こるかだいたい分かるじゃない。参加する側も振る舞いが定まってきた部分があると思う。

阿部：そういう振る舞いは伝播しますもんね。

前田：新しい人も周りに倣うしね。また会場が町会館だったから余計フィットしてた。あとあの回は、白玉さんが直会（なおらい）って言葉を出したんだよね。「リヤカーを引いてくのも一種の直会です」と明確に言語化したんです。そうやって言葉を与えたのも大きかったと思います。

西田：参加する方もイメージしやすくなりますもんね。寄合いみたいな感じで。

前田：お盆の時期だったので浴衣を着たり、野菜で馬を作るみたいな設えもあった。そういうちょっとしたヒントでお客さんも分かる。

草栁：お葬式なんかも、参加する人は何をしたらいいかあらかじめ分かってる。だからディレクションしなくても自然にみなさんが動き出してましたね。

阿部：確か同じタイミングで儀式という言葉も使わ

れてました。「儀式かもしれない」と。

前田：自分の固有の生活史の中から引っ張り出したいろいろな振る舞いを、寄せ集めてつくった固有の儀式みたいな感じかな。そういうものに少しずつなっていった気がする。

西田：結局やってることは単純ですもんね。ご飯作ってみんなでたべる。

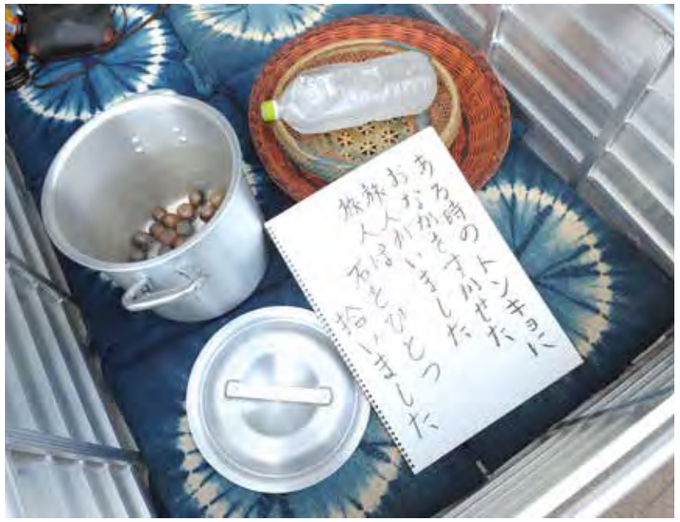
前田：その単純さをしっかり凝縮して味わうモードにするのは、大変な作業だった。最初からそれをやりたかったと思うけど。シンプルなものをしっかり堪能して味わう、ただスープをシェアするってこと。

西田：そこに到達するには減速期間が必要だったんですよね。減速して初めて感じ取れる。僕的には江古田斎場の回までは、減速して人間の生活に回帰する期間で、そして斎場でついに死と対峙する、その後まだ「ぶな」（喫茶店）の回があって本当に良かったって思います。斎場で終わらず最終回が「ぶな」でよかった。

前田：最終回で収まりがつくというか、笑えるようになる。最後に白玉さんが歌った、スイートメモリーズで本当に思い出になって、懐かしくなるところまでいった。

阿部：四十九日ってイメージもあったんです。葬儀やある種のクライシス後に、人間が区切りをつけて日常に戻るまでの時間が四十九日かなと。斎場から「ぶな」まで実際は一ヶ月ですけど、そういう期間だったのかな。

前田：四十九日で死者が昇天するイメージがありますけど、確かに一つの区切りですね。でも考えたら、まぷの四十九日はずっと前なんだよね。だから「ぶな」でやったのが四十九日だとしたら、まぷの場合はこのプロジェクト自体が、ものすごく引き伸ばされた四十九日。



草棚：5年かけてね。

阿部：まぷさんは5年前ですか、そういう意味ではすごい時間が流れてますね。でも斎場では、まぷさんのことにとどまらず、とても個人的な時間がお客さんの中にも流れ始めた感覚がありました。斎場での10月14日の「Rest In Peace, Tokyo くすぐる」が個々人にとっての、何がしかの弔いや失うことについて考え始める日だった気がしています。

前田：斎場はやっぱり場の力もすごかったから、場が人の行動をあらかじめデザインするとこがあるし、その振る舞いからそれぞれ感じるところも増幅したんだろうね。

阿部：しかもあの日は、羊屋さんのまぷさんへの弔辞から始まった。各々がそれを受け取った上で、どう噛み砕いてゆくかという過ごし方をしていたのかなと思って。それを最終的にもう一度着地させようとするのが「ぶな」の日だったのかなという解釈です。僕は。「Rest In Peace, Tokyo」の Chapter 0、1、2、3と回を重ねて弔辞が頂点、そこから下り坂で着地するっていう。

前田：個人的なものが普遍的なところに還元されていく感じかな。「ぶな」は異様に穏やかでしたもんね。

西田：終わりとしてすごく心地よいものでしたけど、結局あれは何だったんだろうかって考えると、未だに分からない。「まぷさん」のストーリーが根底にあって、やっと弔辞で語ることのできる存在になったということはひとつあるけれど、白玉さんが「Rest In Peace, Tokyo」のポストカードに書き続けた、「彼女」と呼ばれる東京のことや、愛実さんが絵本にした「石のスープ」の旅人も、彼は次どこに行くのかなと思ったりする。スープを通して出てきたいろんなキャラクターが、これからも物語を紡いで行くのが楽しみな感じがあるんです。一体これは何なのか、みんな寄ってたかって分かんなかった訳じゃないですか。でも触っていたい、形を確かめたいって気持ちで、お客さんも参加してたと思うんですね。いろんなヒントがスープの具材になるみたいにして、これからも何かを語っていくように思います。

喪失の予行演習

草棚：寄ってたかって分からないっていうのは、まさに僕も感じてました。ラベリングする前の言葉にならない状態、赤ちゃんが言葉を獲得する前の状態みたいな状況。分からないものに関わる中、言葉に表現出来たもの、出来なかったものはありましたか。

前田：羊屋さんのまぷを亡くしたことに対する、しつこい喪失の力、嘆く力、悲しむ力がものすごくて。昔から人が誰かを亡くした悲しみをバネにして作品を作るとか、偉業を成し遂げることはあるけど、また少し違ったニュアンスを感じていて、そこをなんと表現していいか分からないです。嘆きを作品に昇華するというより、悲しむ力をもっと直接パブリックに返す方法、祭りとか儀式みたいな仕組みにしてる感じがしたんです。なぜ社会に返す必要があるのかというと、江古田の街にしろ東京にしろ、死者たちが作ってきたものだから。死んだからといってその人格とか猫格は無くなったのか、いや違うだろう。亡くなった人格、猫格がこちらに与える影響って計り知れなくて、多分それを全部無視したら、世界は滅びるって思った。私は勝手にすごい腑に落ちてたんだけど。

西田：でもまさにそういう事なんじゃないんですかね。弔いですよね、やっぱり。

前田：弔う時に死者を想うこと。死者の背後にあるいろんなこと。

西田：弔いという言葉が一貫してありましたが、その意味を広げてくれるいい機会だったかな。弔いというと死のイメージがまとわりつくんですが、単に死者に追悼の意を唱えるだけではなく、弔いを通してその人格をもう一度目の前に形作るというかね。それは、人であろうが猫であろうが都市であろうが、石であろうが多分、何にでも通ずる。

前田：「あなたは何考えてたの？」とかね。死だけでなく、過去のもの、死んだもの、終わったものの格、質、概念を想う。そういう事で減速してゆく「減速装置」なのかな。

西田：そこまで眺められるように減速して、石ころだろうが枯葉だろうが、いろんなものに想いを抱けるような心を取り戻す旅だった。

阿部：今のお話に共感しつつ、斎場の回以降に思っているのが予行演習ってことです。斎場に僕の89歳の祖父を呼んだじゃないですか。祖父がマイクを持って「じゃあ、この辺のことをちょっとお話ししましょう」って小竹町と江古田の話をし始めた時、ああこの人は昭和3年から来たんだって強く感じたんです。昭和3年生まれで、いま同じ時代を共有していても、同級生もあまり残っていないし、当時の話ができる人はほとんどいない。そう思った時、高齢者だからとか僕より早く死んでしまうだろうってことだけでなく、絶対に共有できない何かを感じた。普段から家で聞く話ではあるんですけど、パブリックな場で聞くと違って聞こえて、その時になぜか予行演習という言葉が浮かんだ。

前田：確かに阿部くんのおじい様が、あそこに居たのは凄かった。日常から離れてポンといらっしゃると、いろんな情報が詰まった生きた博物みたいだった。予行演習というのは個人的な意味で？

阿部：昭和3年から来た祖父は、平成29年まで失い続けてきてると思うんです。喪失の連続の上で今89

歳になって、自分自身もいずれ亡くなる。すごい孤独を感じたんですね。高齢だからというだけじゃなく、失い続けた結果、自分もまた孤独になっていく。これは未来の自分の姿なんだ、失っていくことに対する予行演習だと感じたんです。既に失ったものへの弔いだけでなく、これからも失い続けていくことに対するリハーサルだとも感じました。昭和3年の江古田・小竹町はじき失われるだろうし。

前田：つまり将来、平成29年も失われるってことだね。

西田：それですごく思い出したのは、大内さん（アーツカウンシル東京の担当者）の「みんなで看取れば怖くない」っていう言葉。すごい感動した。今までもそうやってきたわけで、失うことは一大事に違いないけど、ずっと繰り返されてきたこと。その喪失とどう向き合うかには、やっぱり予行演習が必要で、看取りの時間をみんなで上手くこなしてゆく練習の機会は昔もあったと思う。それは人間の死だけじゃなくて、いろんなものの喪失にも当てはまる。

阿部：しかも、それぞれにとっての演習をみんなでするっていう。

西田：それは演習に止まらずに、もっとその先の大事なものを考える機会にもなりますよね。

前田：人とか猫の死は生活の中で予行演習する機会はあるかもしれないけど、都市の死には気づきにくい。ちょっとずつ死んでいってるからね。あと、まぷの死は、街の死なんだよね。まぷは街だったから。

西田：あ、そっか。あー。

前田：江古田＝まぷってとこもある。まぷがよく江古田のここに出没した、ここで散歩してた、ここで鳥を狙ってたのって。彼の足取りはやっぱり江古田の街。まぷの死は街の死。「まぷがたたずんでいた桜の木はもう無いの」とか。

西田：江古田という街が、まぷさんが闊歩してた頃とどんどん変わっていく訳ですよね。当時と変わらないうちはまだ、まぷさんの足跡とか存在が漂っている感じもするけど、街が変わるとどんどん両方同時に失われていく、それはすごい悲しいことかもしれない。

前田：だから、昭和3年の江古田が無くなったように、まぷが生きてた頃の江古田も無くなって、今の平成29年の江古田になってる。

阿部：祖父が亡くなる時に、本当に昭和3年の江古田は無くなるんだろうなって気がします。「まぷは街」を裏返すと、街はまぷ、街は人だと思う。人が作り運営しているものなので。

前田：本当そうね。昭和3年の江古田は、阿部くんのおじい様が亡くなられた時に失われちゃう。

阿部：完全に失われるのかなと。

前田：そして記録になるね。

阿部：記憶ではなく、記録にしか残らなくなりますね。

西田：なんかすごい今、腑に落ちちゃいました。どうしよう、腑に落ちたくなかったのに。

草柳：僕もすごいどきどきしてきちゃった。

羊屋さんの変化

草柳：先ほど、羊屋さんが「まぷの死をパブリックに返してきたのでは」という話がでましたが、特に2017年の「Rest In Peace, Tokyo」を通じて、羊屋さんの変化をみなさんはどう見ていましたか？

前田：しつこく変わらないし、変えない。一貫してしぶとい。凄い。

西田：一貫して悩み続けてもがいている。だけど、まぷさんのことに関して言えば、ある程度、パブリックに出来るようになった変化は感じます。とは言え、一貫して凄く深い穴を覗いているような感じはありますよね。

阿部：一貫して変わらないながら「Rest In Peace, Tokyo」の中で、一番の関心が少しずつ移行していったような気はします。最初の頃は減速のための設えをどう構築するかが一番の関心だったように思うけど、斎場の前後あたりから、開き直りというか、成るように成ればいいというような変化はあったかなと。

前田：悲しくなくなった訳じゃ無いんだけどね。例えば、鳥葬とか風葬は、長い時間をかけた喪の作業だと思うんだけど、「Rest In Peace, Tokyo」も〝パブリック化〟葬というか、社会に還元するスパンの長いお葬式みたいに思う。そして、まぷのことを参加した人たちの心に植え付けて終えるって感じ。そうすると悲しみの質がギリギリといつも痛いものでは無くなる気がする。

西田：ちょっとずつ、まぷくんの死から東京の死に視点が変わっていったのかもしれないですね。同じものじゃ無いかもしれないけれど、表裏一体の片方から別のほうに意識がながれた。

前田：まぷを思うことと都市を思うことは同じこと。社会化された感じかな。

西田：見つめる対象がまぷさんの命から、もちろん同じ命ではあるけれども、言葉としては都市っていうような方、まさにパブリックになってるってことですよね。

阿部：でも、それは本来同質のものなんだってことですよね。

西田：なんかすごい構造ですね。結局は同じものを見つめている。

なぜ残骸を撮影し始めたのか

前田：1回目の後の反省会という飲み会の時、お店の方がゆで卵を山ほどサービスしてくれて、それがすごい面白かったんです。ゆで卵って皮を剥く時も、

食べてる時も、夢中で無言になっちゃうじゃないですか。それが「Rest In Peace, Tokyo」が求めている、食のスタイルにぴったりだと思ったんですよね。その時の残骸、卵の殻の山、シンプルな形をした命のぬけ殻の山が、建築とか都市に見えた。スクラップアンドビルドを続けていける街の状況と同じ、自分たちが食べて残骸を残す繰り返しと、全く相似形に見えちゃう感じがしたんです。残骸自体ビジュアルとして面白いし、リンクするんじゃない？全く同じことなんじゃない？って。はっきり言語化しなかったけど、これはフィットするってその場にいた人たちが感じてたと思う。だからそれ以来、食事はむしろ殻が出るメニューを考えましょう、そしてシンプルにしましょうってなった。自分たちが食べた証、生きた証、同時に自分たちが陵辱をつくした証を、単に暴力的なものとか汚いものではなく、造形としても面白く美しいものとして、在るがまま撮るってことを「毎回続けたら面白い記録になるんじゃない？」って始まりました。

「視点」を変えて見えてきた速度

西田：いろんなことを試す中、今思えば僕もスローダウンする方法を考えてたと思うんです。視点をいつもと変えてみるには分かりやすく、椅子をやめて座布団で床に座る。「よっこらしょ」って瞬間は深みが違うじゃないですか。腰をおろして視点が数十センチ落ちると、突然世界の見え方が変わる。日常の形を変えたり、視点を持ち上げたり沈めたりってい

うのは、僕が美術家として作品でやってることなんです。「きこえる」の回で、直感的に落としてみてはと思ったのが、それはすごく良かった。やっぱり床に座って、座卓を囲むとスローダウンするんですよね。向かい合う距離はあっても、同じ床にいる共有感がある。そこで一つの「Rest In Peace, Tokyo」に必要な速度感を得た感じはしました。

前田：地べたに近いことが身体に与える影響は半端なかった。地続きだと死んだ人に近いし、寝そべるのもすぐだから、隣の人との距離感も違う。同じ距離でも椅子より心理的に近いと思った。

西田：同じ床を共有してますからね。疲れたら寝られるし、意識的にもとろけた状態。空間的に変わるだけじゃ無くてね。

前田：個々の意識がはっきり分かれているというより、普遍的無意識で個がちょっと繋がってるみたいなね。

西田：その繋がりがうっすらと見えるような手応えがありましたよね。上手くスローダウンできた感じがしました。

「斎場」のこと、江古田のこと

阿部：結構早い段階で斎場を使うというアイディアは決まっていたので、僕は斎場でやる意味や、最終回の一つ前にくるということをずっと考えていました。その前までの回がスローダウンして、弔いや失った物事に対する回路を開くものだとしたら、それを反転させる回として斎場がある。だからそこからどうやって個人的な事にしてゆくのかが課題でした。なので弔辞が「Rest In Peace, Tokyo」の頂点だと僕は思っています。

西田：あの弔辞が物凄い迫力で、あそこで視点がバチっと切り替わる、ある種ショックでしたね。

阿部：ですね。斎場という場が与える影響も強い。普通誰かのお葬式や法事で行くのが斎場ですけど、会場に着くとなんの説明もなく羊屋さんの弔辞が始まる。今いるこの場は何だと考える回だったと思います。なので、特別なディレクションはせず、シンプルな食事とおしゃべりの時間をとって、そのあと全員で外を歩くという流れになりました。僕は江古田で生まれ育って、そこで演劇もやっているので、明治天皇の愛馬の金華山号が最期を過ごした御領地だったという斎場の土地の歴史や、百年以上前の人々の行いをお客さんに手渡し、街歩きがどう変わるか考えていました。

前田：金華山号、いったん埋葬したのに剥製にしたいと掘り出させた話、すごかったね。あれはそういう喪の方法だね。明治天皇は、愛馬のかたちを留めた方法で弔いたかったんだと思うけど、掘り起こすとはね。土に返すって街と同化させることだって改めて思う。だから馬の話も、江古田の街とまぶのことを考えさせてくれるものだった。

阿部：僕も昔を知る方をたずねるうち、やっとお聞きできたお話でした。そういうものを手渡してゆくことで、街の見え方が変わるし、街を歩く体験も変わればと、意識していました。

前田 愛実（まえだ まなみ）

劇評ライター・ダンス企画おやつテーブル主宰。英国ランカスター大学演劇学部修士課程修了。早稲田大学演劇博物館助手、故・太田省吾氏、坂手洋二氏の演出助手を経て、現在は、現代演劇、コンテンポラリーダンスについて、雑誌、ウェブサイト等に寄稿する。ダンス企画おやつテーブルでは演出・振付けを担当。公益財団法人国際文化会館シニア・アートプログラム・コーディネーター。

西田 秀己（にしだ ひでみ）

１９８６年北海道小樽市出身。ノルウェー王国国立ベルゲン芸術デザイン大学修士課程修了。建築的な記号を用いながら、風景や環境に新たな経験を投じる美術家。

これまで By the mountain path（英国・ロンドン、２０１５）や 光州ビエンナーレ２０１４（韓国・光州、２０１４）、札幌国際芸術祭２０１４（札幌、２０１４）、Lexus Hybrid Art ２０１３（ロシア・モスクワ、２０１４）他、様々な国、場所、環境でインスタレーションを展開する。２０１７年１月から４月まで英国デルフィーナ財団アーティスト・レジデンスフェローとしてロンドンに滞在。

阿部 健一（あべ けんいち）

１９９１年生まれ。東京都練馬区出身。演劇活性化団体ｕｎｉ主宰・演出。廃工場や商店街、喫茶店など生活に近い空間での公演を行う。練馬区を拠点に地域に根ざしたプロジェクトを展開し、２０１４年に地域でのリサーチをもとに作品をつくり上演する企画「ちょいとそこまでプロジェクト」の第一弾を江古田駅周辺で実施。２０１４年末に閉場した江古田市場にて「ナイス・エイジ」を上演した。２０１７年４月より第二弾として練馬区・高松編が進行中。

千葉大学大学院園芸学研究科博士後期課程に在学。演劇によるまちづくりについて研究に取り組む。

https://uni-theatre.jimdo.com/

ゆで卵の皮を剥く時も、食べてる時も、夢中で無言になる。それが「Rest In Peace, Tokyo」が求めている、食のお作法だと思った。そして、食べ終わった後の、卵の殻の山、シンプルな形をした命のぬけ殻の山が、建築や都市に見えてきた。スクラップアンドビルドを続けていける街の状況と同じ。食べる、その亡骸が残る、その繰り返しと、相似形にも見えた。

自分たちが食べた証、生きた証、同時に自分たちが陵辱をつくした証を、単に暴力的なものとか汚いものではなく、造形として在るがまま撮るってことを毎回続けることで、相似形に気付いてくれる人もいるかもしれないなと思いながら、シャッター音を聞いていた。

Rest In Peace, Tokyo Chapter 1　はなまる　June 19th , 2017　小竹町会館

「弔い」というと死のイメージがまとわりつくんですが、単に死者に追悼の意を唱えるだけではなく、「弔い」という儀式を通して、死者の人格を、もう一度再生させて向き合う。それは、人であろうが猫であろうが都市であろうが、石であろうが多分、何にでも通ずるのだけど。

再生した死者に「あなたは何考えてたの？」って聞きたい。死だけでなく、過去のもの、死んだもの、終わったものの格、質、概念を想う。その手間を丁寧に行うことが、自然に生活を振る舞える速度へと減速してゆく「減速装置」なのかもしれない。

Rest In Peace, Tokyo Chapter 2　みとれる　July 17th , 2017　norari : kurari cafe & galette

失うことは一大事に違いないけど、ずっと繰り返されてきたことで、じゃあ、毎回、その喪失と向き合うためには、やっぱり予行演習が必要で、看取りの時間をみんなで上手くこなしてゆく練習の機会は、太古の昔もあったと思う。それは人間の死だけじゃなくて、いろんなものの喪失も含めて。

しかも、個人にとっての予行演習を、みんなでしていた。

そして、それは演習に止まらずに、もっとその先の大事なものを考える機会にもなっていた。

人とか猫の死は生活の中で予行演習する機会はあるかもしれないけど、都市の死には気づきにくい。ちょっとずつ死んでいってるからね。

Rest In Peace, Tokyo Chapter 2.7　はぐれる　July 26th , 2017　青ヶ島

江古田＝まぷってとこもある。まぷがよく江古田のここに出没した、ここで散歩してた、ここで鳥を狙ってたって。彼の足取りはやっぱり江古田の街。まぷの死は、ある側面、江古田の街の死。まぷが木陰でお昼寝していた桜の木は、いまはもう無いそうだし。

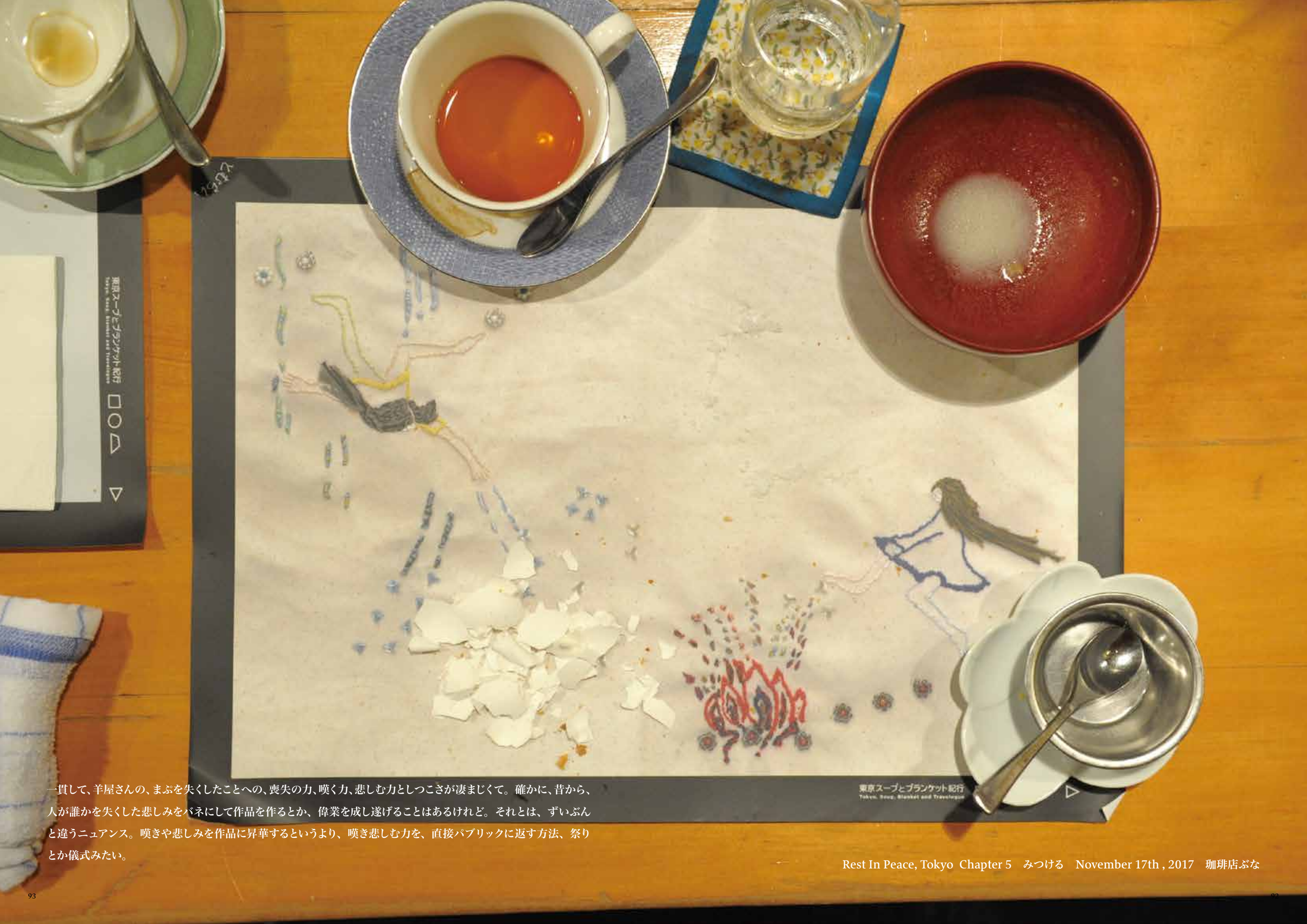
江古田という街が、まぷさんが闊歩してた頃とどんどん変わっていく訳ですよね。当時と変わらないうちはまだ、まぷさんの足跡とか存在が漂っている感じもするけど、街が変わるとどんどん両方同時に失われていく、悲しいといってよいのかもわからない。

[春分] 谷野哲郎（陶磁器、ガラス、木製品）

Rest In Peace, Tokyo Chapter 3　きこえる　August 11th , 2017　小竹町会館

昭和3年に生まれた僕の祖父は、平成29年のきょうまで、失い続けてきたのだとも言えると思うんです。喪失の連続のなか、今89歳になって、彼自身もいずれ亡くなる。高齢だからというだけじゃない。そしてこれは未来の僕の姿なんだと、失っていくことに対する予行演習だと感じたんです。既に失ったものへの弔いだけでなく、これからも失い続けていくことに対する予行演習だとも感じました。

Rest In Peace, Tokyo Chapter 4　くすぐる　October 14th , 2017　江古田斎場



一貫して、羊屋さんの、まぶを失くしたことへの、喪失の力、嘆く力、悲しむ力としつこさが凄まじくて。確かに、昔から、人が誰かを失くした悲しみをバネにして作品を作るとか、偉業を成し遂げることはあるけれど。それとは、ずいぶんと違うニュアンス。嘆きや悲しみを作品に昇華するというより、嘆き悲しむ力を、直接パブリックに返す方法、祭りとか儀式みたい。

Rest In Peace, Tokyo Chapter 5　みつける　November 17th , 2017　珈琲店ぶな

2014年大晦日 江古田市場閉場の日

2014年6月 閉場半年前の江古田市場の看板

1960年代 江古田市場入船屋煎豆店

2016年4月 更地になった江古田市場跡

街並みを眺めて考えたこと

東京スープとブランケット紀行　デザイナー　草柳亮

都心にある高層ビルの展望台から、見渡す限りに拡がる街並を眺めて考えた。それぞれ人は何故その場所に住んでいるのか。理由はさまざまだろう。通勤や通学の都合であったり、経済的な理由であったり、代々そこに住んでいるからという人もいる。縄文時代の人たちはどうだったのだろう。川や湖や海の近くに多くの縄文遺跡があることは、狩猟採集生活を維持する上で必要な自然環境がある場所を選んでいたことの証拠である。働いたり学んだりすることが現代人の生活の中心であるならば、その都合で住む場所を選ぶのは合理だ。

東京に住んで30年近くのあいだに、10回の引越をしてきた。その時々の都合で、住む街を選んできた。それぞれの街で近所の飯屋や飲み屋、八百屋、肉屋など、極力チェーン店ではないお店を利用し、その街に繋がろうとしてきた。だが、結局のところ、地域に関わるにはどこにアクセスすればよいのか、いまだによく分からず彷徨っている。そもそも、共通利害のない都会生活者には、地域コミュニティーなど存在するのかとさえ思っていた。

東京スープとブランケット紀行のメンバーで、私は唯一江古田の外から通っていた。江古田は今まで住んだどの街よりも、生活の基盤が充実している。基盤とは、縄文人がかつて必要としたような、食料や生活に必要なものを安心して調達することのできる環境という意味である。重要なのはその基盤を支える人たちが、お互いにこの街を支えているという、相互扶助の関係性にあるということだ。このプロジェクトを通じて、江古田を知るようになり、彷徨っていた自分に欠けていた視点を持つことができたように思う。それは、生活とは用意されたものではなく、自分たちで日々をつくり、繋いでいくことだという、ごく当たり前の視点である。

「生活圏に起こるものごとの始まりと終わり、その間を追求する」。この得体の知れないプロジェクトに、はじめは戸惑いを感じていた。普段たずさわっている仕事の、目的志向型の思考とは異なる思考を必要としたからだろう。戸惑いを感じるたびに、「生活」とは何だろうと、自問自答を繰り返してきた。「Rest In Peace, Tokyo」の最終回、いつものお肉屋さんの店先で、参加者が買い物をする様子を遠目に見ていた私に、「愛おしい光景」という言葉が降りてきた。4年間、毎月のように街を歩き、買い物をし、スープを作って食べて話をする。ただそれだけのことをしてきただけなのに、この言葉は私にとって大きな贈り物となった。どんなに世界が加速しようとも、日々、スープを作り、話し、暮らしたい。そう思う。

このプロジェクトを知った人たちが、それぞれの住む場所で、それぞれの生活に愛着を持てますように。

草柳亮（くさなぎりょう）
デザイナー、ミュージシャン、建築家
1972年東京生まれ。
商業施設、水族館などの建築・環境デザイン、展示デザイン、インテリアデザイン、グラフィックデザインを行うかたわら、Blues & Soul Band のメンバーとして活動中。
東京スープとブランケット紀行ではデザイナー兼シェフとして、唯一、練馬区外からの参加だったが、次第に江古田に魅了される。

文京シビックセンター展望室より江古田方向を見る

羊屋白玉さんの猫が亡くなった翌月に離婚をし、その翌年に体調を崩して仕事を辞めた。さらに次の年、羊屋さんや東京スープとブランケット紀行に出会ってからの4年間に、対談紀行とRest In Peace, Tokyoの合間の日常で思いめぐらしたさまざまな「失われたもの」について、羊屋さんに宛てた4通のメール。

佐藤 浩太

I はじめに

2014年春の中房総国際芸術祭での演劇作品を観て指輪ホテルに興味を持ち、羊屋白玉さんがディレクターをする東京スープとブランケット紀行の、初めての公開企画であった対談紀行2014秋篇に参加してみた。アートについて学んだり仕事にしたりしたことはなく、知り合いがいるわけでもない、一般の参加者だった。

その後、対談紀行とRest In Peace, Tokyoに参加する中で、羊屋さんをはじめとするこのプロジェクトの企画・運営に携わるメンバーの方々に向けて、感想・フィードバックを書いたメールを合計4通送信した。

II 対談紀行

2016年7月2日0時28分送信
件名：対談紀行のフィードバック

・対談紀行2015秋篇の直後の昨年10月7日、とむらい（注：このプロジェクトで制作されたランチョンマットを使って、食事をしながら失われたものごとに思いを向ける行為。）を実行した。場所は東武伊勢崎線小菅駅近くの荒川河川敷、人数は私のみ一人、食べ物は近くのスーパーで買ったハンバーグ弁当とノンアルコールビール。

とむらいの対象は、私が弁護士の仕事を始めた年に担当した刑事事件の被告人の方で、1年近くの（比較的長い）お付き合いをしていたが、2009年春頃、東京拘置所で急に倒れて病院に運ばれ、その日のうちに亡くなった。面会に来る知り合いが誰もおらず、多分、最後に面会したのも私だったと思われる。

・亡くなったのが2月から3月くらいで、その後の桜の季節に、当時の自宅の近くの谷中霊園の桜並木で、夜に一人でワンカップを飲みながらその方のことを思い出した、ということがあり、その後何年かは、その季節になると同じようにしていた。

対談紀行2015秋篇でとむらいの説明を聞いたとき、一番最初に思い浮かんだのがその光景だった。

・荒川河川敷でのとむらいでは、当時ほどには、その方のことを思い出さなかった。

当時の桜並木でのワンカップが私にとってのその方のとむらいであり、私の中で既にその方のとむらいは終わっていたのかもしれない、と思った。

・荒川河川敷でのとむらいの後、数か月間、「私が誰かに（例えば羊屋さんに）とむらいの話をするとしたら、何の話をするのだろうか」について、考えた。

・しかし、そもそも、何がとむらいの対象となり得るのかが、よくわからなかった。

対談紀行の2014秋篇、2015春篇、2015秋篇前半で取り扱われた青ヶ島、江古田市場、小河内村と、2015秋篇後半でとむらいの具体例として示された「亡くなった他者」との間に、どういう共通点があり、それ以外に何が含まれ得るのかが、よくわからなかった。

・2015秋篇後半で、発言の機会を頂いたので、「何がとむらいの対象になり得るのか」という質問をした。羊屋さんの回答は、「あらゆる失われたもの」というものだった。謎は深まった。

・何がとむらいの対象になり得るのかについてはよくわからなかったものの、とりあえず、「失われたもの」というキーワードで、思いつくものを脳内でリストアップしてみた。

荒川河川敷でのとむらいの経験を踏まえ、「既にとむらいが終わったもの」よりは、「これからとむらいが必要であるもの、現在とむらい中であるもの」の方がよいのではないか、と思い、そのような観点から吟味した。

・2012年から2013年にかけて、私には、離婚をした、体調を崩した、仕事を（意図せずに）辞めた、などの、一般的にはマイナスと評価される出来事が立て続けに起こったが、これらの一群の出来事が、私にとって「これからとむらいが必要であるもの、現在とむらい中であるもの」なのではないか、という考えが思い浮かんだ。

・思い浮かんだ当初は、このような「自分に起こった出来事」がとむらいの対象となり得るのかについて、やはりよくわからなかった。

しかし、「亡くなった他者」や、「島や市場や村が終わること」との間を行ったり来たりしているうちに、多分対談紀行2016春篇の前後くらいの時期に、（理由はよくわからないものの）このような「自分に起こった出来事」もとむらいの対象にしてよいのではないか、という気がしてきた。

（・同じくらいの時期に、これらの出来事がマイナスではなかったように感じられるようにもなった。マイナスではなかったと感じられるようになったからとむらいの対象としてよいと思うようになったのか、とむらいの対象としてよいと思うようになったからマイナスではなかったと感じられるようになったのかはわからないが、何かしら関係しているような気がしている。）

対談紀行は、冒頭で、羊屋さんが、このプロジェクトについて説明する。まずは、2012年に亡くなった羊屋さんの猫について、猫をブランケットにくるんで看病したこと、友人が気遣って鍋に入れたスープを持ってきたこと、亡くなった猫をどうしようかと話し合ったこと、自分の死後についても考えたこと、など。次に、東京について、かつては輝いていて未来都市のようであったこと、その面影がなくなった現在の東京について考えたいこと、など。最後に、このプロジェクトのテーマについて、「ものごとの終わりについて考える」、「東京をとむらう」、など。

その後、羊屋さんやその他のメンバーの方々、ゲストが、非公開での活動やゲストの生活や仕事などについての対談をする。

対談は、「ものごとの終わりについて考える」、「東京をとむらう」というテーマと関連していることもある。例えば、青ヶ島は、1785年の大噴火で全島民が避難した。江古田市場は、2014年末に閉場した。小河内村は、1957年にダム建設で水没した。青ヶ島も、江古田市場も、小河内村も、東京都に所在している。

しかし、「ものごとの終わりについて考える」、「東京をとむらう」というテーマについて直接語られることはない。これらのテーマとの関連性がわからない対談もある。冒頭で登場した猫や東京が対談で再登場することもない。

なんだかよくわからない、というのが、初期の頃の素朴な感想だった。しかし、参加を重ねるにつれて、このプロジェクトが取り扱おうとしているよくわからないテーマについて、よくわからないなりに日常的に意識するようになっていった。

III Rest In Peace, Tokyo

2017年5月21日19時39分送信
件名：「はじまる」のフィードバック

・声の届く範囲に制約があり、会話が全体で共有されることがなかったことについて、「せっかく一つの鍋で作ったスープを分け合うのだから、全体で会話を共有する機会があってもよいのに」と、参加していた時点では思った。

しかし、終わった後は、段々と、「誰かが大きな声を出して全体の会話を誘導したりするのではなく、その場の自然な流れのままにあちこちで並行的に会話がなされることの方が、東京スープとブランケット紀行らしい」という気持ちの方が強くなってきた。

・「板」（注：「はじまる」では、各自がとむらいたいものごとについて書くための板が参加者に配られた。）について、事前の説明は、「最終的には銭湯で燃料にする」ということのみだったので、「板に書いた内容について、スープを飲みながら分かち合いをするのではないか」などと予想しながら、誰かに内容を知られる可能性があるという前提で、控えめに書いた。

結果としては、そのようなことはなかったので、「もっと踏み込んで書いてもよかったかもしれない」と、終わった後で思った。

・今回行われたことが「何に似ているか」に関し、「失われたものについて思ったり話したりする」という側面について、既存のものに類似点を求めるとするとするならば、論理必然的に「宗教的なもの」にたどり着きそうだと思う。
なぜなら、「あるかないか不確かなものについて、それがあると信じる」のが宗教の重要な要素だと思われるので、「失われたものについて、それが既に失われているにもかかわらず、思ったり話したりする」という側面については、どうしても、「宗教的なもの」に似ている、ということにならざるを得ないと思う。
・他方、「法事と似ている」という意見には何となく違和感があったのだが、後で分析してみると、法事では、家系や血統を確認・再生産するための儀式という性格から、言動が大きく制約される（施主と他の参列者の関係、挨拶の順番など）のに対して、今回行われたことにおいては、そのような制約はなく自由であった、というところが大きく違う、ということが違和感の原因であったように思う。

2017年8月12日16時07分送信
件名：「きこえる」の感想

○行列について

・江古田駅で、羊屋さんから、「行列をして食べ物などを運んでいく儀式」というイメージが示された。
また、リヤカーの荷台は、猫の絵、「はじまる」の板、石を盛った碗、お盆のときに玄関先に置くきゅうりの馬のようなもの、などが置かれていて、ただならぬ雰囲気になっていた。
・過去3回の行列では、買い物のときとリヤカーを引いているとき以外は、どのようにふるまったらよいのかよくわからずに、少し手持無沙汰な感じで、比較的漫然と過ごしていた。
これに対し、今回の行列では、冒頭の羊屋さんの発言や、リヤカーの荷台でただならぬ雰囲気を醸しているものたちのことについて考えながら歩いたので、行列自体にかなり集中した。買い物のときとリヤカーを引いたとき以外は、ほとんど何も話さなかった。
・思い返すと、会場に着いた時点で、過去3回と比較して既にかなり疲れていた。集中して行列したからではないかと思う。

○会場にて

・会場では、リヤカーの荷台でただならぬ雰囲気を醸していたものたちが、中央の円いマットに置かれていて、マットの上が祭壇のようだった。
・マットを中心とした会場の雰囲気に加え、席の配置など自分の世界に没入しやすい環境があったことなどもあいまって、会場に着いてからもほとんど何も話すことなく、黙々と話を聴き、食べ、考えた。
・なぜあれほど脳が疲れたのかはわからないが、羊屋さんの話については、単純に内容の分量が多かっただけではなく、過去3回の行き当たりばったりな感じ（否定的な意味ではなく）が減った、ということがあるのかもしれない。前回羊屋さんの話されていた「演劇」の要素が強まった、ということなのかもしれない。

○その他

・過去3回のうち、「はじまる」では、羊屋さんの猫の命日であったことや、鳥の亡骸のこと（注：「はじまる」で、当日、羊屋さんの自宅玄関先に鳥の亡骸が落ちていた、というエピソードが語られた。）などがあり、「失われたものごと」の中でも、「死」にスポットが当てられていたように感じた。
他方、「はなまる」、「みとれる」では、意識の対象が「失われたものごと全般」に広がったように感じた。
今回は、羊屋さんの話には、江古田市場、青ヶ島、奥多摩、東京なども含まれていたものの、再び「死」に重点が置かれたように感じた。
・江古田駅から始まっていた儀式についての話や、中央の円いマットの上の石を盛った椀ときゅうりの馬が、死を直接的に連想させた。
（・「死」から「失われたものごと全般」に一気にジャンプするところが、東京スープとブランケット紀行の「発明」ではないかと思うのですが、他方、儀式の力を使うと、どうしても、（「失われたものごと全般」というよりは）「死」が呼び出される傾向にある、ということが、悩ましそうだと思いました。）

2017年11月4日16時35分送信
件名：全体的なフィードバック

1　死ぬとはどういうことなのか

死ぬとはどういうことなのか、については、これまで考えていなかったわけではなかったが、より実感をもって考えるようになった。

ここのところは、次のようなことをよく考えている。
・死ぬまでと死んだ後の間に線を引くのは、生まれてから死ぬまでは体が物理的に同一性を保っているのに対し、死んだ後は体が物理的な同一性を保てなくなる、という点を重視しているからである、と思われる。
・しかし、考え方や感じ方が日々少しずつ変わっていく（時には劇的に変わることもある）、という点を重視すると、必ずしも「生まれてから死ぬまでの間は同一性が保たれている」とは言えなくなる。
・また、物理的には別の存在である自分と他人との間で、他人の考え方が自分に影響したり、自分の考え方が他人に影響したりする、という点を重視すると、自分の体が死んだ後にも自分の考え方や感じ方が生き続けることとなる。したがって、必ずしも「死んだ後は同一性が保たれなくなる」とは言えなくなる。

2　何をとむらうのか

この5年間くらいで一番とむらったものは何だったのだろう、と思い返すと、（昨年7月のメールに書いた離婚や失職ではなく）生きている特定の人との失われた関係であった、ということに気付いた。
このことをとむらうときには、失われた関係そのものというよりは、その人から影響を受けて自分が変わっていったことに心を向けているように感じる。
そして、このことは、上記1で考えていることともつながるように思う。

3　東京をとむらうとはどういうことなのか

「きこえる」の頃までは、東京スープとブランケット紀行でとむらおうとしている東京とは、羊屋さんが「未来都市のようだ」と感じていた過去の一定の時期の東京のことで、具体的には「1990年頃の東京」のことなのであろう、と思っていた。
したがって、これまでにとむらわれてきたさまざまな（猫、青ヶ島、江古田市場、小河内村などの）「終わり」を踏まえて、これらとは別の「1990年頃の東京」をとむらう、ということが意図されているのだと思っていた。
しかし、その後、東京スープとブランケット紀行でとむらおうとしている東京とは、もっと多義的なものであり、これまでとむらわれてきたさまざまな「終わり」の全てが、既に、東京をとむらうことと直接に結びついている、ということなのではないか、さらに言えば、「東京に暮らしている私」の中にある何かをとむらうことが、東京をとむらうことなのではないか、と思うようになった。

4　どうしてスープを囲むのか

どうして毎月スープを囲んでいるのか、については、未だによくわからないものの、（上記1とは逆説的に）そうは言っても死ぬまでは体から離れることはできない、ということと関連しているのではないかと思う。
対談紀行2014秋篇で、北川フラムさんが、「訪れたことのない土地については語らない」と言っていたことや、Rest In Peace, Sapporo（注：指輪ホテルが、2017年9月に札幌で上演した作品。）の終盤で、うさぎが、「お母さんが生き返ることがないことはわかっている」と言っていたことも、つながっているように感じる。

Rest In Peace, Tokyo は、まず、羊屋さんの猫の月命日の前後に、江古田駅に集合する。そして、交代でリヤカーを引いて行列しながら周辺の商店で食材を買い集め、その食材でスープを作って食べる。その間、羊屋さんを中心に、生前の猫のことや、このプロジェクトの過去の活動などについて語られる。
しかし、ここでもやはり、「ものごとの終わりについて考える」、「東京をとむらう」というテーマについて直接語られることはない。猫は話題の中心になるが、東京は必ずしも直接的に話題にはならない。
にもかかわらず、その合間の日常で、自分の中の「終わり」に意識を向けたり、自分の外の「終わり」と重ねたり、東京に思いをめぐらせたり、死について改めて考えたりするようになった。
東京スープとブランケット紀行はこれで終わるが、よくわからないものごとについては、今後も考え続けていくのではないかと思う。

佐藤 浩太（さとう こうた）

荒川河川敷でのとむらい

終わりの風景

東京スープとブランケット紀行　アシスタントディレクター　伊藤 馨

スープを囲みながら人や物事の末期を思うこと。おそらく人間が火を手に入れてから世界中で行われ続けてきたこと。それは喪失という避けがたいものを乗り越えるために人々が編み出した知恵の一つであり、寄り集まり「終わり」について語り合うことによって人間という種は喪失から学び、未来を切り開き地球上を覆うまでになった。

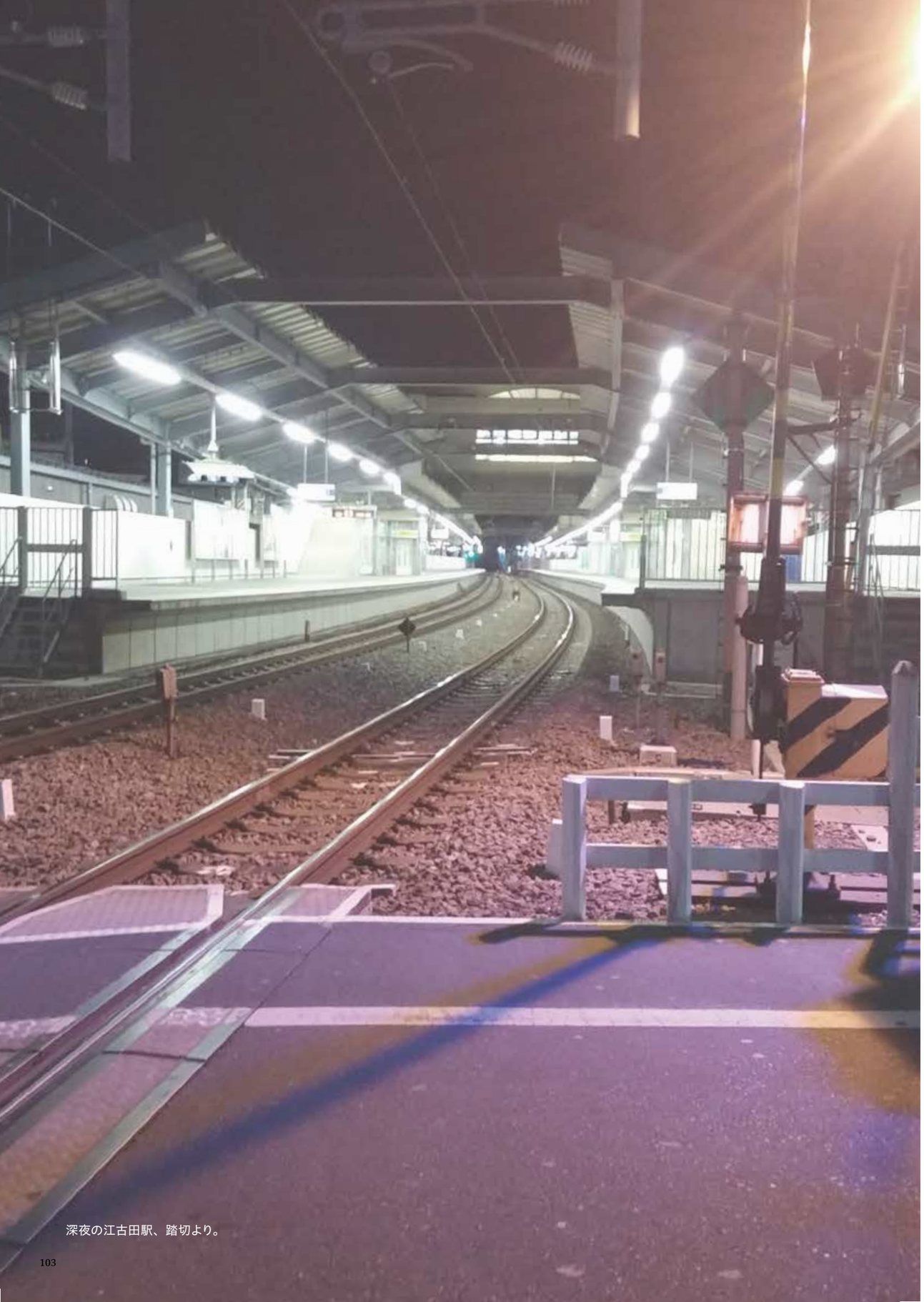
「何かの終わり」に際して集まるという行為は最近ではその機会も徐々に減りつつあり、個々に「終わり」と対峙しなくてはならないことが増えてきたように思う。本来「何かの終わり」というものは、日常の中にある句読点のようなものであった。句読点のタイミングで息継ぎをして過去をふりかえり、また未来を見る。そういう時間ではないだろうか。そういう時間を作るにはどうしてもある種のわずらわしさが伴うものであるが、そのわずらわしさこそが句読点の正体なのではないかと思う。

ここ十数年の間に大量の情報が無差別に得られるようになり、大量の過去に埋もれることになった。何かが起き、それが情報として発信されて手元に来る時には、その何かは既に過去のことである。毎秒作られる大量の過去を高速で受け取ることが出来るようになったことで、本来なら生活に必要のない「終わり」を見続けなくてはならなくなり、大量の「終わり」は句読点を単なる記号に変えてきた。寄り集まることで喪失を乗り越え、あるいは受け入れ、未来を見る力を蓄えながら生活してきた人間という種にとって、句読点は「現在」を確認し、未来のための住環境を変えていく力を蓄える場であったのではないかと思う。身近ではない大量の「過去」に埋もれることで、ほんの少し前の「過去」に始末のつけ方がわからなくなってきてしまったのではないだろうか。

東京はその前にあった江戸を下敷きに都市構造が作られている。江戸は人やものが還流することが前提で作られていた。江戸から東京に変わったときに都市の急激な近代化を進めていく方法として、人や情報の流れを堰き止め集積する構造に変化させた。もともとの器の江戸はあっという間に溢れ、ダムで堰き止められた水が谷あいの村を飲み込むように、近隣の町村を飲み込み「東京」が拡がっていった。一旦飲み込まれてしまうとそこは「東京」という情報に変わってしまう。こうして「東京」の「終わり」が始まった。

大量の「過去」に埋もれていく都市は息継ぎが出来ないままに拡大を続けている。そこに住む我々も段々と薄くなる空気に首を傾げつつ、呼吸がままならなくなっていく。「現在」や「未来」を取り戻すために「身近な過去」を誰かと共有し、句読点を打つ時間を作るところから始めたい。僕にとっての生まれ育った江古田という土地で。

伊藤 馨（いとう けい）
舞台照明家・ワークショップコーディネーター
照明デザイナーとして、国内外の様々なジャンルの照明デザインを行うと共に、演劇ワークショップなどのコーディネートも行っている。練馬の江古田生まれの中野の江古田育ち。東京スープとブランケット紀行の中でも江古田担当。アシスタントディレクターとしてディレクションの補佐も担当。



深夜の江古田駅、踏切より。

東京スープとブランケット紀行
年表・地図・戯曲

4年間の江古田で起きたささやかな出来事「東京スープとブランケット紀行」。
その時期に起きた世の中の出来事と、深く過去の歴史へと掘り下げた年表。そして、数えきれない程の探索を重ねた江古田の街の地図に感謝をこめて。

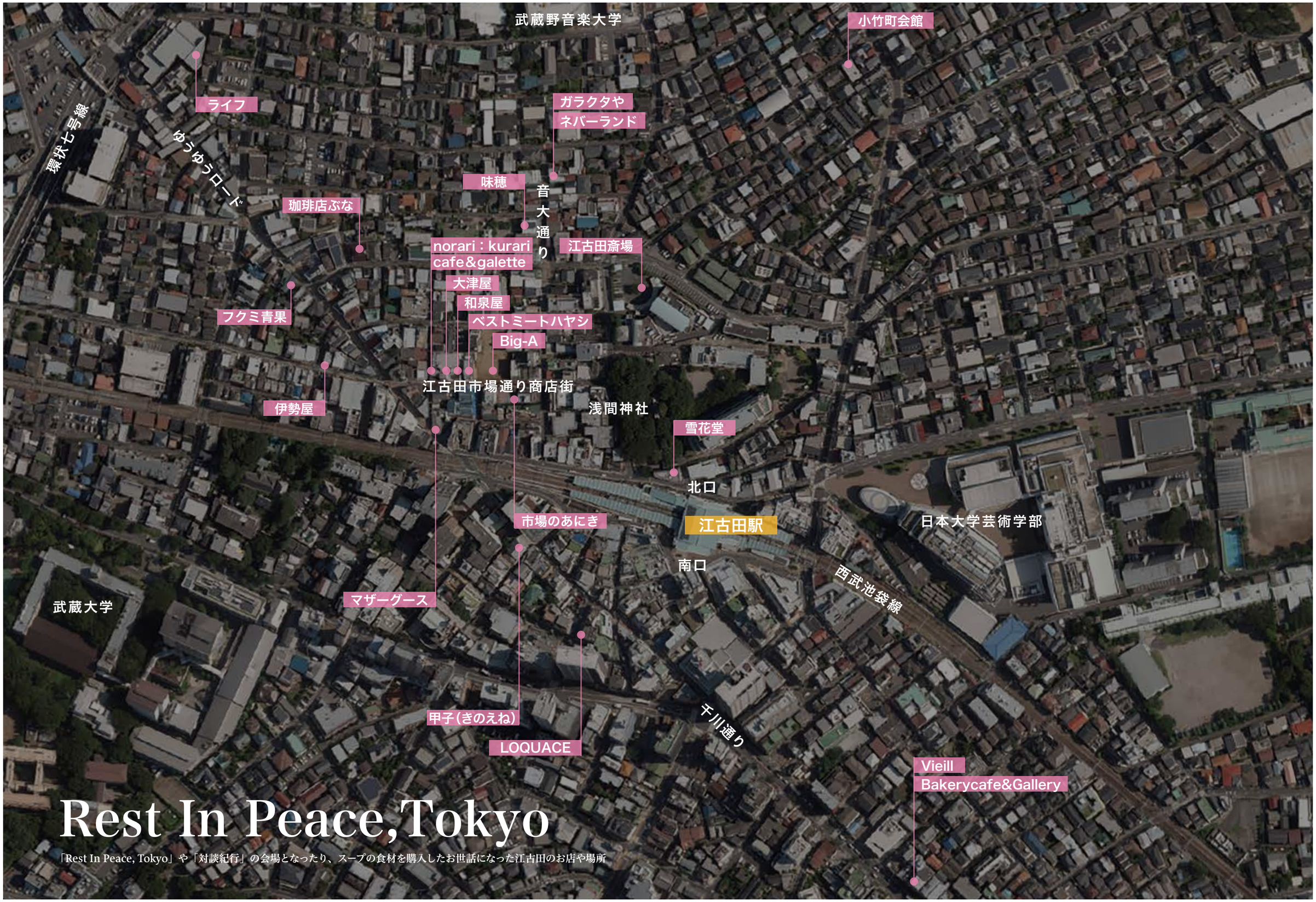
最後に、以上すべての出来事が始まる前に、羊屋白玉を突き動かした衝動、そのすべてを閉じ込めた戯曲「Rest In Peace, Tokyo - 安らかに眠ってください。この言葉は、しばしば、生きているものや、ペテン師の騙（かた）りである - 」を。

江古田のお正月の風物詩 干支の絵（加藤材木店）

西暦	和暦	東京スープとプランケット紀行	江古田	日本	世界
古代	古代		練馬に人が住み始めたとされる(1万5000年前)	日本最古の豆粒状土器(煮る道具)、使われる(長崎/紀元前8000年)	世界最古の焚き火跡(ケニアのクービ・フォラ/160万年前)
1785年	天明5年		この時期、「豊島郡上板橋村江古田新田」と呼ばれていた	青ヶ島、天明の大噴火により島民200名余りが八丈島に避難する この時期、天明の大飢饉が日本列島を襲う	イギリスで世界最古の日刊新聞『タイムズ』創刊(1月1日)
1832年	天保6年			噴火から約半世紀、青ヶ島の島民、青ヶ島への還住を果たす	ヨハン・ウォルフガング・フォン・ゲーテ死去(3月22日) ギリシャ、オスマン帝国から正式に独立(7月9日)
1895年	明治28年		明治天皇の愛馬・金華山号、26才で死去(5月22日) 余生を送った江古田の御領地に埋葬されるが、天皇の命で掘り起こされ剥製にされる	江戸幕府最後の大老、酒井忠績死去(11月30日)	アルフレッド・ノーベル、ノーベル賞設立のもととなる遺言状に署名(11月27日)
1921年	大正10年		江古田の御領地、その半分が財団法人助葬会(現在の社会福祉法人東京福祉会)に御下賜される 現在の江古田斎場(8月6日)	メートル法公布(4月11日) 原敬首相、東京駅で暗殺される(11月4日)	空気入りタイヤ開発者、ジョン・ボイド・ダンロップ死去(10月23日)
1922年	大正11年		武蔵野鉄道(現在の西武池袋線)「江古田駅」開業(11月1日) 同時期に江古田市場の前身となる総合市場が誕生	大隈重信死去、公国民葬が行われる(1月17日)	ヨシフ・スターリン、ロシア共産党書記長に選出される(4月3日) ベニート・ムッソリーニ、イタリア王国首相に就任(10月31日)
1923年	大正12年		江古田の御領地、その半分が宮内省により東京感化院(現在の社会福祉法人鐘華学院)に御下賜される(4月24日)	関東大震災(9月1日)	ウォルト・ディズニー、カンパニー創立(10月16日) アドルフ・ヒトラーの国家社会主義ドイツ労働者党などにより三ヨンクンニ揆、起こされる(11月8日)
1940年	昭和15年		この時期、「東京府東京市板橋区江古田町」と呼ばれていた	幻の東京オリンピック、1938年に日本政府が開催権返上を閣議決定	ソビエト連邦とフィンランド、モスクワで平和条約に調印、冬戦争終わる(3月12日)
1944年	昭和19年		江古田市場、戦時下で強制撤去される	東海道沖で東南海地震発生(12月7日)	連合軍によりパリが解放される(8月)
1945年	昭和20年			第二次世界大戦、終戦(8月15日) 秋葉原電電気街が露店として開業	
1946年	昭和21年		江古田市場、再開する	阿蘇山が噴火、牛馬200頭余り死亡(5月)	フランスで第四共和国憲法制定(10月13日)
1947年	昭和22年		練馬区、板橋区から分離独立し23番目の特別区となる(8月1日) 江古田文化劇場 開館(11月)		ヘクラ火山(アイスランド)が噴火
1957年	昭和32年		この翌年(昭和33年)、喫茶店トキ 開店	小河内ダム(奥多摩湖)完成、旧小河内村を中心とする住民945世帯は代替地に移住(11月26日)	西側諸国でテレビが普及、ラジオにかわり主要なメディアとなる
1962年	昭和37年		この時期、住居表示の変更により練馬区から「江古田」の地名が消滅	東京都の人口、1000万人を超える 首都高速道路、京橋～芝浦間で初の開通(12月20日)	マリリン・モンロー死去(8月6日)
1964年	昭和39年		この前年(昭和38年)、江古田駅北口が完成	第18回夏季オリンピック・東京大会開催(10月10～24日)	マーティン・ルーサー・キング・ジュニア、ノーベル平和賞を受賞(10月14日)
1984年	昭和59年		江古田文化劇場 閉館	グリコ・森永事件起きる	第23回夏季オリンピック・ロサンゼルス大会 開催(7月28日～8月12日)
1985年	昭和60年		アッシュベーク Bee Bee 開店(6月)	松田聖子と神田正輝が結婚(6月24日)	プラザ合意(9月22日)
1989年	平成元年			昭和天皇崩御、昭和から平成に	ベルリンの壁崩壊(11月10日)
1990年	平成2年	まぶ、江古田に、生まれおちる(5月5日)	カラオケ館1号店、江古田に開店	バブル景気最後の年 東京芸術劇場開館(10月30日)	東西ドイツの再統一(10月3日)
2001年	平成13年		株式会社松屋フーズ、東証1部上場する(1996年に江古田で開業)	小泉純一郎、第87代首相に就任(4月26日)	アメリカ同時多発テロ(9月11日)
2006年	平成18年		パーラー江古田 開店	石原都政において、東京都議会で2016年夏季オリンピック大会開催招致を決議(3月8日)	アメリカ合衆国の人口が3億人を突破
2009年	平成21年		小竹浴場 閉店(12月20日)	東京都、2016年夏季オリンピック大会開催招致に落選(10月2日)	マイケル・ジャクソン、死去(6月25日)
2010年	平成22年		江古田駅、駅舎改築 日本大学芸術学部江古田校舎、新校舎完成(4月)	石垣島で日本最古となる2万年前の人骨発見(2月4日)	ハイチでマグニチュード7.0の地震が発生(1月12日)

西暦	和暦	月	東京スープとブランケット紀行	江古田	日本	世界
2010年	平成22年			ランチハウス洋包丁 閉店(8月)		世界人口、10月31日に70億人に到達したと推計される(国連の2011年版「世界人口白書」より)
2011年	平成23年			サン・アダチ 閉店(10月16日) 瀧島酒店 閉店(12月31日)	東日本大震災(3月11日)	
2012年	平成24年		まぷ、息をひきとる(5月17日)	やぐら、道路拡張工事により閉店(2月)	東京スカイツリー開業(5月22日) 猪瀬直樹、東京都知事に就任(12月16日) 安倍晋三、第96代内閣総理大臣に就任(12月26日)	第30回夏季オリンピック・ロンドン大会開催(7月27日〜8月12日)
2013年	平成25年			喫茶店トキ 閉店(5月17日)	東京、2020年夏季オリンピック大会の開催地に決定(9月7日) 特定秘密保護法、成立(12月6日) 猪瀬直樹都知事、退任(12月24日)	教皇ベネディクト16世、通常枢機卿会議の席上で教皇職を辞任することを表明(2月11日)
2014年	平成26年	1			理化学研究所の研究者らがSTAP細胞を発見したとする論文をネイチャーに発表(1月30日) 舛添要一、東京都知事に就任(2月11日)	タイ政府が反政府デモ鎮静化に向け「非常事態宣言」を発令(1月22日)
		2		韓国家庭料理パクちゃん家 閉店(2月17日)	猪瀬直樹、東京都知事に就任(2月11日) 高さ300m、日本一高いビル「あべのハルカス」全面グランドオープン(3月7日) 消費税8%に引き上げ(4月1日)	第22回冬季オリンピック・ソチ大会、開催(2月7〜23日)
		3		なか勢 閉店(3月16日) たこ焼き大革命 閉店(3月29日)	国立競技場(国立霞ヶ丘陸上競技場)、新国立競技場への建て替えに向け閉鎖(5月31日)	ロシア、クリミア共和国の独立を承認(3月17日)
		4			神戸市須磨海浜水族園で飼育されていた国内最高齢の雄ラッコ「トコ」、死去(6月23日)	韓国の大型旅客船セウォル号が転覆・沈没(4月16日)
		5	東京スープとブランケット紀行、はじまる(5月17日) 月に一度の江古田スープ開催を決める		集団的自衛権の行使を容認する憲法解釈を閣議決定(7月1日)	中国清朝・粛親王の末娘・愛新覚羅顕琦、死去(5月26日)
		6			記録的集中豪雨により広島市で大規模な土砂災害が発生(8月20日)	「イスラム国」樹立宣言(6月29日)
		7		山本文具店 閉店(7月31日)		イスラエル軍がパレスチナ自治区ガザを空爆開始(ガザ侵攻)(7月8日)
		8				世界保健機関(WHO)が、西アフリカでのエボラ出血熱の感染拡大について「国際的な公衆衛生上の緊急事態」と宣言(8月8日)
		9	青ヶ島へ(9月8〜11日)	演劇活性化団体uni-ちょいとそこまでプロジェクト① 練馬区・江古田編『ナイス・エイジ』上演(9月20〜23日)		スコットランドで独立の是非を問う住民投票(9月18日)
		10	対談紀行2014秋篇(10月8日)		御嶽山噴火により登山者ら27名死亡(9月27日)	マララ・ユスフザイ、最年少でノーベル平和賞受賞(10月10日)
		11			青色発光ダイオード(青色LED)を開発した赤崎勇、天野浩、中村修二、ノーベル物理学賞受賞(10月7日)	
		12	クリスマス会(12月23日)	ドトール江古田北口店 閉店(12月20日) 江古田市場 閉場(12月31日)	俳優の高倉健、死去(11月10日)	米オレゴン州、末期の脳腫瘍のブリタニー・メイナード、宣言通り尊厳死(11月1日)
2015年	平成27年	1			第47回衆議院議員総選挙・最高裁判所裁判官国民審査投開票(12月14日) 女優・吉行和子の母で美容家の吉行あぐり、肺炎のため死去(1月5日)	アメリカとキューバ、国交正常化交渉の開始を発表(12月17日) 仏・パリ中心部 風刺週刊誌「シャルリー・エブド」本社で襲撃テロ、死者12人、犯人逃走(1月7日)
		2		Select Shop FuFu+Cafe 閉店(2月7日) グルメシティ江古田店 閉店(2月22日)	イギリス王室ウィリアム王子が初来日、東日本大震災の被災地などを訪問(2月26日)	「スター・トレック」のミスター・スポックを演じた米俳優のレナード・ニモイ、死去(2月27日)
		3	対談紀行2015春篇(3月8日) ブックレット『青ヶ島』発行(3月8日)	あさか麺工房江古田店 閉店(3月29日)	東京都渋谷区議会、同性カップルに「結婚に相当する関係」を認める証明書を発行する条例成立(3月31日)	マイクロソフト共同創業者、ポール・アレン、1944年にフィリピン・シブヤン海に沈んだ戦艦「武蔵」発見(3月3日)
		4		ガラクタ出版(ガラクタや ネバーランド)、「たぬきたん(奇譚)」発行開始(4月4日) 西武池袋線、開業100周年(4月15日)	東京文化発信プロジェクト室、アーツカウンシル東京に組織統合(4月1日) 「大阪都構想」の是非を問う住民投票(特別区設置住民投票)投開票、反対多数で廃案(5月17日)	ネパールでM7.8の地震発生(4月25日)
		5		サウスゲート 閉店(5月23日)	選挙権の年齢を18歳以上に引き下げる「改正公職選挙法」成立(6月17日) 新国立競技場計画、白紙撤回(7月17日)	インド、記録的熱波により2000人以上死亡
		6	奥多摩へ(6月24〜25日)		戦後70年談話、発表(8月14日)	連邦最高裁判所、アメリカ全州で「同性婚は合憲」とする判断(6月26日)
		7		はんこ広場江古田店 閉店(7月24日)		アメリカとキューバ、1961年以来54年ぶりに国交を回復、相互に大使館が開設される(7月20日)
		8		銀のさじ書店 閉店(8月31日)		北米大陸最高峰の山「マッキンリー」(6194m)、先住民の呼び名「デナリ」(「偉大なもの」の意)に改称(8月31日)

西暦	和暦	月	東京スープとブランケット紀行	江古田	日本	世界
		9	第1回とむらいインタビュー撮影(草梛亮・草梛佐智子、9月30日)	唐変木 閉店(9月26日)	安全保障関連法、成立(9月19日)	シリアを中心とした中東難民、欧州に殺到
		10	対談紀行2015秋篇(10月4日)	GEO江古田北口店 閉店(10月18日) 珈琲舎歩歩 閉店(10月30日)	国民一人一人に12ケタの番号を割り当てるマイナンバー制度スタート、通知カードの発送開始(10月5日)	TPP総合対策本部第1回会合が開催され、TPP協定交渉の大筋合意が決定(10月5日)
		11		アミューズメント・フタバ 閉店(11月15日)	漫画家の水木しげる、多臓器不全のため死去(11月30日)	フランス・パリ中心部の劇場などで同時多発テロ、死者129人、負傷者352人、容疑者7人死亡(11月14日)
		12		コナカ江古田店 閉店(12月6日)	新国立競技場デザイン、A案「木と緑のスタジアム」に決定(12月22日)	理研・森田グループ、新元素「113番目」(2004年合成に成功)の命名権獲得(12月31日)
2016年	平成28年	1	大江戸線沿線めぐり(1月9日)		マイナンバー制度、本格運用開始	デビッド・ボウイ、がんのため死去(1月10日)
		2	対談紀行2016春篇(2月21日)		平成27年度国勢調査、人口速報集計結果を発表 1920年の集計開始以来、初の減少(2月26日)	ファンクバンド「Earth Wind & Fire」メンバーのモーリス・ホワイト、死去(2月3日)
		3	第2回とむらいインタビュー撮影(小林えつ、3月4日) ブックレット『ためらって、さまよって、とむらい』発行		四代目江戸家猫八、進行性胃がんのため死去(3月21日)	建築家のザハ・ハディド、心臓発作のため死去(3月31日)
		4			熊本地震(4月14日)	歌手プリンス、死去(4月21日)
		5			おたる水族館で飼育されていた国内最高齢のゼニガタアザラシ「トラ」、老衰のため死去(5月4日)	オバマ大統領、現職の大統領として初の広島訪問(5月27日)
		6	対談紀行2016紫陽花篇(6月12日)		舛添要一都知事、退任(6月21日)	イギリス、国民投票でEU離脱を決める(6月23日)
		7		喫茶ポルト 閉店(7月31日)	第24回参議院議員通常選挙、投開票(7月10日)	第76代イギリス首相にテリーザ・メイが就任(7月13日)
		8	三崎港へ(8月8～9日)	丸福大勝軒 閉店(7月31日) プリンセスガーデン 閉店(8月28日)	小池百合子、東京都知事に就任(8月2日)	第31回夏季オリンピック・リオデジャネイロ大会、開催
		9			天皇陛下、お気持ちを表明(8月8日)	小池百合子都知事と安倍総理ら、閉会式に出席(8月5～21日)
		10		四代目鎌倉酒店江古田店 閉店	東京都、豊洲市場の地下水から環境基準を超えるベンゼンとヒ素が検出されたと発表(9月29日)	シリアでアサド政権と反体制派の停戦が発効(9月12日)
		11	対談紀行2016秋桜篇(11月13日)	モツ煮・串焼き山ちゃん 閉店(11月27日)		
		12		レンタルスペース甲子(元手打ちそば甲子)閉店(12月31日)		ソロモン諸島沖でM7.8の地震が発生(12月9日)
2017年	平成29年	1	小山田さんとリヤカー、江古田に来る	ラーンガイ 閉店 SEVENS江古田店 閉店(1月5日) Wild Nature 閉店(1月31日)		トランプ政権発足(1月20日)
		2		牛ちろ 閉店(2月19日) モスバーガー江古田旭丘店 閉店(2月28日)		
		3	ブックレット『お迎えの時』発行(3月22日)	SAD CAFE 閉店 (3月11日)		
		4				
		5	R.I.P.TOKYO はじまる (5月17日@Vieill Bakerycafe&Gallery)	武蔵野音楽大学、江古田新キャンパス完成 イタリアントマトCafé Jr. 閉店(5月31日)	鳥取県中部地震(10月21日)	
		6	R.I.P.TOKYO はなまる(6月19日@小竹町会館)	珈琲小屋なみま 閉店(6月18日)	113番元素、日本に由来する「ニホニウム(nihonium、元素記号：Nh)」となることが確定(11月30日)	
		7	R.I.P.TOKYO はぐれる(7月25～27日@青ヶ島) R.I.P.TOKYO みとれる (7月17日@norari:kurari)	キッチン太郎 閉店(7月15日)	糸魚川市大規模火災(12月22日)	
		8	R.I.P.TOKYO きこえる(8月11日 @小竹町会館)	norari:kurari 閉店(8月8日)	豊洲市場の地下水モニタリング調査の最終結果、公表される(1月14日)	
		9			毎月月末金曜日の午後3時終業を奨励する「プレミアムフライデー」初実施(2月24日)	
		10	R.I.P.TOKYO くすぐる (10月14日@江古田斎場 第二会館二階 大悲堂)	Cafe huit 閉店(10月10日) とんかつ坂井精肉店江古田店 閉店(10月20日)	築地市場の豊洲移転問題について、石原慎太郎元東京都知事の記者会見が開かれる(3月3日)	
		11	R.I.P.TOKYO みつける(11月17日@珈琲店ぶな)	GARAGE STORE 閉店(10月31日)	フィギュアスケート選手の浅田真央、自身のブログで現役引退を表明(4月10日)	
		12		養老乃瀧江古田店 閉店(12月30日)	東京芸術祭2017開催(9月22日～12月4日)	
2018年	平成30年	1		伝説のすた丼屋江古田店 閉店(1月10日)	第48回衆議院議員総選挙・最高裁判所裁判官国民審査、投開票(10月22日)	
		2		第5東京ビル解体開始、入居していたすべての店舗が営業を終了(2月13日)	安倍晋三、第98代内閣総理大臣に就任(11月1日)	
		3	東京スープとブランケット紀行、アーツカウンシル東京の事業としてピリオドを打つ	サンクス江古田栄町店 閉店(2月26日)	1993年以来となる皇室会議にて、今上天皇の譲位の日程が2019年4月30日に決定(12月1日)	
					群馬県の本白根山が噴火、訓練中の自衛隊員らに噴石があたり男性陸曹長が死亡(1月23日)	
					豊島区、野外劇場建設に向け、池袋西口公園の円形緑地撤去工事に着工(2月5日)	
					九州北部豪雨(7月5～6日)	
					豊島区、2019年の東アジア文化都市の国内候補に決定(8月8日)	
					「共謀罪」法、成立(6月15日)	
					「113番目」(2004年合成に成功)の命名権獲得(12月31日)	
					1800年代生まれの最後の一人とされてきたイタリアの世界最高齢の女性エンマ・モラーノ、117歳で死去(4月15日)	
					雨期に入ったスリランカで記録的な大雨により洪水や土砂災害が発生(5月27日)	
					トランプ大統領、地球温暖化対策の国際枠組み「パリ協定」からのアメリカの離脱を正式表明(6月1日)	
					国連、核兵器禁止条約を採択(7月7日)	
					デンマーク女王・マルグレーテ2世の配偶者ヘンリク殿下、自らの死後女王とは別の場所に埋葬してほしいとの意向を発表(8月3日)	
					メキシコ、チアパス州でM8.2の地震が発生(9月7日)	
					核兵器廃絶国際キャンペーン(ICAN)、ノーベル平和賞受賞(10月6日)	
					#Metoo、世界的に広がるカナダ・トルドー首相、カナダ政府の過去の性的少数者差別を謝罪(11月28日)	
					イランで大規模な反政府デモが発生(12月28日)	
					アメリカ・トランプ大統領、就任から1年が経過(1月20日)	
					デンマーク・ヘンリク殿下死去、生前の遺言通りに女王と同じ墓所には埋葬されなかった(2月13日)	



Rest In Peace,Tokyo

「Rest In Peace, Tokyo」や「対談紀行」の会場となったり、スープの食材を購入したお世話になった江古田のお店や場所

本書「東京スープとブランケット紀行２０１４－２０１７」を、お目通しいただきありがとうございます。この４年間で、東京の江古田を中心に起きたささやかな出来事、これら全てが始まる前に、羊屋白玉を突き動かした衝動、そのすべてを閉じ込めた戯曲を、最後にご覧ください。

Rest In Peace, Tokyo

安らかに眠ってください。この言葉は、しばしば、生きているものや、ペテン師の騙りである。

冬至

一年でいちばん夜が長い日。
太陽の光がいちばん弱まるこの日は、精霊は少なくなる。精霊が溢れ出るように、沸き上がるように、迎え入れるように、いきものは大地を踏みならし、空を轟かせる。一晩中、火を絶やすことなく。

一日一日と夜が長くなっていったある夜のこと。神々が集まり、互いにこう語り合ったという。「夜があまりにも長すぎる。この地を照らす役目を、われわれが引き受けようではないか。」と。

山のてっぺんに火が灯され、「さあ。火の中へ飛び込もう。」神々は言った。
火はたいそう燃えさかっている。身を投じようとしたが、その熱気は激しく、近づいては立ちすくむばかりだった。その時、空から鳥たちが、森からは虫や獣たちが、海からは魚たちが飛び込み、焼け尽きた。
しばらくして、神々は、火に飛び込んだものたちが、太陽になって、東の空にのぼるのを、仰ぎ見た。と。

わたしの猫は、そう話を続け、「その時、俺も飛び込んだんだ。」と、言った。
「見ろよ。俺の毛皮、金色の虎模様だろ。これはそんときの焼け跡だ。」

「ずいぶん、こんがり焼けたね。」と、わたしが言うと、「ああ。そうだ。近所のミケいるだろ。あいつも、燃えた時、黒と白と茶色の斑点が残ったんだ。」

猫はそう言いながら、好物の、かぼちゃおしるこ、を舐めた。
粒あんの黒と、白玉の白と、かぼちゃの茶色は、ミケを思い出させたけど、そのことはわたしも猫も言わなかった。猫は、粒あんが好物だった。

・・・・・・・・・・・
冬至の夜咄の茶事のおともに、
「かぼちゃのおしるこ」
粒あん、かぼちゃ、白玉粉、水。

夏至

一年でいちばん昼が長い日。
太陽の光が強く輝くこの日は、日暮れとともに、精霊がたくさん寄し押せて来る。
精霊といきものはいっしょに渦を描いて、目がまわるほど踊る。夜を徹して、火を絶やすことなく。

「俺は、その渦のまんなかで、いつも謳ってたんだ。」「なんの歌？」
わたしの猫は答えた。「歌うというより、謳うだよ。あちらのものたちやこちらのものたちが踊っているからね。彼らに挨拶をしたり、紹介をしたり、敬意と友情をこめて謳ってた。」

わたしは、このわたしの猫が亡くなる二日前の夜のことを思い出した。臥せったまま、看病に駆けつけた友達の目を見ながら、一晩中、朗々と語り続けたのである。友達は、「何を言っているかは分からないけど、あれは演説よ。」と言っていた。

わたしの猫は、体ごと、生と死の渦の中にいた。そして、死の一歩手前、口を大きく開けて欠伸をしたので、この際だから、口の中をよく見ておこうと思って、顔を近づけると、さらに大きく縦に口を開き、血を吐いた。それは慟哭だった。わたしは、猫の皮袋のような体から吐かれる、おびただしい量の血を浴びていた。五感は飛んでしまい、臭いも温度も時間もおぼえていない。なのに、昭和の文豪みたいな死にっぷりだな。と、不謹慎なことを思い、血まみれで笑っていた。

定期的にこのようにわたしの前に現れるわたしの猫は、永遠の臨終を生きているのだろうか。同時にわたしも、わたしの猫の永遠の臨終を、忘れることなど出来ないだろう。忘却に抗えない毎日は、身が引きちぎられる程つらく、涙でやわらげることも難しく、そして豊かだ。これからもずっと喪の作業に明け暮れるだろう。弔辞を読んだのは、5年後だった。

弔辞を読む前夜、ぶつぶつと練習する間、わたしの猫は、またたびの冷たいスープを舐めていた。
生前、またたびが好物なのかどうか確かめたことがなかったので、尋ねてみると、
「そんなに好きじゃないけどね。猫族のたしなみだね。特に暑い日は。」と答えた。

・・・・・・・・・・・
夏至の夜咄の茶事のおともに、
「またたびの冷たいスープ」
またたびの枝、塩。水。かつお節。針生姜。またたびの白い花びらを添えて。

秋分

太陽が、真東から昇って真西へ沈み、昼の時間と夜の時間が同じ長さのある秋の日。
中道を大事にする信仰が現れてからは、昼と夜の均衡がとれたこの日に、精霊はやってくるという。
同時に、この均衡は、長い時間をかけて、街や都市を育てていった。

しかし、その日、その街は消えていた。コスモスの咲いている一本道を歩く。まだ瓦礫とは呼べない生活用品の色に溢れた山。今は穏やかな海。人影は殆どない。

大津波が避けて通ったかのように、山の上の神社だけが、凛とあった。日が落ちて、お囃子が聞こえて、虎に扮した舞いが始まった。古くは漁師達によって伝承され、大漁豊穣を讃える他、結婚式や開店祝い等、お祝いの目出たい席に登場するのが虎の舞い。翻って、お弔いには、鹿子踊り。大津波で肉体を失った魂達と共に踊る鎮魂の舞いであった。

「でもね」と虎の舞手が言った。「自分の葬式は、虎舞もやってほしい。」と。仲間が「目出たい。目出たい。」と、笑っていた。

わたしの猫の一周忌の秋に出会ったこの虎舞は、天と地を結ぶ仲立ちのように現れて、虎の毛並みが立ち上がったことを、見るものたちが見届け終わると、すーっと消えていった。まるで、能における「翁」のような、全ての芸能の源で、芸能を行うための条件が整えられたその瞬間だった。わたしは、すこし顎をあげて周りを見た。再び、あの頃を思い出しながら、台所で湯気を見つめているわたしがいた。

自粛ムードだったけど、いわゆる311直後の上演を決めたのは、あの悲劇に対してわたしが出来るたったひとつの応答だったのかもしれない。やがてわたしの記憶は声になっていた。「非日常へと突き飛ばされた自分も含め全ての人々へ。いかなる国家の危機に置かれても、それぞれにはそれぞれの日常があって、だから、わたしも日常の証である舞台で生きることを選んだんだけど、今でも悩んでる。あれ、海苔が消えた。」

茹で上がった秋の新蕎麦に、たっぷり海苔をかけて、わさびをすりおろしているそのちょっとの隙に、わたしの猫は、海苔だけ食べて行ってしまった。

・・・・・・・・・・・
秋分の夜咄の茶事のおともに、
「海苔たっぷりの新蕎麦」
秋の新蕎麦、かつお節、醤油、味醂。わさび、もみ海苔。

春分

春分の夜咄の茶事のおともに、
まぐろのちらし寿司
まぐろ、錦糸卵、大葉、きゅうり、酢飯。

・・・・・・・・・・・
わたしの猫の主食は、まぐろだった。それはそれは、アリクイがアリしか食べないくらい徹底していた。
なので、猫のなきがらを、なわばりの桜の樹のもとに埋めた時は、お見舞いでいただいたたくさんのまぐろもいっしょに埋めた。わたしの友達は、わたしの猫の友達でもあったのである。

春分の日に還暦を迎える、お姉さんとよんでいる友人は、伴侶の死から数年経って、長く住んだニューヨークから、生まれ育った街、東京へ戻って来た。同じころ、彼女の親友もまた、伴侶の死から数年経ち、東京から故郷ニューヨークへ戻ったという。

伴侶が亡くなるという経験が引き起こす症状は数有れど、傾けた情熱が突然冷めてしまうという喪失感の連続は、ノスタルジアと同じくらい重傷である。でも、彼女ふたりの、居を変えるという判断は、漢方薬のようにその症状を和らげるだろう。

では、わたしは？どこへ？

いただきものの白桃とアイスクリームで、水晶のようなパフェを盛り合わせていると、わたしの猫の長い舌がのびてきた。舐めとられ溶けてゆくパフェを見ながら、２００１年9月11日、ニューヨークの東の端に住んでいた頃を思い出していた。

テレビをつけると、盛りすぎたソフトクリームがとろけるように崩れ落ちる双子のビルが目に入った。勢い余って、外に出ると、近所のアフガニスタンレストランの窓が砕けちり、銃声が聞こえた。この悲劇の原因は、イスラムとカソリックの宗教戦争だとか、聖戦だとか、報じられることも多かったけど、わたしには、なぜかそのようには思えなかった。

黄金期と同時に不浄な街を指す60年代のニューヨーク、その後、ベトナム戦争を経て、マリファナ、エイズ、レイプ、拳銃、そして、アーティストも、マンハッタン島から一掃し、街が浄化されたことを、わたしは知っている。数年後、ひとっこひとりいなかったブルックリンの倉庫街は、ハイファッションエリアになり、のぞき部屋はディズニーショップになっていた。

かたや、東京は、オリンピック開催にむけての涙ぐましい努力のその裏で、エスニックタウンでは、昼夜働いている外国人労働者、韓流ショップ店の青年、彼らの多くは四世であるにもかかわらず、しつこい職質を浴びせられていた。そして、日常に被災したとしか言いようのない路上生活者たちは虫けらのように移動させられていた。東京の浄化が、公然と始まっていた。

街の長達が、あまりにもストレートに民族浄化をイメージさせながらも、犯罪率の低い治安の良さを目指すと言ってはばからず、オリンピックは経済効果だからね、と言っていたのをわたしは忘れない。

２００１年に、ニューヨークがほぼ完全に無菌になったその瞬間に、空から何が突っ込んできたのかは、言うまでもない。そしてその発作の後遺症はいまどうなっているのか。

東京の街にも、盛りすぎのソフトクリームのようなビルは、有り余る程ある。肌や髪や目の色、文化、言葉、宗教の違いこそが、都市の呼吸を保つ免疫そのものだとおもう。

太陽の光がもっとも弱まり、精霊がすくなくなる頃のように、わたしたちは大地を踏みならし、精霊を招き入れたい。

歴史や、いきものの一生は、まっすぐな一本の線なのか、それとも螺旋を描く円なのか。

生きていた頃に何をしていたかなんて、生きているときには何もわからないのだろう。

「安らかに眠ってください。」などという言葉は、しばしば、生きているものの欺瞞のために使われる。

春の北極星が輝く夜空の下、あちらのものたちや、こちらのものたちが、わたしの猫の眠る庭でさわいでいる。

古代の果てからやってきて、何度かのすれちがいのなかで、わたしの遅れた到着を待ちわび、未来で待っているわたしの猫へ。

Thanks for having the energy to read almost of this book. Here is the final text, more like a script. It means Shirotama's thought before the project starts. What's going on inside of her head?

Rest In Peace, Tokyo

"Rest In Peace" These words are intended to cloak the deceased with tenderness, but often used by the living as a meaningless clichés to deceive others.

Winter Solstice

The day with the longest night of the year.
On this day when the light of the sun is the weakest, there are few spirits. All the living creatures stomp on the earth and roar into the sky to welcome the spirits so they can come gushing out. The fire burns all night long.

One night as the nights were growing longer day by day, the gods gathered together for a discussion. "The nights are far too long. Why don't we take on the role of lighting the Earth?"

A fire was lit at the top of a mountain and the gods said, "Come on. Let's jump into the fire."
The fire burned furiously. They tried to throw themselves into it, but the heat of the flames was too intense that each time they approached the fire, they became immobile. During that time, the birds from the sky, the beasts and insects from the forest, and the fish from the sea jumped into the fire and were burned to ashes. After a while, the gods who did jump into the fire became the sun and were seen to climb the eastern sky.

My cat continued this story, "At that time, I jumped into the fire too," he said.
"Look. My fur is golden and striped like a tiger's. Those are the burn marks from that time."

"You certainly were toasted nicely," I said. "Yeah. That's right. You know that calico in the neighborhood? She got her black and white and brown spots when she was burned."

That is what my cat said as he slurped his favorite dish, pumpkin bean porridge.
The black from the sweet beans, the white from the rice flour dumplings, and the brown from the pumpkin reminded me of the calico cat, but neither I nor my cat mentioned it. My cat loved sweet black beans.

* * *

On winter solstice, the evening gathering over tea is accompanied by
"Pumpkin Bean Porridge"
Black bean, pumpkin, rice flour dumplings, water.

Summer Solstice

The day with the longest daylight of the year.
On this day when the sunlight radiates intensely, a multitude of spirits rise up with the sunset.
The spirits, together with the living creatures, dance dizzyingly in a spiral. All through the night, the fire burns.

"I always sang in the center of the spiral." "What song?"
My cat answered, "More like chanting than singing. The spirits from the next world and the creatures from this world were all dancing together. So, I called out greetings to them and introduced them to each other, I called out with respect and friendship."

I recalled two nights before my cat passed away. He was lying down, and as he gazed at a friend of mine who had rushed over to help take care of him, he talked to my friend, all night long. "I don't know what he's saying," my friend said, "but he was giving a speech."

My cat was caught in the spiral of life and death, with his entire body. And when he was one step away from death, he opened his mouth wide to yawn, and I thought I would take the opportunity to take a good look inside his mouth. I brought my face close to him and he opened his mouth even wider and vomited blood. It was a bitter wail. I was drenched in the blood that came hurling out of my cat's skin bag. My five senses were blown out of the water. I don't have any memory of smell or temperature or time. And yet I do recall having the improper thought: what a death befitting a great literary master of the Showa period! I laughed, covered in blood.

I wonder if my cat who now appears before me periodically is forever living his deathbed? At the same time, I will likely never forget my cat's eternal deathbed. Everyday cannot resist oblivion as I suffer. It's as if my body were being torn apart, and no amount of tears softens my sorrow, and I am fulfilled. I will spend my days in mourning forevermore. Five years had already gone by before I gave a memorial address.

The night before the memorial address, as I muttered my speech to practice it, my cat was lapping up a chilled silver vine soup. I had never asked him while he was alive whether silver vine was one of his favorite foods, so I asked.
"It's not my favorite. But it suits the feline family's palate. Especially on hot days," he replied.

* * *

On summer solstice, the evening gathering over tea is accompanied by
"Chilled Silver Vine Soup"
A silver vine stem, salt. Water. Bonito flakes. Thinly sliced ginger. Garnished with the white petals of the silver vine flower.

Autumn Equinox

An autumn day when the sun rises due east and sets due west, and the length of the day is equal to the length of night.
Since the arrival of religions that prizes centrism, spirits have always come on this day, when day and night are in balance.
At the same time, this balance is what nurtured and grew towns and cities over a long period of time.

However, on that day, the city disappeared. I walked the lone path lined with cosmos. A mountain overflowing with the color of household goods that cannot yet be called rubble. The now calm ocean. And virtually no traces of people.

As if a great tsunami had just missed it, only the shrine at the mountaintop remained standing. Once the sun set, music could be heard and the dance of the tiger began. In the olden days, the tiger dance was handed down by the fishermen to celebrate plentiful catches of fish as well as weddings, store openings, and any other celebratory occasion. On the other hand, for funerals there was the dance of the fawn. It is a dance to console the spirits of the dead, to be danced by the living with the spirits who had lost their physical bodies in the tsunami.

"But you know," said the tiger dancer, "for my funeral, I want people to dance the tiger dance." His friends laughed and said, "Yes that'll be a celebration."

I first encountered the dance of the tiger in the autumn of the first anniversary of my cat's death. The dance seemed to connect heaven and earth, and once the audience witnessed the tiger's fur standing on end, it all disappeared in an instant. It was like the *okina* ritual in *noh* theatre where every elemental source of artistry and all the conditions for the art align in a moment. I raised my chin and looked around. Again, as I recalled those days, I found myself gazing at the rising steam in the kitchen.

Though the whole country was in a mood of self-restraint, the reason I decided to make a show right after 3-11 is because that was the only way I could respond to such a tragedy. Soon, my memory became a voice. "To all human beings, including myself, who have been thrust into extraordinary circumstances. No matter what crisis any nations faces, each and every one of us has our own daily life. That is why I have chosen to live on the stage that is to me the proof of daily life, though I still struggle with it. Oh, my seaweed has disappeared."

I had put plenty of *nori* seaweed atop freshly boiled autumn new *soba* noodles, and in the brief moment when I had gone to grate some *wasabi*, my cat had eaten just the *nori* and gone.

* * *

On autumn equinox, the evening gathering over tea is accompanied by
"New *Soba* with plenty of *Nori*"
Autumn's new *soba*, bonito flakes, soy sauce, *mirin*. *Wasabi*, finely shredded *nori*.

Spring Equinox

On spring equinox, the evening gathering over tea is accompanied by
"Tuna and assorted sushi"
Tuna, finely sliced omelet, perilla leaves, cucumber, sushi rice

* * *

My cat's main diet consisted of tuna. It was almost entirely so, as much as anteaters only eat ants.
So when I buried my cat's remains under the cherry blossom tree that marked his territory, I buried with him all the tuna I'd received from those who came to visit him. All of my friends were my cat's friends too.

A friend who I call my sister, and who was celebrating her 60th birthday on the spring equinox, returned to Tokyo a few years after the death of her partner. She left New York, where she had been living for a long time, to come back to Tokyo where she was born and raised. Around the same time, a close friend of hers who had also lost her partner a few years back, returned to her home town of New York from Tokyo.

There are many symptoms that are triggered by the passing of a beloved life partner, but the relentless emptiness that hits after a concentrated love suddenly turns cold is as grave an affliction as nostalgia. The decision for these two women to change where they live probably alleviated their symptoms like herbal medicine.

What about me? Where should I go?

I was making a parfait that glistened like crystals with the white peaches I received as a gift and ice cream, and my cat's long tongue reached out of his mouth. As I watched the parfait melt under his licking, I was reminded of the time when I lived on the eastern edge of New York, on September 11, 2001.
I turned on the TV and saw the Twin Towers, crumbling like melting mounds of soft ice cream. When I rushed outside, the glass windows of the neighborhood Afghan restaurant had been smashed and I heard gunshots. They reported that the reason for the attack was a religious war between Islam and Catholicism, or that it was a Holy War, but to me, it didn't seem that way.

New York in 1960s was dirty and it was its Golden Age. After that, I know that the Vietnam War, marijuana, AIDS, rape, guns, and artists were run out of the island of Manhattan and the city was cleaned up. Just a few years later, a deserted warehouse district in Brooklyn had become a high fashion area and a Disney Store stood where a peep show used to be.

Meanwhile in Tokyo, behind the scenes of the touching efforts to prepare the city to host the Olympics, in the ethnic neighborhoods, foreign laborers who work day and night and the young people working in Korean shops were being relentlessly interrogated, never mind that many of them had already been in Japan for four generations. And the homeless population, whom one can only say had fallen victim to daily life, were forced to move as if they were nothing but vermin. The clean-up of Tokyo had officially begun.

I cannot forget how the leaders of the city were blatantly trying to realize an ethnic cleansing in the name of the Olympics and its boost to the economy, to push for low crime rates and public safety.

In 2001, New York was almost completely sterilized. I don't have to tell you what came crashing down from the sky. And what are the aftereffects now, from that attack?

The city of Tokyo, too, is overflowing with buildings that stand like overloaded soft serve ice cream. I believe that the differences in people's skin, hair and eye colors, their cultures, languages, and religion are the city's very immune system that preserves its breath.

As we do when the light of the sun grows weaker and the spirits grow fewer, I want us to stomp on the earth and call upon the spirits and invite them in.

Is history, is the life of a living creature, one straight line? Or are they spiraling circles?

While we are alive, we probably have no understanding of what we are doing in life.

"Rest in peace" Words like these are used to deceive by those who are still among the living.

Under the night sky where the North Star twinkles in the spring, creatures and spirits from this world and the next are making a racket in the garden where my cat sleeps.

To my cat who came from ancient times and through a number of missed connections waited for my delayed arrival, and who is yet waiting for me in the future.

東京スープとブランケット紀行

羊屋 白玉　ディレクター
伊藤 馨　アシスタントディレクター
宮原 清美　チーフアドミニストレーター
糸山 裕子　アシスタントアドミニストレーター
齋藤 優衣　アシスタントアドミニストレーター
草棚 亮　デザイナー
糸山 義則　テクニカルディレクター
中澤 佑介　Web デザイナー

森 司　東京アートポイント計画　ディレクター
大内 伸輔　東京アートポイント計画　プログラムオフィサー
中田 一会　東京アートポイント計画　プログラムオフィサー（2015-2016）
芦部 玲奈　東京アートポイント計画　プログラムオフィサー（2014）

前田 愛実　ドラマトゥルク
西田 秀己　ドラマトゥルク
阿部 健一　ドラマトゥルク（http://uni-theatre.com/）
須藤 崇規　映像記録
三上 亮　映像記録（http://mikamiryo.com）
冨田 了平　映像記録
GO　写真記録（go-photograph.com）

荒井 智史（http://www.aogashimakanjutaiko.com）
小山田 徹
Leow Puay Tin
佐藤 浩太

杉田 協士　草棚 佐智子　小林 えつ

小林 エリカ　北川 フラム　菊池 栄春　新川 貴詩　南部 昌平　長島 確　上田 假奈代
狩野 哲郎　高橋 つばさ　安藤 仁美　石神 夏希

菅原 和利　轡田 重則　弥兵衛

江古田でお世話になった皆さん

野村 佐紀子

太田 泰友

主催：東京都　アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）　一般社団法人指輪ホテル

記録集「東京スープとブランケット紀行　2014-2017」

発　行　アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）
監　修　羊屋 白玉
編　集　伊藤 馨　宮原 清美　齋藤 優衣
デザイン　草棚 亮
表　紙　高橋 つばさ
翻　訳　アヤ・オガワ
写　真　GO（go-photograph.com）　中澤 佑介　野村 佐紀子
東京スープとブランケット紀行事務局
印　刷　株式会社グラフィック
発行日　平成30年3月25日

本書に関するお問合せ先：
東京スープとブランケット紀行事務局
web http://soupblanket.asia　mail sec@soupblanket.asia

© 一般社団法人指輪ホテル
© アーツカウンシル東京

本プログラムは「東京アートポイント計画」の一環として実施されました。

東京アートポイント計画は、地域・市民が参画するアートプロジェクトを通じて、東京の多様な魅力を創造・発信することを目指し、東京都とアーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）が展開している事業です。まちなかにある様々な地域資源を結ぶアートプロジェクトを、アーティストと市民が協働して実施・展開することで、継続的な活動を可能にするプラットフォームを形成し、地域社会の担い手となるNPO を育成します。

公益財団法人東京都歴史文化財団　アーツカウンシル東京
〒102-0073 東京都千代田区九段北4-1-28 九段ファーストプレイス8 階
TEL 03-6256-8435
Web http://www.artscouncil-tokyo.jp
E-MAIL info-ap@artscouncil-tokyo.jp

亡くなる二日前のまぷ。羊屋白玉の腕の中で。撮影：野村佐紀子

東京スープとブランケット紀行 2014 - 2017
Tokyo, Soup, Blanket and Travelogue

ARTS COUNCIL TOKYO